



0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 15 20 1 2 3 4 5

始





時233  
654



加藤咄堂著



信

論

大東出版社





## 序

——思想動向と大乘起信論——

私が初めて大乘起信論を読んだのは、今より五十年の昔のことであり、之れを講述してからも、早や三十餘年を経過して居るので、其の間、思想の變遷は實に著しいものがあつて、或る時の如きは全く本書の如きは高閣に束ねられ、又或る時の如きは本書に新検討が試みられたり、所謂盛衰消長、幾變轉がありました。明治以來の思想潮流は大體に於いて、西洋思想の輸入が其の本流を爲し、就中、近代思想の特徴たる唯物的傾向は否むべくもなく、東洋思想であり、しかも唯心的傾向を多分に有せる本書の如きは一部の専門學者若くは好事家の机上を飾るに過ぎず。特に個人主義擡頭の時代に當つては、本書を繙くを



さへ時代遅れの感を抱かしむるに至つた。

しかも、時代は變轉した。唯物主義は行詰り、個人主義は破綻を生じた。されど單なる唯心主義は最早その勢力を復舊すべくもなく、幽玄にして思索的な東洋思想の直に現代に理解せらるべくもなく、こゝに唯心的であり、全體的であり、論理的であり、且つ實踐的な本書の再検討を加へらるべき時代へと還元し來つたのである。

見よ、今日に於て如何に大乘的な語の喧傳せらるゝかを。現代に於ては其の意味を知ると、知らざるとに拘はらず、何事も大乘的に／＼と歸向せらるゝが、さて大乘的とは何ぞといへば、之れを明確に答へ得るものは少い。其の大乘を理論的に且つ實踐的に説明したのが本書である。佛教經論五千有卷と算せらるゝも、大乘の教理を、最も簡明にして、而も組織的に説述せられたるは本書を最とすることは先人の既に證明する所。若し現代の眼を以て本書を讀破せ

ば、唯物主義の行詰りを打開して一路平坦なる大乘の通路を得べく、個人主義の弊竇たる利己中心の乖離鬭争を緩和して、全體的なる協力諧和に導き、自利々他の二利圓滿たる樂土建設の指針を得べきを疑はないのである。

大乘起信論の佛教上の地位等は、本文に入りて之れを語るが、其の組織の巧妙にして、未だ大乘の何たるかを解せざるものに對し、先づ大乘とは何ぞより筆を起し、一心、二門、三大、四信、五行と漸次開展して理論より實踐に入り整然たる秩序、頗る理智的な現代人の思考に適し、其の行文も亦論理的にして、他の經論の如く冥想的なるもの少く、大乘諸經論中、最も現代に相應しい述作たるを想はしむるのである。

本書は實に幽玄なる哲學の論理的解説であり、高遠なる道德の實踐的教示であり、其の信仰を語るに於ては亦明快なる宗教書である。佛教各宗の要義、收めて本書の中にあらざるはなしといひ得るので、此の意味に於て今日、日本精



神を闡明し、其の佛教の影響し來る所を知らんとする上に於ても、亦最も恰好の書たるを云はざるを得ないのである。

たゞ、併しながら、本書の述作は遠く印度にあり、これが支那に翻譯せられてよりも一千有餘年を隔て、行文平明なりといふといへども、そは他の經論との比較であつて、一卷の本書、決して現代人に平明ならず。況んや其の所論の玄を探り、妙を味ふこと甚だ容易ならざるをや。本講話は其の困難を排除し、一讀の下に、其の全貌を髣髴せしめんとするので、もとより専門の學者より見れば到らざる所多く、且つ往々獨斷の弊に陥るの譏を免れざるべきも、期する所は、現代大衆に本書の内容を紹介して、東洋思想に反省せしめんとする婆心に外ならないのである。

今や西洋に於ては個人的利己主義による資本主義や、階級的利己主義に基く共産主義に反對して、二利圓滿にして協力的全體主義の叫び高く、東洋に於ては西洋より侵徹し來れる利己的なる資本主義の暴横や、國家を禍亂に導かんとする階級的利己の權化たる共産思想を排除し、本來の姿を注視せんとする東洋思想への反省が唱導せられてゐる折柄、本書の如きも等閑視する能はざるの時機に際會し、こゝに舊著を再訂して思想考察の一助に供することとした。

昭和十四年初夏

咄 堂 識



# 大乘起信論講話目次

一 緒言	一				
講述の主旨	本論の末疏	英文起信論			
二 本論の述作者	三				
述作の時代	六馬鳴	本論述作者馬鳴	新舊二譯	譯者眞諦	
三藏					
三 佛教中に於ける本論の位置	八				
業感緣起	賴耶緣起	眞如緣起	法界緣起	事法界	理法
界	事理無礙法界	事々無礙法界	實踐上本論の地位		
四 本論の組織	一四				
大乘と小乘	一心二門三大	四信五行	起信の語	本論の五	



五 本論述作の覺悟(歸敬辨意分)……………一九  
 歸敬分……………盡十方……………佛陀……………法身

六 本論述作の理由(因緣分)……………二四  
 法……………理由の一……………理由の二……………理由の三……………理由の四……………理由の五  
 理由の六……………理由の七……………理由の八……………本論述作の必要

七 立義分の略解……………三七  
 大乘の法……………大の義……………躰大……………相大……………用大……………乗の義

八 眞如生滅の二門……………四四  
 解釋分の三種……………眞如と生滅……………眞如と生滅との關係……………現象即實在

九 眞如の解釋……………四九  
 法界の大總相……………唯識の三性……………離言眞如……………依言眞如……………眞如の空

と不空……………如實空……………如實不空

十 阿黎耶識の解……………六〇  
 阿黎耶識の意義……………阿黎耶識の二義……………本覺……………始覺

十一 始覺及び本覺……………六七  
 凡夫覺……………相似覺……………隨分覺……………究竟覺……………心の生住異滅……………始本不  
 二

十二 本覺の性徳……………七五  
 隨染本覺……………智淨相……………不思議業相……………性淨本覺……………本覺圖解

十三 根本不覺と始末不覺……………八五  
 不覺の義……………根本不覺……………迷眞の無明と妄執の無明……………眞妄關係論

十四 三細六塵の辨……………九〇  
 業相……………轉相……………現相……………智相……………相續相……………執取相……………計名字相……………



…起業相……業繫苦相

**十五 覺と不覺との關係**……………九七  
 覺と不覺との關係……同相……本來常住……隨染業幻……異相

**十六 生滅と因緣**……………一〇二  
 眞如と無明と阿黎耶……依迷起似依似起迷……意……唯心の所作……  
 自心を分別す……心生ずれば種々の法生ず……意識

**十七 無明の起原及び染心**……………一一五  
 難解の理由……忽然念起……六染……不了一法界……相應と不相應……  
 ……煩惱礙と智礙

**十八 生滅の相**……………一二六  
 麤……二種の生滅……相續

**十九 熏習を論ず**……………一三一

四種の熏習……熏習の義……染熏……三種の熏習……淨熏……安心熏  
 習……眞如熏習……眞如熏習に對する疑問……得涅槃の因緣……用熏  
 習……平等緣

**二十 眞如の三大**……………一五三  
 眞如の體と相との關係……法界義……法身如來藏……眞如の用と諸佛  
 ……應身と報身……法身と報應二身

**廿一 眞如と生滅との不異**……………一七〇  
 色心二法……眞如一元

**廿二 對治邪執**……………一七三  
 五種の我執……法執

**廿三 分別發趣道相**……………一八四  
 相似發心と眞實發心……信成就の三心……四種の方便……隨順……信

目次……………五



發心の利益……修行發心……六波羅蜜……證發心……一切種智

廿四 修行信心分……………二一〇

四信……五行……三昧の方法……三昧の利益……觀法……他力信心

廿五 勸信利分(本論の利益)……………二四三

利益……結末の偈

廿六 結辭……………二四八

結辭

大乘起信論講話目次終

大乘起信論講話

加藤 咄 堂 述



緒言

これからお話をする大乘起信論といふのは、まことに簡單なる書物で、十行二十字詰で、やうやく十六七枚しかない小冊子ではあるが、其中に大乘佛教の高遠な理が、組織的に説明せられてあるものであるから、古來各宗の高僧がいろく解釋を加へられて、佛典中随分難解かしい方で、到底不學淺才なる私如きが、充分にお話することは出來ないものでありますが、古來の註釋の書籍や、先輩の教示を力に、成る可く簡にして要を得、何人にも此の高遠なる教理が解るやうにお話したいと思ふのです。



從來佛教の講義といへば、徒らに字句の末に走つて、其大綱を捉へることを忘れ、註釋に註釋を加へて、解ることをも解らなくするといふやうな風があるのでありますが、私はこれらの弊を避け、専ら達意を旨として本論の大綱を知らしむるを目的とし、字々句々の註釋は、更らに進んで本論を究めんとする人々に一任して置きます。

本論の末  
疏

先きにいふ如く本論の註釋は、古來頗る澤山あるので、殆んど三十種の多きに達し、其中、淨影慧遠の義疏、海東元曉の疏、賢首法藏の義記の三を以て起信の三疏と稱し、丁度孔子の春秋に、公羊傳、穀梁傳、左氏傳の三つがあるやうに云はれて居るが、三傳の中、左氏傳最も能く行はるゝが如く、此の三疏の中では賢首の義記が、義理明晰論旨正確、最も其要を得たるものと云はれ、此義記にも亦三十種以上の註釋があつて、註釋に註釋を重ね、なか／＼數へきれぬが、分けて有名なのは、今から百五十年前の人である鳳潭の義記幻虎錄、それから湛獻の教理抄、普寂の義記要訣、潮音の筌蹄錄等である。本論を専門に研究したいといふ方は、これらを御参考になればよいのでありますが、其大要は私の此講義によつて、御會得下さることが出來やうと思ふのであります。尙ほこゝに紹介して置かねばな

英文起信  
論

らぬのは、本論は鈴木大拙氏の手によつて英譯せられ、亞米利加シカゴのオープンコート社から(The Awakening of Faith in the Mahayana)として出版せられてゐることです、行文も平易で、本論の意義を闡揚せられてありますから、英文で佛教を見やうとする方には最もよい御参考書であります。

此の如く古より今に至るまで、本論は非常に持て囃されて居るので、これは全く前にもいふが如く、簡にして要を悉くして大乘佛教の梗概を説いて居るからであります。

二 本論の述作者

述作の時  
代

さて大乘起信論は、何が故に著はされたかといふに、之れは全く時代の必要に應じたのであります。元來佛教の教祖釋尊の御說法は、應病與藥、隨機說法といふて、其對手の病に應じ、機に隨つて法藥を與へられたものですから、大乘の機根のものには大乘の法を説き、小乗の機根のものに向ては小乗の藥を與へるといふ風であつたものであるから、其法門はさまざまに分れて、釋尊滅後に至て一の法を聽いたものは他の法を排して、自分の聞いた



ばかりを正しとしてさまざまの異論も起つたが、滅後四五百年の間は全く小乗教のみで大乘の佛教は顧みられなくなり、終に佛教といへば小乗のみと思ふやうになつたものであるから、滅後六百年代に馬鳴菩薩といふ人が現はれて、大乘の頽廢を悲み、奮つて之れが再興を計らんとして、博く大乘の經典を通覽して、深く其教意を汲み、殊に楞迦經に注目して此論文を著し、大乘起信論と名けて、此書を公布し、大乘甚深の教理を小乗の佛徒は勿論、外道波羅門の人々にまで知らしめんとせられたのであるといふのが、普通の説です。

## 六馬鳴

併し近頃、いろ／＼印度の歴史が精しく調べられるやうになつてから、此馬鳴出世の年代に就て疑ひを抱くやうになつて來た、元來此馬鳴といふ人は必ずしも一人の名でないので、古來から六馬鳴といふ説があつて、『釋摩訶衍論』に據ると、一は勝頂主經に出て居る釋尊と同時代の馬鳴、二は大乗本法經に出て居るので、時代は前と同じだが全く別人の馬鳴、三は佛滅後一百年の頃に出た馬鳴、(摩尼清淨經に出づ)四は三百年代の馬鳴、(變化功德經に出づ)五は六百年代の馬鳴、(摩訶摩耶に出づ)六は八百年代の馬鳴、(常德三昧經に出づ)といふやうに六人あるといふが、本論の著者は第五に擧げたる、即ち佛滅後六百年代の人

## 本論述作者馬鳴

とするので、大乘佛教の興隆に最も力のあつた人であるといふには異存が少ない。馬鳴は梵語阿溼縛寔沙(Aśvaghoṣa)と云ふ、馬鳴といふのは意譯で、何故かく名けたかといふには三説ある、一は此人の生れた時に馬が鳴いたからかく名けたのであるといひ、二は琴が上手で馬が其妙音に感じて鳴いたからだといひ、三は此人の説法に感じて馬が鳴いたからだといふが、そんなことはどうでもよい、兎に角原名はアシュヴゴーシャ、意譯すれば馬鳴となる名の人である。此人のことは摩訶摩耶經に於て、釋尊が實に左の如く豫言せられて居るといふ。

如來滅後六百歲にして九十六種諸の外道等、邪見競ひ起り佛法を毀滅す、一比丘あり、馬鳴といふ、善く法要を説き一切諸の外道輩を降伏す云々

果してこんなことを佛が豫言せられたか、後世の佛教徒が馬鳴の價値を上げやうとして、言ひ出したのかは解らぬが、兎に角稀有の高徳であり、碩學であつたには相違ない、傳を按ずるに、此人初めは佛教を信ぜず、波羅門教を信じ、其才學を以て常に佛徒と論議して之れを屈服して居つた、こゝに佛教の碩學脅尊者といふがあつて、馬鳴の横暴を憐み、之



れと相約して、論議に敗けた者は其法を捨て、勝つた方の教に従ふことを定めて論議せられた所が、馬鳴は終に辭屈して之れに従ふことゝなつたといふことであるが、或る説には馬鳴を屈伏したのは脅尊者でなく富那夜奢フニヤシヤスで、馬鳴は富那夜奢に敗けて舌を斬らんとしたのを、富那夜奢は之れを止めて「我が法は仁慈にして敢て汝をして舌を斬らしめず、宜しく髪を剃て我が弟子となるべし」と云はれたので、それから終に弟子となつたといふので、禪宗では脅尊者を以て釋尊より十代目の法統を繼いだものとし、十一代目が富那夜奢、十二代目が馬鳴としてある。

さて馬鳴は外道を棄て、佛に歸して、當時中天竺の中心ともいはるゝ摩揭陀國モカゼにあつたが、北天竺の迦賦色迦王カニシカ、此國を攻めて之を破り、償金九萬を摩揭陀王に求めたが、摩揭陀はそれを出すことが出来ないといふと、然らば九萬金に代ふるに馬鳴菩薩と佛鉢と一慈心鶏とを求めた、摩揭陀に於ては馬鳴の如き高德を持ち去らるゝことを惜んだが、馬鳴は之れを傳道の好機會として喜んで之れに應じ、北天竺に赴き、大に佛法を弘通し、迦賦色迦王の第四結集を助け、徳風全國に輝き、人呼んで功德日クツクジツといふに至つたといふことである。

## 新舊二譯

此人の著書として有名なるものは、大莊嚴論經ダイソウガンロンキョウ、佛所行讚ブツショウキョウサン、并に此大乘起信論であるが、其中前二者は文辭の流麗なるを以て賞たへられ、後の一は大乘興隆の一大論文として著名なものである。(これに就ても異説はあるが、それは専門の研究に譲つて置く)之れを支那に翻譯したのに二通りあつて、一は梁の時代に眞諦シントウ三藏によつて譯されたので、之れを舊譯といひ、今一つは唐の實叉難陀ジツシヤナンダの譯したので、之れを新譯といひますが、今世間に行れて居るのは舊譯の方で、古來の高僧註釋を施されたのも此の舊譯である。舊譯の譯者、眞諦といふのは梵名波羅末陀パラマールタ(Paramārtha)又は拘那羅他クナラタ(Gunnarata)といふて、西印度度優禪尼國の人で、梁の武帝の大同十二年に支那に着し、大清二年梁の都に來たが、時恰も梁が亡び陳が起るといふ亂世であつたので、幾度びか歸らんと思ふたが其の意を果さず、止つて『攝大乘論』や此大乘起信論や其外の經を譯して、羅汁、玄奘と共に支那譯經の三家と稱せらるゝ人である。

さて之れから佛教中に於ける本論の位置を述べて、漸次本文に入ることといたします。

譯者眞諦  
三藏



### 三 佛教中に於ける本論の位置

本論は佛教全體の上で、如何なる位置を占めて居るかといふことを見るには、勢ひ、佛教全體の上のことを云はねばならぬ。今日一般佛教學者が用ひて居る佛教教理の觀察法は、縁起論と實相論との二で、縁起論といふのは宇宙人生を時間的に説明してゆくの、天地萬物は如何にして出來たか、人生は何が故に此くの如くになりしか、それには必らず其因縁がなければならぬと、其因縁を説くのです。凡そ佛教では、萬物の生起するには必らず其原因と、之れを助くる縁といふものがなければならぬといふのでありますから、此時間的に究めてゆくのを縁起論といひ、之れに反して、宇宙人生の實相は如何なるものぞと空間的に究めてゆくの、例へば人とは何ぞやと問ひ、眼横鼻直四肢五體を具へたものだと答へるのは實相論で、人は如何にして生れたかと問ひ、父母より生れた、其父母は祖父母、其先は其先はと究めてゆくのが縁起論です。之れに四説ある。

#### 業感縁起

一を業感縁起といふので。業即ち梵語の羯磨(カルマ)(Karma)なるものを以て天地萬物發生の

本とするので、業とはシワザで、吾人が前生に於て一身で行ひ、口でいひ、意(こころ)でおもふたことが本となつて現在の果を引き、現在の行ひが、又未來の果を招くの因となるといふので、其又業は何によつて作るかといへば、惑(わづ)による。惑とは眞實の道理に明かでない迷ひのこと、迷ふて行ふたから苦の結果を招き、苦にあつて惑ひ、惑ふて業をつくり、業をつくりて苦み、苦みて惑ふといふやうに、惑業苦、惑業苦と輾轉して止ることないのが、われ／＼人生であるから、先づ其根本たる惑を斷じて灰身滅智の境に入ればよいといふ小乗教の見地である。

#### 賴耶縁起

二を賴耶縁起といふので、身口意の本には之れを總轄するものがある。之れを阿賴耶(アラヤ)識(アライ)といふ。阿賴耶は梵語、譯して藏の義があるので、一切萬有の種子を藏し、天地萬物は此阿賴耶識の所變に過ぎない、萬法は此識の上に現はれたる影であるといひて、宇宙人生の根本を阿賴耶識の上に置く純唯心主義で、法相宗などの見地であることは、唯識論などに詳しい、併し之れはまだ實大乘とはいはぬ、即ち大乘は大乘だが權大乘に屬して居る。



眞如緣起

三を眞如緣起といふ、これは阿頼耶識なるものも亦因縁によつて生じたもので、其根本には眞如といふものがある。此眞如こそ宇宙の本體、萬有の根源であるといふので、眞如とは眞實、如常の義で、空間的に變ぜざるが故に眞といひ、時間的に變ぜざるが故に如といふ。此無限の時間を通じ無限の空間を貫きたる宇宙の本體、天地の實在たる眞如を本として萬象の緣起を生ずといふので、實にこれ大乘緣起説の根底となるものです。今お話をする起信論は、此眞如緣起説を示して居るのです。

法界緣起

四を法界緣起又は無盡緣起といふ。これは天地の本原を一つの眞如よりとのみ定めず、萬物は相即相入して互ひに圓融無碍に通じて起つて居るといふので、華嚴經の如きは専ら之れを説き、一物一切を盡くすといふことを示すのですが、これはつまり眞如緣起論の結論として自然に出て來るのです。其他天台の一念三千も、眞言の六大所造も、皆な眞如緣起から發達したものであります。(これらのことは拙著『佛教概論』に明かでありますから御縁のある御方は御参考下されたい) 兎に角、眞如緣起論では未だ充分でない所はありますが、凡ての大乘の緣起説はこの根底を離れて立つものでありませぬから、先づ本論の所

説を究めてから徐ろに法界緣起を味ふて下さればよいのです。

事法界

さて此法界緣起の分類によつて宇宙萬有の實相を見ると、一は事法界觀とも名くべきで宇宙萬象の客觀的存在を許し、われ／＼の身心は五蘊の假和合であるといふて無我を主張するが、五蘊の實有を許し、宇宙萬有を五位七十五に分類し、これらのものは三世に亘りて常にあるといふ小乗有部の説などは之れに屬しませう。

理法界

二は理法界觀ともいふべきで、先きの法體實有の方では、我といふものは五蘊の假和合であつて別にあるべきものでないといふが、此五蘊といふものはあるといふやうに説て居るが、こゝに於ては其五蘊といふものもあるべきものでない、宇宙は超絶無象で一切皆空、唯だ眞如の理あるのみと見る三論宗の如きで、先きのが現象に注目して居つたに反して、之れは直に實體を見たのであるが、之れも未だ宇宙の實相を認めたものとは云へない。

事理無礙法界

三は事理無礙法界觀ともいふべきもので、事といふのは現象、理といふのは實體ぢや。此事と理とを別々のやうに思ふて居るのは大きな間違で、事を波に喩へれば、理は水だ、水を離れて波はなく、波を離れて水はないやうに、現象と實體、事と理とは不二なもので



ある。先きの事法界觀では波を見て現象に偏して其水たるを忘れ、次ぎの理法界觀では實體に偏し、唯だ水たるを知つて波あるを忘れた、今や水波不二、現象即實體なりと見るに至つた。これが大乘佛敎の根本で、即ち現象即實在論です。此事が説かれてあるのが此大乘起信論であります。既に水波不二といふことが解れば、一の波は他の波に關係し、他の波は又他の波に關係し、相互無盡に融通し影響して居るといふことは確かに認められる。

事々無礙  
法界

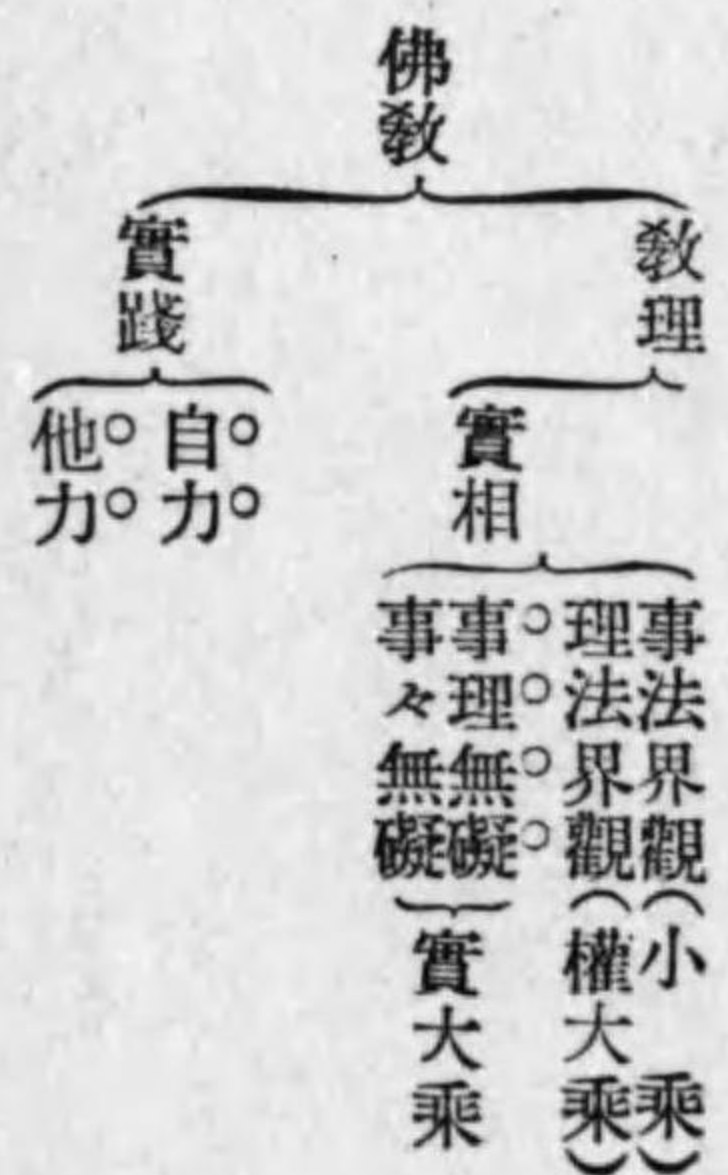
これが第四の事々無礙法界觀ともいふべきで、波は悉く水なるが如く、宇宙萬有は其本體に於ては一つのもので異つたものではない、これを萬物一體といひ、其又波と波とは互に影響して居るので、太平洋の岸を洗ふの波は直に大西洋の岸を洗ふの波に影響して居る如く萬象は互に密接不離の關係がある、之れを萬物相關といふ。先きの事理無礙の方では萬物一體と見た、其結論として當然萬物相關の理は出る、此萬物相關のことを見て、波(事)と波(事)が無礙なりと觀察するのが事々無礙の論據である。起信論には此事々無礙のことは明かにいふて居らぬが、其根底はこの論に於て明されて居るのである。

實踐上本  
論の地位

教理上に於ける大乘起信論の地位此くの如きを以て、四家の大乘といはるゝ華嚴、天台、眞言、禪等の教理とも離れられぬ關係を持つて居るのである、否な寧ろ其立脚地を成して居るものといふてもよいのである。さて又實踐の方からいふと、佛敎は之れを自力と他力とに分けることが出来る、自力といふのは自分の力で悟を開くので、他力といふのは阿彌陀如來の願力にすがつて、淨土へ往生して佛果を成するので、宗旨でいふと先きに擧げた華天、密、(眞言のこと)禪の四は共に自力であるが、淨土宗や眞宗や時宗などは皆な阿彌陀佛本位の宗旨で、往生淨土を目的とする他力である。此起信論は自力を説くか他力を説くかといへば、主として自力を説て居るが、自力を以て修行し能はざるものゝ爲めには他力のこと説てある。ソコデ淨土宗などでは本論の著者馬鳴を列祖の中へ加へて居る、チヨット今までいふたことを表にして本論の佛敎上に於ける位置を示すと、

業感緣起(小乘)  
賴耶緣起(權大乘)  
眞如緣起  
法界緣起(實大乘)





(註) 四法界を以て實相論の分類としたのは便宜によつたので、華嚴で説く時とは其趣を異にして居ります、唯だ今は四個の觀察方法として之れを用ひたのです  
 此中○印のあるのが大乘起信論の位置であります。

#### 四 本論の組織

大乘と小

此論は如何に組織せられて居るかといふことの概要を示すに就ては、先づ大乘起信論といふ題名から話さねばならぬ。題は一部の總標で、其題名によつて能く全部の脚色を見ることが出来るのである。大乘といふのは小乘に對した名で、小乘の小行を修して小果を得

るに對し、之れは大行を修して大果を得るので、義記に「大は當體を目とし、包含を義とす、乘は喩に就て稱と爲し、運載を功と爲す」とある。先きの分類でも示した如く、小乗教は其教理も淺薄で、且つ其實行に於ても自調獨善といふて自分さへ悟ればそれでよいといふ流義で、他を悟らせやうといふ働きはない、大乘の方は利他を先とするといふのであるから、行く道は一つでも乗り物が違ふ、小乗は自轉車流で一人でゆくのだが、大乘は大きな汽車のやうに澤山乗せてゆくといふ方である、といふのが古來からの解釋のしかただが、近頃の研究によりていふと、歴史的に小乗とは原始佛教を指し、大乘を發達した佛教を指し、地理的には錫崙、暹羅等南方に行はれて居るのを小乗といひ、日本、支那、西藏等北方に行はれて居るのを大乘といふことになつて居る。兎に角、大乘は小乘より進んだ教理を持つて居る佛教だと見れば差支はない、則ち本論は此甚深なる大乘佛教を説いて、信じ行はしめんとするのを目的とするのであるから大乘起信論といふので、論の字に就ては義記に「假に賓主を立て、往復折徴し、正理を論量するが故に名けて論と爲す」とあつて、佛教には三藏といふて經、律、論の三がある、經は佛の説き示されたる教示で、律は佛の命令、



之れらを説明して行くのは論といふのです。

一心二門  
三大

さて本論で示す大乘の深旨とは如何なるものかといふに、それは一々本文に就てお話をするのであるが、今其要をいへば一心二門三大の道理で、一心を以て宇宙萬象を實體とし、これに變化し生滅する部と、不變化不生滅の部とがある、其生滅し變化する方は宇宙萬象の現相即ちスガタで其不變化不生滅の部はこれ宇宙萬象の本体である、ソコで一心を心眞如と心生滅の二門に分ち、本体は平等一如のものだが、それが萬象生滅の現相となり、其現相に就て、それ〴〵の用がある、丁度同じ土のものでも茶碗になり、土瓶となれば、茶碗は茶碗、土瓶と異つた用があるやうなものです、之れを體大、相大、用大といふ、即ち



となる。本論は此道理をくわしく説明したのであります。でこれを記憶し易く一心二門三大といひ、さて此深旨を信するに就ては、先づ眞如を信じ、佛を信じ、法を信じ、僧を信ぜ

四信五行

よと説く、之れが四信で、此佛法僧といふも其實は眞如の三方面ともいふべきである、これらのはことは一々本文で話すが、行には布施、持戒、忍辱、精進、止觀の五がある、之れを五行といふ、ツマリ起信論は此一心二門三大四信五行を説たものである。然らば起信とあれど信を起すのみでなく、行を起すのではないかといふ人があらうが、信は諸行の本で、華嚴經には「信は道元、功德の母」ともあり、智度論には「佛法の大海は信を以て能入とす」ともあり、又心地觀經には「佛法の海に入るには信を根本とす」ともあつて、一切の行は信を以て本とし、此の信によつて行ひが立つのであるから、曹洞宗の道元禪師は「信は現成するところ佛祖現成す」とて大乘の信現はるゝのとき、佛果に入ること確定すといは

起信の語

れ、眞宗の親鸞上人は正信偈を作りて信心の一事に往生の大事決定すと示されてゐる、信は不疑の義で、これあるが故に行は立つので、疑つて居つては何一つ出来るものでない、飯を食へば腹がはると人がいふても、どうもそれが疑はしいと思へば、いつまでも食ふことは出来ない、信じてこそ行へるのだ、それであるから本論には信のみではない、解も、行も説いてあるが、其主たるものを擧げて起信といふたのであります。元來佛教には信、



解、行、證の四を要するので、信は情的信仰だが、これに知解が伴はぬと妄信となり迷信となる。ソコで解、これは智的ですが、如何に知り如何に信じて、實際に行はなければ何にもならぬこれが行、これは意志だ、此三つによつて佛果を證することが出る、即ち智、情、意の三方面を統一してこゝに安心することを得るに至るので、(勿論宗旨の立て方によつて信を主とするのも、解を旨とするのも、行を第一とするのも、又直に單刀直入して證を得るものもあるが)此起信論一心二門三大の教理は智的で解、四信は信、五行は行といふやうに簡単な論文であるが、此三方面を具へて居るのである。

本論の五分

本書の述作者馬鳴菩薩は本論を五部に分ちて、一因緣分、二立義分、三解釋分、四修行信心分、五勸修利益分として、先づ第一に本書述作の理由を述べ、次ぎに所論の綱領を上げて自己の主張を示し、之れを細述して解釋を施し、立義解釋の二分に於て説明したるものを心に信じ、身に行ふことを説きて、終りに其説の如く信じ行ふときは利益大なりとて實踐を勧めたので、其緒言とも云ふべき因緣分を除て、之れを教理に配すると、



といふ風である。

此外に、本論には序文とも見るべき偈文がありません、之れは馬鳴菩薩が本論を述作するにつき先づ佛、法、僧の三寶に歸敬せられたので、義記には之れを歸敬辨意分と名けてあります。先づ此偈文からお話し申ませう。

五 本論述作の覺悟(歸敬辨意分)

これは先づ敬虔の念を以て佛、法、僧の三寶に歸依し、至誠の情を示されたので、其の文は

歸命盡十方 最勝業徧知 色無礙自在



救世、悲大者、及彼身、躰相、法性眞如海

無量、功德藏、如實修行等、爲欲令衆生

除疑捨邪執、起大乘正信、佛種不斷故

盡十方最勝業の徧知、色無礙自在、救世の大悲者と、及び彼の身の躰相の法性眞如海、無量の功德藏と、如實修行等とに歸命す、衆生をして疑を除き、邪執を捨て、大乘の正信を起し、佛種をして斷ぜざらしめんと欲するが爲めの故に。

歸敬分

偈文といふのは詩のやうな具合に、詞を調へて佛を讚歎するとか、法を詮顯するとかいふ時に用ふので、今は馬鳴が此論を作るに就て、先づ佛、法、僧に祈誓をかけられたので、歸命の字は南無といふのと同じこと、歸は敬順の義、詩經にあるこの子こゝに歸ぐとある歸の字で、身も心も夫にうちまかせて己れの身をも心をも見ない如く、佛、法、僧に身をも心をも打ち任せたるのを歸といふので、命は佛、法、僧の命に背くまいといふこと即ち絶対の信仰で、楠正成が「身の爲めに君を思へば一た心、君の爲めには身をも思はじ」といふた如く、身心を絶対に三寶に歸せしむることでありませう。盡十方とは空間的に世界の無

盡十方

邊なることをいふので、東西南北の四方と、東南西南東北西北の四維とに上下とを加へ、十方即ち限りなき虚空界の間に充ち満ちてをるといふので、盡十方といへば無限の空間だけのやうじやが、これは偈文で五字宛につゞめたからで、其意味は實に空間だけではない、無限の時間にも互つてをるのであるから詳しくは三世(時間)十方(空間)といはねばならぬ。

佛陀

礙自在、救世大悲者といふので、これは佛の事、佛といふのは梵語で佛陀(Buddha)支那に譯して覺者といふ、覺はサトル、夢の覺めたる状況です、これを形容して最勝とは此上もなく勝ぐれたる業の徧知で業といふのはシワザ英語のアクション(Action)だ、此のシワザに三つある、身とする業、口とする業、意とする業、之を身口意の三業といひます、徧知といふは徧く知るで佛の意を形容したので、あらゆる事柄を悉く知り玉ふといふと、サテ色無礙自在といふたのは其身を形容したので、色とはイロで目に見ゆる所のもの即ち佛の御身躰で、これが無礙とは礙りのないこと即ち自由自在で、われ／＼の身躰のやうに不自由不自在のものぢやない、その佛が無礙自在の御身體を以て法の道理を説き世を救ひ下さる、大



慈悲者であるから救世大悲者で、われ／＼の身からいへば口業に當る、以上佛の身、口、意、三業を讚歎したのである（此無礙自在の身や最勝業徧知、決して遠くに求むるには及ばぬ、此五尺の身體即ち佛の身體ぞといふ事は常に忘れてはならぬが、今は佛を立て、讚歎したのです）及びといふのは前の佛の形容と區別して今度は法のことをいふので、彼の色無礙自在の佛の身には體、相の二つがある、體といふのは法身の體、相といふのは法身より出でたる報身、應身をいふので、元來佛には三身といふことがあつて、法身といふのは宇宙萬法の眞理を見究むるときは萬法即我、我即萬法となる、この宇宙萬法それを法身の佛といふので、此萬法と妙合した我を報身の佛といふので、此感得した眞理を機根に應じて説き示すが爲めに此世に出現したのが應身で、更らに此三身を喩へて申しますれば、醫者が醫術を研究するのは法身の説法を學ぶので、已に之を會得した立派な醫者になれば報身で、これを應用して實際の病人を救ふのは應身です。さて此佛の體相も世間に現はるゝ時は法性眞加海なり、此法性といふは天地萬象の千差萬別の相を指すので其本體は眞とて偽のない、如とて變りのないものである、而して宏大無邊であるから海に喩へ、又た此中には

## 法身

無量の功德具はらざるなきが故に藏といふたので、如來藏即ち佛の藏である、これらは皆な絶對界を形容したので、前にいふ如く佛は盡十方三世に亘り、佛は無限の時間を貫き無限の空間に亘るが如く、佛の説き給ふ法も亦無量無邊なることをいふたのです、以上は三寶中の法寶で、それから如實修行者となるのは僧寶のことをいふたので、僧は和合衆の義であるが今は如實修行者というた、賢首大師の義記には、理を證し行を起すこれを如實修といふとあつて、如何に佛が無量功德藏を説かるゝとも、其實地に修行するものがなければ空論となつてしまふ、これを實地に修行する人が大切である、そこで佛寶法寶と共に此僧寶の三が大切になるので、この三に背くまいといふのは別のことではない、天地の眞理に背くまいぞといふこと、「衆生をして疑を除き邪執を捨て大乘の正信を起し、佛種をして斷ぜざらしめんと欲するが爲めの故に」といふのは、古人は三寶に歸命する理由ぢやと見た人もあるが、本論を著作する理由と見て差支はないと思ふ、此論は決して勝手に述べるのではない、三寶の前に於て此論を見るものをして疑を除き邪まな執着を捨てさせ、まこと大乘の正信を起さしめ佛種を斷たざらしめんと爲めに著はされたので、正信の正は邪執



を捨るをいひ、疑を除くを信といふので、如何に立派な教理でもこれを修行するものがなければ断えてしまひますから、此論を著はされたのです、これで歸敬辨意分は済みました。

### 六 本論述作の理由(因縁分)

これからいよ／＼本文ですが、先づ述作の理由を述べたので、

論曰有法能起摩訶衍信根是故應説

論に曰く、法有り、能く摩訶衍の信根を起す、是の故に應に説くべし。

この分が此論を大乘起信論と名けた理由を説てをるやうなものであります、法といふのは一心二門三大の法で、總じて佛教にて法といふのは普通に二つの義があります。一は自任持の義で、凡そ世の中にありとあらゆる一切のこと皆自分の性を持ちて失はぬ、例へばこゝに一つの茶碗がある、この茶碗が自らの性質を保ちて失はぬやうなものじや、土瓶は土瓶、火鉢には火鉢の自性があつて少しも失はぬ。二は軌生物解の義で、茶碗には茶碗、火鉢には火鉢の軌(キマリ)がある、それが直に茶碗若くは火鉢其物を解釋してをるやうな

法

もの、將官には將官相當の服あり、兵士には兵士相當の服あり、其服が直に其官位を解釋してをるやうなもので、こゝにいふ法は、摩訶衍、摩訶衍は梵語(Mahayana)摩訶は大、衍は乘の義で、大乘のことです。大乘のことは前にいふた如く自分獨りの悟りでなく、凡そ生きとし生けるもの諸共に安樂の法門に乗り入らんとするので、小乗の自分一人ゆくのとは違ふものであるから、多くの人が其志を出すことが出来なかつた、それが追々佛滅後六百年の頃になると、大乘を信ずるものは少く小乗ばかり盛んであつた、それを馬鳴菩薩が慨きて摩訶衍即ち大乘の信を起さしめんの意を以て、先づ斯く説き出して本論を作られたのである、信根の根の字は能持の義で、木一本あつても能くこれを保つ根がなければならぬ、又生後の義とて根あればそれよりいろ／＼のものが生ずる、今大乘の信もキツトこれに根を定めれば、それより解も行も證も生ずるのであるから殊に根の字を用ひたのである、サテ全部の組織を示して

説有五分云何爲五、一者因縁分、二者立義分、三者解釋分、



四者修行信心分、五者勸修利益分、初説因緣分、

説に五分有り、云何か、五と爲す、一には因緣分、二には立義分、三には解釋分、四には修行信心分、五には勸修利益分、初めは因緣分を説かん。

これは別段に講釋する必要もない、本論の組織を示したので、これからが因緣分の本文です。

問曰有<sub>二</sub>何<sub>一</sub>因緣而造<sub>二</sub>此論<sub>一</sub>答曰是<sub>二</sub>因緣<sub>一</sub>有<sub>二</sub>八種<sub>一</sub>云何爲<sub>二</sub>八<sub>一</sub>一者因緣總相、所謂爲<sub>レ</sub>令<sub>二</sub>衆生<sub>一</sub>離<sub>二</sub>一切<sub>一</sub>苦得<sub>レ</sub>究竟樂、非<sub>レ</sub>求<sub>二</sub>世間<sub>一</sub>名利恭敬<sub>レ</sub>故

問うて曰く、何の因緣有つて此の論を造るや、答て曰く、是の因緣に八種有り、云く何れか八とす、一には因緣總相、所謂衆生をして一切の苦を離れ、究竟の樂を得しめんが爲なり、世間の名利恭敬を求むるに非ざるが故に。

理由の一

此論は如何なる因緣で作つたのかといふに、八つの原因があるといふのです。こゝでザツト因緣といふことを話しておくが、普通に因緣といへば因はタネ、縁は手續きとも云ふの

で、凡そ世の中のもの種のみにては出来ぬ、これを助くる手續といふものが必要である。

女は男を持つ因、男は女を持つ因があつても縁がなければ夫婦になれず、瓜や茄子の種が袋の中にあつては實がならぬやうなもので、必らず出来るべき原因とこれを助くる縁とがある、ソコで今本論を造るの因緣はといふに、八つある、一には因緣總相で、大體の上で此論を造られた原因、之れは衆生に一切の苦を離れ究竟の樂を得しめんが爲めで、世間の名利恭敬を求むるの爲めではないとある、凡そ世の中の千差萬別の物事、これを約めていへば苦と樂との外はない、如何なる人にも苦を喜んで樂を厭ふものはなく、其人によつて程度は違ふが、皆な苦を厭ひ樂を欣ぶのである、其欣ぶ樂の結局は究竟樂である、即ち樂の極端、極樂である、此樂を得るには如何するかといふに別のことはない、唯だ一切の苦を離れ、ばよいので、苦を離るゝ外に樂といふものはありませぬ、喩へば暗を去りて明を取るが如く暗を去ればそこには明がある、苦を離るればそこには樂がある、されば世間の名利恭敬を求むるにあらずして、本論は世間の弊を除くのが目的で、世間の名利恭敬を求めさせるためでもなく、自分が名利恭敬を得る爲でもない、先づ大體の上から述作の根



本理由を明にし、これから別々に原因を述べたので、

理由の二

二者爲欲解釋如來根本之義令諸衆生正解不謬故

二には如來の根本の義を解釋し、諸の衆生をして正しく解して謬らざらしめんと欲するが爲めの故に。

で、如來といふ字を講釋すればむづかしいが、平易に云へば。如とは不變の義、カハラナイといふのであるから不生不滅ぢや、其如から來たといふので、眞如法性の都より衆生濟度の爲め娑婆往來八千返、しかも眞如の躰の變らぬことで、如より來り如より去るといふので、此論、後々の説明からいへば、原より我々の持つて居るサトリの躰即ち本覺は如で、其本覺の曇つたのを除き去つて行く始覺は來るといふことも出来るのですが、今は釋迦如來と見てよい、釋迦如來五十年の説法其根本の義理とは何ぞといふに、そは大乘の法でなければならぬ、然るにこれを忘れたものやら疑ふものやらあつて、正しく解して謬らぬものが少い、どうかそのやうなものはないやうにしたいといふのが、此論を作つた第二の原因である。

理由の三

三者爲令善根成熟衆生於摩訶衍法堪任不退信故

三には善根成熟の衆生をして摩訶衍法に於て、堪任して不退信ならしめん爲めの故に。

人にはいろいろの機根がある、天稟愚鈍なものもあれば伶俐なものもある、今は其中の善根が成熟してをる衆生、即ち天稟の勝れたる衆生をして摩訶衍即ち大乘の法の上に於て、堪任とて堪ることので此法に於て少しも疑を抱かず、其信仰を退かしめざるが故に此論を作つた、其次ぎは

理由の四

四者爲令善根微少衆生修習信心故

四には善根微少の衆生をして信心を修習せしめんが爲めの故に。

これは前のやうな善根成熟のものは不退信であらうが、善根微少のものはさうはいかぬ。そこで先づ此論によつて大乘佛法の道理を説き、こゝに信心を修習せしめるので信心を修習して終に不退信になる、丁度鳥の飛ぶことを習ふに初めは少しづつ飛んで、終には大空を飛び廻ることが出来るやうになる如く、信心を修習するので、これらの事は修行信心分にある、さて



理由の五

五者爲シテ示シ方便ヲ消ス惡業障ヲ善ク護リ其心ヲ遠離シ癡慢ヲ出テ邪網ヲ故ニ

五には方便を示して惡業障を消し、善く其の心を護り、癡慢を遠離して邪網を出でしめんが爲の故に。

前は善根成熟、後には善根微少、今度はいよ／＼機根の劣つて微少の善根もない者には、方便を示して惡業障を消すので、方便といふのは佛を禮拜さすとか、懺悔の儀式を行ふとかするので、抑も此大乘の法を聽いて直に信することの出來ぬといふのは、過去世の業報で、惡業が重つて我が心を昧ましてをるから、先づ其の惡業の障を除かねばならぬ、(その爲めに禮懺などの方便を示したのであります)、元來此惡業障は心から出たのですから、善く其の心を護り痴慢を遠離せねばならぬ、こゝに痴慢といふたのは惡業障の本で、惡業障といふものは貪、瞋、痴、慢の四つによつて出來るので、氣に入ることがあれば貪り、氣に入らぬことがあれば瞋る、これは愚痴とて物の道理がわからぬからで、物の道理が明になれば貪もなく、瞋もなく、その物の道理のわからぬといふは慢とてアナル心から起るものである、そこで痴とか慢とかいふ心を遠け離して、邪の網の中から出て自由自在に

ならしめんが爲めに此論を作つたのぢやとある、我々は惡業障の網に入て自由自在がなく徒らに痴慢の爲めに迷うて居るのだ、これを解脱せしむるのが本論の目的である。

理由の六

六者爲シテ示シ修ス止觀ヲ對治シ凡夫二乗心過ト故ニ

六には止觀を修習するを示し、凡夫二乗の心過を對治せんが爲めの故に。

これは下の修業の所に止觀といふことがあるからそれを示されたので、止とは心の散亂をおちつかすので、(坐禪をするのもこれでありませう)觀とは心で物の道理を研究するのです、凡夫の心といふものは兎角散亂したいものであります、でこれをおちつける必要があります(御参考まで御話しますが、坐禪の初入に數息觀といふものがある、これは息を數へるので、身軀を正しく脊梁骨を正しくし、耳と肩と對し、睛と鼻と對し、口は閉ぢて眼をボンヤリ開き、目前五六尺の所を見、息を數へる一二と數へて七つにゆき、またもどりに七つにゆく、これがなか／＼出來ず心が散亂する、それを止めるのです)止は凡夫の方、觀は二乗の方に當るので、小乗の修業をするものに聲聞乘、緣覺乘の二がある故に二乗といふので、聲聞は佛の説法を耳から聞き道理がわかつて修業を初めるが、緣覺



の方は又獨覺といふので、師匠から説法を聞いて覺とるのぢやない、飛花落葉を見て道理を觀する、此二つにも止觀はないではないが、無常を觀じ苦を觀すると云だけで、所謂小乘であるから自分一人の悟は開くが、他人を悟らすといふ高尚な目的はない、併し凡夫とは違つてをる、凡夫とは違つてをるが大乗から云へば未だ以て凡夫二乗と同列に置かれるのぢや、今ま止觀を修習することを示してこれら凡夫の心、二乗の過を退治せん爲めに此論を作られたのです。

理由の七

七者爲示專念方便生於佛前必定不退信心故

七には專念の方便を示して佛前に生ぜしめ、必定して不退信心ならん爲の故に。

これが淨土門の起る本となつて居るので、淨土門といへば御經では大無量壽經、觀無量壽經、阿彌陀經の三部が本ですが、祖師達の論では此の起信論の修行信心分に、往生淨土を勧められたのが本であります。それで淨土宗などでは祖師の中に此馬鳴を數へてをります、專念といふのはわれ／＼が外のことを振り捨て、阿彌陀如來一佛をたのむといふので、專は他に傾かぬこと、念は彌陀を念すること、阿彌陀如來は此の阿彌陀に歸依すること

によつて一切衆生を救ふと仰せられるのであるから、此の方便によつてやかましい娑婆世界を脱して、一極樂淨土にある阿彌陀佛の前に生じて、其親しい教化に遭うて必定不退信心になりたいといふので、これは易行で、行き易いが矢張り行く人が少いから此論を作られたのである。

理由の八

八者爲示利益勸修行故有如是等因緣所以造論

八には利益を示し修行を勧めんが爲の故に。是の如き等の因緣有り所以に論を造る。

これは上來掲げたる七つを約めて勸修利益分を示されたので、是の如くに修行すれば是の如きの利益があるから、それを勧めむが爲めに此論を造られたのであります、此論述作の因緣を是の如しといたしますと、こゝに疑問がある。

問曰、修多羅中具有此法、何須重說、答曰、修多羅中雖有此法、以衆生根行不等受解緣別。

問うて曰く、修多羅の中、具に此の法有り、何ぞ重ねて説くことを須ひん、答へて曰く、修多羅の



中此の法有りと雖も衆生の根行等しからず、受解縁別なるを以てなり。

八の因縁があつて此論を作つたといふことはわかるが、此の八つの理由は釋迦牟尼佛五十年の説法の中に詳しくあるではないか、何が故に殊更らに此論を作らねばならぬかとの疑問である、修多羅(Sutra)といふのは梵語で貫線の義というて、天竺では子供の飾りに花を糸につなぎて頸へかけるを修多羅といふ、今は宇宙間の事物千差萬別なるものを、釋尊の御語の糸を以て貫くと、此千差萬別の中に一貫の道理あるが故にかくいふのであるといふのであります、それを支那に譯して經といふ字を用ひたのです、サテ疑問に對しての答は、御經の中に此法はあるが、此法を受けるところの衆生の根機が釋尊の御在世と違ふし、其の行も同じでなし、又法を聞いて自ら念得し解釋するところが違ふから、此論を作つたのであるといふのです。

本論述作の必要

所謂如來在世衆生利根能説之人、色心業勝圓音一演、異類等解、則不須論

所謂如來の在世は衆生利根にして、能説の人、色心業勝れ、圓音一たび演べ、異類等く解すれば則

ち論を須ひず

これも前の疑問に對する答辯で、釋迦如來が世に御在でなされる時には、衆生も果報が勝れておつたから利根であつた、能説即ち御説きなされる釋尊を初め、これを手傳はれた菩薩方(觀世音の如き)の身體(色)も心も業も勝れてをるから、今日の説者とは違ひ、圓な御聲で説かるれば、聞いてをるものゝ種類はいろゝ異つてをるが等しく解したのであるから、別に論を作つて解釋する必要はなかつたのである。

若如來滅後或有衆生能以自力廣聞而取解者或有衆生亦以自力少聞而多解者或有衆生無自心力因於廣論而得解者自有衆生復以廣論文多爲煩心樂總持少文而攝多義能取解者

若し如來滅後に或は衆生の能く自力廣聞を以て而して解を取る者有らん、或は衆生亦た自力少聞を以て而して多く解する者有らん、或は衆生の自らの心力無く、廣論に因て而して解を得る者有らん、自ら衆生復た廣論文多きを以て煩はしと爲し、心總持の文少くして多義を攝するを樂ひ、能く解を





取る者有らん。

前には如來在世に論の必要なきを説き、こゝには如來滅後に論の必要なを説いたので、如來滅後の衆生の中には自分の力で廣く聞いて解を取ることの出来るものもあらうし、又少しく聞いて解を得るものもあらうし、自分の力もなく大部の論によつて解を取るものもあらうし、又大部の論を煩しとして文が少くて義の多きを望んで解を取るものもあらうといふので、本論の如き文少くして義多き論の必要を示したので、總持といふのは何もかも一つにつらねて持つといふやうなことです、サテ

如是此論爲欲總攝如來廣大深法無邊義故應說此論

是の如く此論は如來の廣大深法の無邊の義を總攝せんと欲するが爲の故に、應に此論を説くべし。

此論は如來の廣大深法無邊の義とあつて、實に廣く且つ深く、其上何處までといふ限りのない無邊の意味の道理を簡單に總攝して、文少くして義多く、以て大乘の解を取らしめんが爲めに、此論を説いたのであるといふのであります。これで本論述作の因縁は明になりました、これからがいよいよ根本となるのです。

## 七 立義分の略解

この立義分が大乘起信論の最も肝要なる所ですが、これは次ぎの解釋分と一所に其の教理を組織的に御話し申すこととして、今は先づ本文に就て略解を施しておきませう。

已說因緣分、次說立義分

已に因緣分を説く、次に立義分を説かん。

これはたゞ因緣分を已りて立義分に入ることを示したまでで、別に講釋をする必要もありません。

大乘の法

摩訶衍者總說有二種、云何爲一、一者法、二者義

摩訶衍は總じて説くに二種有り、云何か、二と爲す、一には法、二には義なり。

摩訶衍といふのは大乘のことで、其大乘には二種ある、一は法とて大乘の本體を指したのでこれは大乘其の者のこと、二に義といふのは大乘といふ名を與へた義理、即ち大乘の意義を指すので、直ぐ此の次ぎの文でわかる。



所言法者謂衆生心。是心即攝一切世間出世間法。依於此心。顯示摩訶衍義。何以故。是心眞如相。即示摩訶衍體。故是心生滅因緣。相能示摩訶衍自體相用。故

言ふ所の法とは衆生心を謂ふ、是の心即ち一切世間出世間の法を攝す、此の心に依つて摩訶衍の義を顯示す、何を以ての故に、是の心眞如の相、即ち摩訶衍の體を示すが故に、是の心生滅因縁の相、能く摩訶衍の自らの體、相、用を示すが故に。

大乘を二つに見た其の法の方を説明したので、大乘の本躰それ何物ぞといふのである、これに就て本論は單刀直入、言ふ所の法とは衆生心を謂ふと斷言してある、衆生心とは何であらうか、われ／＼お互の心といふことである、われわれお互の心が何故に大乘の法躰となることが出来るのであらう、是の心即ち一切世間出世間の法を攝すで、われ／＼の心といふは決して方寸の中にある小さな狭い肉團心を指すのではない、目を開けば天地萬物其前にあり、目を閉れば天地萬物忽焉としてなくなる此の心で、天地萬物は皆な我が心の影である、我が心がなければ佛もなければ鬼もない。

傀儡師首にかけたる人形箱

鬼を出さうと佛出さうと

皆な心から出るので、悟りの境にある出世間の法も、迷ひに迷うてをる世間の法も、何もかも攝め盡してをるから大乘の法躰となることが出来るのである、此の衆生心と云ふは之れを持つ有情に約していふたので、其の持つ所の功德に就ては如來藏心といふのである。さて此の心を二つに分けて眞如と生滅とした、これは一心の躰、相を分けたのであると見てよろしい、この心の本躰はといへば絶對無限なもので、甲の心乙の心の區別もなく平等一如のものである、これを大乘の本躰としたのでこれが心眞如、其の心のさまざまに働くのは大乘自躰の働き即ち相用を示すというたのです、このことは後の義を説くところと參照するがよい、今は兎に角、大乘即ち摩訶衍の本躰(法)はわれ／＼お互の心であるといふことを示したのです、大乘は決して遠くに求むるには及ばぬ、われ／＼お互の心直に大乘の法體となるので、能く摩訶衍の義を顯示するのです、更らに義を説て、

所言義者則有三種云何爲三、一者體大、謂一切法、眞如平



等不増減故、二者相大、謂如來藏、具足無量、性功德故、三者用大、能生一切世間出世間善因果故

言ふ所の義とは則ち三種有り、云何か三と爲す、一には躰大、謂く一切の法、眞如平等にして増減せざるが故に、二には相大、謂く如來藏、無量の性功德を具足するが故に、三には用大、能く一切の世間出世間の善の因果を生ずるが故に。

これは大乘といふ名義を、如何にして此の衆生心につけたのであるかといふことに就て説明したので、先きのは大乘とは何ぞやを説き、之は大乘の意義を明すので、それに就て先づ大といふことを明したので、これに三通りある、即ち躰、相、用です、凡そ天地萬象何物か此の體相用の三義を具へぬものがありませう、こゝに机がある、その躰はといへば木である、其の相はといへば圓いとか四角いとかの形相がある、さて其用はといへば書物を讀む臺とし、字を書くに使ふとかさまざまある、今本論に於ては大乘本躰をわれ／＼お互の心としたのであるから、此心の本躰は如何なるかと云に、已に本躰といふ上はスガタに現れたものではない其基本ちや、スガタに現れぬ根本に於ては彼此もなければ甲乙もない、

躰大

彼れとか我れとか、甲とか乙とかいふのは已に相に現れてからのことちや、已に彼此もなく甲乙もないならば一味平等でなければならぬ、さてまた出来るといふこともなければ、無くなると云ふこともない、生もなければ滅もないのちや、生といふことがあれば最早相に現れたので本躰ではない、土瓶といへば土であるが、土といふときには茶碗の土も、花瓶の土も、徳利の土も、杯の土も、大地の土も、山の土も一味平等であり、増も減もせぬ、衆生心の本躰は彼我もなく甲乙もなく、生もなく滅もなく増もなく減もなく、眞々如々として無限の時間を貫き無限の空間に亘つてをる。こゝに於て躰は一切の法、眞如平等にして増減せざるが故に大というたのである、これは大乘の眞隨たり中樞たるものを明したので、相と云ふのはスガタで、一つの土が土瓶とも茶碗ともさまざまになるが如く、我が心は、惜しい愆しい可愛い憎いの情も起れば忠孝仁義の念も起る、佛のやうな心も起れば鬼のやうな心ともなり、實に無量の考へを含んでをるので、これ皆な心躰眞如の現相で、實に何物をも含まざるなき佛の藏即ち如來藏で、無量の功德を具足してをるのであります。かくいふと或は疑ふ人があつて、詰つてわれ／＼の心には悪い心も善い心も皆な具足して

相大



をる、それを無量の功德くどくといふのは矛盾むじはんしてをるではないかといふ人がありませうが、これは至極御尤ごとうもなることで、心眞如の本躰に於ては善惡に通じ、佛も鬼も具足してをるのですが、それが活動(縁起)して相となり用となる時には、眞如の本徳を顯はすのと隠すのと二つある、其の眞如の本徳を顯はすのは悟りの方で、之を隱すのが迷ひの方であります、この悟りの方に趣くのを順縁起といひ、迷ひの方に赴くのを逆縁起といふので、一は萬物の開發に向ふの進化、他は之に反對する退化とも見ることが出来る、佛教では此の順縁起を還滅門えんめつもんといひ、逆縁起を流轉門りゅうてんもんといひます、今は眞如の本徳を顯しゆく方の話してありますから順縁起の方で、無量性功德を具足するというたのです、これが大乘の屬性、さて次ぎの用は其の活動で、此の心は無限の躰を具へ限無の徳を持つてをるのであるから其は作用もいろ／＼で、いろ／＼の因縁によつていろ／＼の結果を現はします、即ち佛となる因縁を結びて佛ともなれば、鬼たる因縁を結びて鬼ともなれるので、此の如き大作用ある故に用大といひます、それを今は順縁起の方の話でありますから、能く一切世間出世間の善の因果を生ずというたのであります、以上は大の義で、其次ぎは、

用大

乗の義

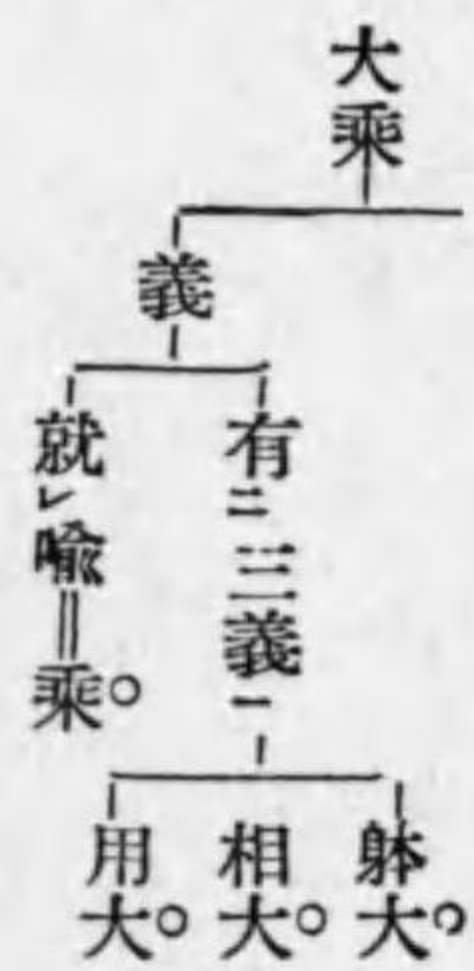
一切諸佛、本所乗故一切菩薩、皆乘此法到如來地故

一切の諸佛、本所乗の故に一切の菩薩、皆な此の法に乗じ如來地に到るが故に。

とあつて、乗の字を解したので乗、即ちわれ／＼お互の心は此の三大を有して躰も相も用も無限であります、此の心を完全に修治して参りまして其の性徳を充分に現はしますれば、われ／＼は迷の境界を離れて佛の境界に入ることが出来るので、古來一切の佛は皆な此心に乗じて佛と成られたので、此心に依らずして佛となるべき道がない、乗といふのは運載うんさいの義で、佛は本よりこれに乗りたまひ一切の菩薩方皆な此の心に乗つて、佛と同じ如來地に到らねばならぬといふことを示したのであります、つまり大乘の法は心、これを大乘と名けたる義は三大の妙躰妙相妙用あるによるのであるといふのが此の立義分の大旨で、解釋分では更らにこれを詳しく説いたのであるから、解釋分を讀んでから再びこの立義分を讀むと一層明に此意を知ることが出来る、立義分の大躰は、

法 衆生心 眞如  
生滅





### 八 眞如生滅の二門

本論の主旨は一心二門三四大信五行にあるのであるといふことは前にも述べたが、其中一心二門三大的ことは立義分に於てこれを示されてある、尙ほこれだけでは充分でないから、これを詳説したのが解釋分で、起信論の教理の中心はこの解釋分にあると見てもよいのである、解釋分は三種に分たれてをるので、一は顯示正義とて大乘の眞意義を示し、二が對治邪執とて誤謬の見解を破り、三が分別發趣道相とてこれには正當なる修行の道程を示したので、此中에서도顯示正義が一番肝要であります、今ま本文を擧げますと、

解釋分の三種

已說立義分次說解釋分解釋有三種云何爲三、一者顯示

### 正義、二者對治邪執、三者分別發趣道相

已に立義分を説く次に解釋分を説かん、解釋に三種有り、云何か三と爲す、一には正義を顯示す、二には邪執を對治す、三には發趣道相を分別す。

とあります、顯示正義といふのは正しく大乘所立の法義を顯示するので、次ぎには邪執を對治し、さて、其次ぎには趣正の階段を辨せねばならぬ、ソコで此三つに分けるので、此三つのことは後に詳しくわかりますで、こゝには略しておきます、先づ第一の顯示正義に就いて、文に、

顯示正義者、依一心法、有二種門、云何爲二、一者心眞如門、二者心生滅門、是二種門、皆各總攝一切法、此義云何、以是二門不相離故

正義を顯示すとは一心の法に依て二種の門有り、云く何をか二と爲す、一には心眞如門、二には心生滅門是の二種の門、皆各々一切の法を總攝す、此の義云何ん、是の二門相離れざるを以ての故に。とあります、一心が眞如生滅の二門に分れるといふことは已に立義分に於てこれを説いた



が、今解釋分に於てこれを解釋するに當り、先づ第一に大乘の法躰たる衆生心を二大部門に分つて辨明せんとして、一心の法に依りて二種の門ありといひ、眞如と生滅との二大部門を立てたのであります、これはたゞに心に就てのみではなく、天地萬象、何に就て論じましても此二大部門のないものはござりませぬ、それは何故かといふに、天地萬象、何物か其の本躰の無いものがござりませう、眞如とは其本躰に名けたので、已に本躰のあるなれば其の現相といふものは當然あるべきものです、生滅とは其の現相に名けたので、毎度同例を出すやうであるが、水と見たのは本躰(眞如)、波と見たのは現相(生滅)であります、水と見るときは不生不滅で、波と見るときには生滅があります、生滅があるから萬象さまざまの差別がある、即ち水は一つちやが波はいろいろ別々で、水は少しも變易はないが、波には變易がある、今これをいろいろの方面から見ますと、次ぎのやうになります。

本躰||絶對||平等||不變||自由||獨立||不生不滅  
現相||相對||差別||變易||不自由||依立||生滅

といふやうになる、宇宙萬象皆な此の如くであります、今は手近くわれわれがお互の

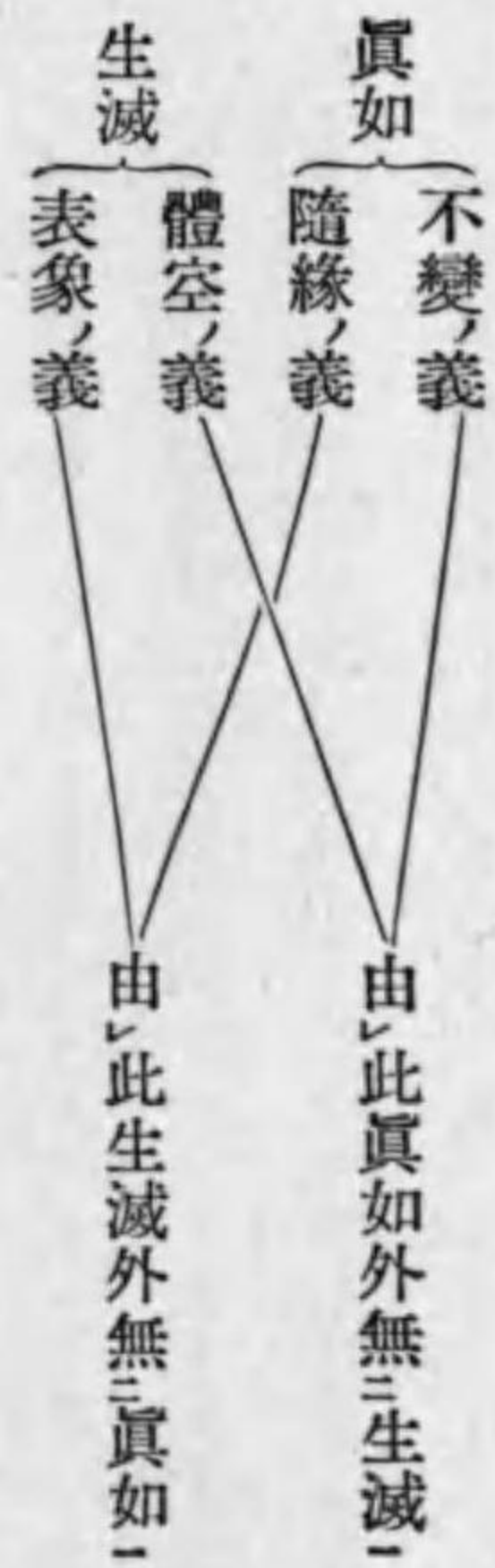
眞如と生滅

眞如と生滅との關係

心の根柢を以て大乘の法躰としたのでありますから、其心に就いて心眞如、心生滅の二つに分けたのです、而して此の二つは各一切法を總攝して、生滅から見れば宇宙萬象生滅せざるはなく、眞如門から見れば宇宙萬象不生不滅ならざるはない、波と見るの時波ならざるはなく、水と見るの時皆な水ならざるはない、眞如門から見れば宇宙平等一如であるが、生滅門から見れば萬象さまざまの區別がある、此の眞如と生滅とは如何なる關係があるかといふに、此の二門は相離るゝものではない、二にして二ならずで、眞如と生滅の二門は二つではあるが、其の實一つで離れるものではない、波を離れて水を求めることは出來ず、水を離れて波を求むるとの出來ぬやうなもので、眞如即生滅、生滅即眞如である、たゞ同一のものに觀察點を異にしたのに過ぎないのである、義記には眞如門の方を「染に非ず淨に非ず、生に非ず滅に非ず、動せず轉せず、平等一味にして性差別なし、衆生即ち涅槃、滅を待たざるなり、凡夫彌勒同一なり」とあつて空間的に平等無差別で、時間的に不生不滅なることを示し、生滅門の方は「熏に隨て轉動して染淨となる、染淨成ると雖も性恒に不動なり、只不動に由て能く染淨となる、是故に不動亦動門にあり云々」といふてある、ソ



コテ眞如と生滅と全然區別して見る時は、  
 眞如は不變の義、生滅は起滅の義。  
 ちやが其の眞如の縁に隨て活動するところ直に生滅あり、生滅の躰はといへば空であるの  
 であるから、眞如の外に生滅なく、生滅の外に眞如なしといふことが出来る、村上博士の  
 「起信論達意」には明瞭に此關係を示して、



とある、ツマリ説明の都合によつて眞如の生滅のと區別して見るものゝ、ともに一如來藏  
 心の中に攝せられるものであるから同一であるのである、これが即ち泰西哲學者の所謂現  
 象即實在論で、耶蘇教のやうに本躰たる神と、現象たる天地萬物とを全く別物に見てるの  
 ではない、われは凡べての現象には必らず本躰あるが故に此の現象(生滅)によつて

現象即實在

實體(眞如)の存在を知り、現象は實體の現れなるが故に實體(眞如)によつて其の現象  
 (生滅)たるを知るのであります、されば本文にも是の二門離れざるが故にとあります。  
 たゞ義理の辨明に於ては暫く二門に分つのみであるから、其の體を論ずる時はいつも平等  
 一如であります。

### 九 眞如の解釋

本論は上述の如く一心を眞如生滅の二門に分ち、此の二門相離れざるを説き、更らに心眞  
 如の方に向て説明を試みました。曰く、

法界の大總相

心眞如者即是一法界、大總相、法門、體、所謂、心性不生不滅。

心眞如とは即ち是れ一法界の大總相、法門の躰、所謂、心性不生不滅なり。

で、一々字義をいへば一法界といふのは無二の眞心をいふので、一二と數へる一ではなく、  
 眞如の躰性平等不二なるを以て一といひ、其の法界といふのは眞如は一切功德法の依る所  
 であるからで、大總相といふのは眞如は能く萬有を該有するからで、法門の躰とあるのは



聖者の通ひ入る無量の法門の躰となるといふことで、つまり不生不滅なる眞如を形容したのです、されば此の不生不滅平等一如なる眞如より、如何にして萬象の差別が生ずるかといふに、次ぎの文に、

一切諸法、唯依妄念、而有差別、若離心念、則無一切境界之相。

一切の諸法は唯だ妄念に依りて差別有り、若し心念を離るれば則ち一切境界の相無し。

で、それは妄念とて間違つたる心を以て見るから差別があるので、此の妄念がなければ一切境界を立て、差別する相はないのであります、抑もわれ／＼お互が何が故に萬象差別を認むるかといふに、青い眼鏡をかけて凡ての物を青いと見るが如く、こちらの心に間違があるからです、これを唯識の方では夜間に繩を見て蛇ぢやと思ふやうなもので其の實蛇でも何でも無い、蛇でもなんでも無いものを蛇と見るのを遍計所執といひます、これは全くの間違ひ、イヤ蛇ではない繩であると見るのを依他起性といふので、これも未だ正しき見方ではありませんぬ、何故かといふに繩といふものも其の本躰が繩でない麻絲ぢや、麻が

唯識の三性

因縁によつて繩となつてをるので、繩と見たのも假りに他に依て出来てをるのに過ぎない、それを麻なりと本躰を認むるのを圓成實性といひます、然るにわれ／＼は直に此の本躰を認むることを知らず、遍計の妄情を以て本來無いものがあると見てをるのである、此妄念（本文心念とあるはこゝでは妄念と同義であると見て差支はない、）を離れさへすれば差別の相はなくなつて、平等一如の眞如を見ることが出来るのである。

是故一切法、從本已來、離言說、相離名字、離心緣相、畢竟平等、無有變異、不可破壞、唯是一心、故名眞如。

是の故に一切の法は本より已來た言說の相を離れ、名字の相を離れ、心緣の相を離れて畢竟平等にして變異有ることなく破壞す可からず、唯是れ一心なり、故に眞如と名く。

已に一切差別の相を妄念から出るのであるといたしますれば、この妄念を離れれば一切差別の相はない、平等一如ぢや、平等一如であるならば名の付けやうもなければ語の云ひやうもない、凡そ言語といふものは自分の心の中に映つたる虚影によつて、甲の乙のとつける符徴に過ぎないのであるから、差別の相を離れた眞如其者は甲とも云へなければ乙とも



いへないし、又心で分別することも出来ない、それで言説の相を離れ、名字の相を離れ、心縁の相を離るといふたので、もと／＼真如といふものは平等一體で、甲だの乙だのと差別することの出来るものではないのであるから、變異ちがひといふものもなく、如何にしても破壊すべきものでない、此一心をいふのであります、更らに、

以一切言説、假名無實、但隨妄念不可得故、言真如者亦無有相、謂言説之極、因言遣言

一切の言説假名にして實無く、但妄念に隨つて不可得なるを以ての故に、真如と言ふは亦た相、有ることなし、謂く言説の極、言に因て言を遣る。

離言真如

というて、真如の言説を離れたことを示してある、抑も本論に於て真如を説明するのに二つに分れてをる、一を離言真如りごんしんじよといひ、他を依言真如いごんしんじよと云ふので、離言真如の方では真如は萬象の實體であるから、到底説き示すことが出来ぬといふので、依言真如の方は真如は説く可らざるには相違ないが、説かなければ此の真如を證悟しょうごする方便がないから、假りに言語に依て説くのであります、今こゝに示してあるのは、離言真如りごんしんじよの方で、一切の言説

といふものは皆な假りの名で、妄念に隨つて附けてをるのであるから、真如というたからとて別に相のあるのではない、此の真如といふ名も決して當を得たものぢやないが、已むを得ず宇宙の眞理の極致に此の名を付けたので、實際に於て真如といふことが會得出来れば、こんな名は不必要であるが、それまでの所を仕方なく附けたので芝居の柝聲ひゃくせいぢや、これは喧しい聲をとどめんが爲めに打つので、其の聲が止んで幕を明ければ柝聲も亦止めねばならぬやうなものである、即ち言語は月を標すの指、其の月たる真如が認められれば指には御用がないのです。

此真如體、無有可遣、以一切法悉皆真故、亦無可立、以一切法皆同如故、當知一切法不可説、不可念、故名爲真如

此の真如の躰、遣る可き有ることなし、一切の法悉く皆眞なるを以ての故に、亦立つ可き無し、一切の法皆同じく如なるを以ての故に、當に知るべし、一切の法説く可からず、念ず可からざるが故に、名けて真如と爲す。

これは更らに離言真如りごんしんじよを詳説したので、真如の躰は一切の法悉く眞實で、一點虚偽がない



から捨遣すべきものがなく、萬法悉く、平等一如にして一個差別の法がないから、一法の立すべきものもない、それ故説かんと欲しても説くことが出来ず、念はんと欲したからとて念ふことも出来ぬので、これを眞如と名けたのであるといふのであります。

問曰、若如是義者、諸衆生等、云何隨順而能得入、答曰、若知一切法雖説、無有能説可説、雖念亦無能念可念、是名隨順。若離於念、名爲得入。

問うて曰く、若し是の如き義は諸の衆生等云何んか隨順し、而して能く得入せん。答へて曰く、若し一切の法を説くと雖も、能説の説く可き有ることなく、念ずと雖も亦た能念の念ず可き無きを知らば、是を隨順と名く、若し念を離るゝを名けて得入と爲す。

若し夫れこのやうに不可説のものであるならば、諸の衆生は如何にして此の法に隨順し、此の法に入ることが出来やうぞといふ問に答へて、若し一切の法、説くといへども説くべきなく、念ずといへども念ずべきもないと知つたならば、それが此の眞如に隨順したといふことが出来るので、能く此の法に隨順して妄念を離れ、彼の無念の眞理に契ふやうにな

依言眞如

ればそれを得入であると答へたので、次ぎの依言眞如と参照して考へるがよろしい。

復次眞如者、依言説、分別有二種義、云何爲二、一者如實空、以能究竟顯實故、二者如實不空、以有自體具足無漏性功德故。

復た次に眞如とは、言説に依りて分別するに二種の義有り、云何か、二と爲す、一には如實空、能く究竟して實を顯すを以ての故に、二には如實不空、自體有つて、無漏の性功德を具足するを以ての故に。

凡そ宇宙の眞理の躰といふものは、言語を以て形容すべからざるものであるから此の眞如は離言絶慮で、何とも云ふことの出来ないものである、即ち不可説的、不可言的である、併し不可言ではわれ／＼お互の心に、此の不可言不可説の寶玉を具へてをるといふことも、信ずる心を起すことが出来ぬ、此の信を起さざれば修行の道に就くことも出来ぬから暫くこの離言の眞如に假言を設けてこれを説明しなければならぬ、そこで此の依言眞如の方は更らに如實空と如實不空との二つに分つた、如實といふものは眞如といふのと同じこと

眞如の空  
と不空



とです、即ち此眞如を空と不空とに分つたので、眞如は已に究竟の眞理であるから一點の妄染といふものはない、若し少しでも妄染があれば眞如といふことが出来ませぬ、已に眞如といふ以上は一點の妄もないので、光明赫々として闇黒のないやうなものであります、これを空といふ、空といへば何もないが、何もないといへば暗去つて明もないことになる、今いふ眞如はそんなものではない、無漏の性功德を具足するのであるから不空といふので、闇去つて明存するの状態である、前にも一寸御話し申した通り、眞如は非染非淨で非善非惡であるが、こゝには宗教的に其の信を起さしむるのが目的であるから、常に其の眞如の性徳に隨順した善の方を擧げてをるので、若し眞如の根本義に至ては善なく惡なきと共に善もあり惡もあるのぢや、併し之は本論の如き緣起論を主とした方をいふのでなく、實相論に重きを置いた禪宗などでは本來無一物と空をいふと共に、無一物處無盡藏、花あり月あり樓臺ありで、不空の義を表はしてをる、或る人が寒山と捨得の畫を評して、寒山の方に「拂ふべきほこりもないに箒持つ人の心ぞ塵となりぬる」と空の方をいふと、捨得の方では「拂ふべきほこりもないといふ人を拂はんための箒なりけり」と不空の義を示したとい

ふ話があるが、今は緣起を主とする起信論のことであるから、闇黒はなくして光明のみあるやうに話したので、其の實、眞如の本體は闇もなく明もなき（空）と、闇もあり明もある（不空）とを兼てをるのであるが、こゝにては闇を去る（空）と、明ある（不空）とをいふやうに話をしたのであります。

如實空

所言空者、從本已來、一切染法、不相應故、謂離一切法、差別之相、以無虛妄、心念故。

言ふ所の空とは本より已來、一切の染法、相應せざるが故に、謂く一切の法の差別の相を離る、虛妄の心念無きを以ての故に。

染法といふのは淨に對するので、惡法と見てよい、即ち眞如には惡法が應ぜぬから差別の相がない、其差別の相がなく、其差別の相を起すべき虛妄の心念がなく、一味平等であるのであるから空といふので、詳しく云へば

當知眞如、自性、非有相、非無相、非非有相、非非無相、非有無俱相、非一相、非異相、非非一相、非非異相、非一異俱相、乃至



總說依一切衆生以有妄心念々分別皆不相應故說爲空  
若離妄心實無可空故

當に知るべし、眞如の自性有相に非ず、無相に非ず、非有相に非ず、非無相に非ず、有無俱相に非ず、一相に非ず、異相に非ず、非一相に非ず、非異相に非ず、乃至總じて説く、一切衆生妄心有るを以て、念々分別するに依つて、皆相應せず、故に説いて空と爲す、若し妄心を離るれば實に空す可き無きが故に。

で、眞如を如實空と見るのは消極的で、不空と見るのは積極的である、今は空と見るといふのは差別界の上のことで、平等一如の所は有といふものもなければ無といふものも無いとさればといふて其の中に無量の功德がある、此の眞如は非有相ともいへねば非無相ともいへぬ、されば有無俱相といふべきかといふに、斯ういふことが出来ぬ、一相でもなければ異相でもない、非一相でもなければ非異相でもない、一異俱相かといふにさうも云はれぬ、何故かといへば有といひ、無といひ、非有といひ、非無といひ、一といひ異といひ、非一といひ、非異といひ、俱相といふのも、皆な差別の上の話で、畢竟妄心を以て分別す

如實不空

るのであるから、到底これで盡すことは出来ぬ、若し妄心を離れたならば塵垢を去つて鏡の光明があらはるゝが如く、こゝにこれらの分別を離れたる空が現はれる、已に空の現はるゝの時又空すべきものもなくなる、空すべきものゝない所こゝに不空のすがたとなる。

所言不空者、已顯法體空無妄故、即是眞心、常恒不變淨法  
満足、則名不空亦無有相可取、以離念境界、唯證相應故

言ふ所の不空とは已に法界空にして妄なきことを顯はすが故に即ち是れ眞心、常恒不變なり、淨法満足す、則ち不空と名く、亦た相の取る可き有ること無し、離念の境界、唯だ相應を證するを以ての故に。

これは如實不空の方の説明で、妄念已に洗ひ去つた所はこれ眞心で、塵垢拭ひ去つて鏡の光、皎々たるが如く、常も恒も不變も同じやうな意味で、ツマリ永久變りなく、淨法（染法に對したので善法と見るがよい）が満足して平等一如、相の取るべきない、已に相あればこれ妄念によつて起つたのであるが、妄念已にないのであるから相もない、相もないからこれ實に離念の境界である、此の離念の境界、明歴として萬象を止む、これで依言眞如



の兩方面を説きましたで、左に解し易く眞如の分類を示します。

離言眞如

眞如

依言眞如

如實空(消極的)  
如實不空(積極的)

である。而してこの離言と依言との區別は、(一)離言眞如は眞如を絶對に論じて、心眞如は一法界大總相法門の體といひ、依言眞如は相對的に論じて、言説によつて分別するに二種の義ありといひ、(二)離言は絶對的に眞妄不異といひ、依言は眞妄不一と見るのである、これで眞如の大體を話したが、眞如と生滅とは全く別物でない、眞理の兩面であるから、これから生滅門の方を説きますので、それを照し合して此の眞如の義を會得して下さい。

### 十 阿黎耶識の解

已に心の本體たる眞如門を説いたのであるから、これより其の心の現相たる生滅門のお話をせねばなりません、これをお話するに就ては、こゝに阿黎耶識といふものゝお話をせ

ねばなりません、即ち本文

心生滅者、依如來藏故、有生滅、心所謂不生不滅、與生滅和合非一非異、名爲阿黎耶識

心生滅とは如來藏に依るが故に生滅の心有り、所謂、不生不滅、生滅と和合して一に非ず、異に非ず、名けて阿黎耶識と爲す。

湛々たる一心法界は尙ほ水のやうなものである。水あるが故に波のあるが如く、不生不滅の心の躰、水に、無明の風吹てこゝに生滅の波が起る、されど此波と水との離れざるが如くに、生滅と不生滅とは別々のものではなく、相和合して同一とも云へねば、異つてをるともいへぬ、この不生不滅の本躰と生滅の現相と相和合して一に非ず異にあらざる所を阿黎耶識といふので、これは本躰たる眞如が生滅の方に一轉して、更に千狀萬態の諸現象を生ぜんとしたる位で、眞如開發の初歩で、天地萬象は此の阿黎耶識の一轉し三轉し四轉し五轉し六轉し、乃至無數に輾轉して、細より塵に移りて現はれたので、眞如の外に萬象なきが如く、阿黎耶の外に萬象はない、されば阿黎耶は梵語で、支那に譯して無没といふ、

阿黎耶識の意義



これは萬有を含藏して没失すること無しとの義で、天地萬象皆な悉く此阿黎耶から出るので、阿黎耶に含まれぬものは何にもない、それで此の識のことを又藏識ともいひます、藏識とはすべての法を含藏してをるといふことで、詳しく云へば藏といふ字には含包と出生との二つの義があるので、此阿黎耶識が能く一切の法を含んでをるから藏といひ、天地萬象が此識から出るから藏といふのであるといふことで、此次ぎの文句にも「能く一切の法を攝し一切の法を生ず」とあります、サテ此阿黎耶(Arya)の字を唐の玄奘三藏は阿頼耶の語を用ひてをります、此阿頼耶の語を用ひて玄奘三藏の譯した唯識論と、阿黎耶の語を以て眞諦三藏の譯した起信論とは、佛教上に於ける位置が違ふものでありますから、殆んど阿黎耶と阿頼耶とは別のものゝやうに思はれてをります、實際唯識の方で取扱ふ阿頼耶と、本論でいふ阿黎耶とは其の意味が異ひますから、別の字で示した方が便利であります、それは如何であるかといふに、唯識論は權大乘に屬するので、此阿頼耶識より天地萬象が出たのであるといふが、此阿頼耶を生滅の上からのみ見て、不生不滅の眞如との關係をいひませぬが、起信論に於きましては此阿黎耶識は一面生滅に屬すると共に、一面不生不滅の

眞如で、本文に「不生不滅、生滅と和合して一に非ず異にあらず」といふてをります、それでありますから唯識論は阿頼耶緣起に屬し、起信論は眞如緣起に屬するのであります

此識有二種義、能攝一切法、生一切法、云何爲二一者覺義、二者不覺義、

此の識に二種の義有り、能く一切の法を攝し、一切の法を生ず、云何か、二と爲す、一には覺の義、二には不覺の義、

阿黎耶の二義

此阿黎耶識に二つの義があるので、一を覺といひ、他を不覺といひます、覺といふのは覺照、覺明などといふ覺の字で、鏡の性質清朗なるやうなもので、われ／＼の阿黎耶識は清淨潔白、一點の妄塵もなく、明皎々として能く萬象を照すの徳があるのを指したので、不覺といふのは不は無で素は明ですから、明皎々たる鏡に垢のつき、月に曇の出來たやうなもので、言を換へて云へば覺は眞如、不覺は無明此二つの合した所が阿黎耶であるから、今先づ二つに分つたので。



本覺

所言覺義者、謂心體離念、離念相者、等虛空界、無所不徧、法界一相、即是如來平等法身、依此法身、說名本覺。

言ふ所の覺の義は謂く心體念を離る、離念の相は虛空界に等しくして徧からざる所無く、法界一相、即ち是れ如來の平等法身、此の法身に依つて、説いて本覺と名く。

これは覺不覺の覺の方を説いたのだが、本論に於ては覺を更に本覺と始覺とに分つてをるので、阿黎耶識の區分は左のやうになつてをる。



今は其中の本覺の上をいうたので、元來われ／＼お互の心は明皎々たる光を放つべき本徳を具へてをるので、此本徳あればこそ磨けば光があるので、われわれお互修行の功をさへ積めば、佛とも菩薩ともなることが出来るのである、此の心の本體は妄念を離れてをる、妄

始覺

念を離るゝのであるから一味平等で、不覺の闇なきのみならず大智惠光明があらはれてをる、虛空界といふのは所としてあらざるなきを以ていふので、これは周遍を意味するのですし、又無差別の義があつて虛空の一味平等で、區別することがないのを指すので、即ち「徧せざる所なく、法界の一相」なるをいうたのであります、此本覺のことをいふには、始覺との關係を見てもらはねばならぬ、文に

何以故、本覺義者、對始覺義、說以始覺者、即同本覺、始覺義者、依本覺故、而有不覺、依不覺故、說有始覺、又以覺心源故、名究竟覺、不覺心源故、非究竟覺。

何を以ての故に、本覺の義は始覺の義に對して説く、始覺は即ち本覺に同じきを以てなり、始覺の義は本覺に依るが故にして而も不覺有り、不覺に依るが故に始覺有りと説く、又心源を覺するを以ての故に究竟覺と名く、心源を覺せざるが故に究竟覺に非ず。

とある、本覺といふたのは始覺に對しての語で、本覺といふのは本來の性徳であるから草木の種子のやうなもの、それがだん／＼莖だの枝だの葉だのと生長してゆくのは始覺のや



うなものぢや。かくて立派な草木になつた所が本覺の性徳の現はれたので、此時は始覺が漸次に開發して本覺に同じくなつたのでありますから、本覺の外に始覺とてなく、初めに起りたる本體（本覺）に還歸するのであります、抑も覺と不覺とに分けた此の覺は、如何にして知るかといふに、われ／＼の心に不覺の無明のあるといふことは誰しもわかる。吾々が靜かに自分の心を考へて見ても、あゝ悪かつたといふ考が起る、此の悪かつたといふことの氣のつくのは、我が心はもとも明かでないならぬからである、錆びたを氣のつくのは刀元來明かでないならぬからで、我が心に此無明の煩惱の曇のあるのは、其本體に鏡があるからである、この鏡が明なものでなければ曇つたと氣の附くべき筈はない、それを「本覺に依ての故に不覺あり」といふ、さて其曇があるから漸次にこれを去つて本覺の徳を現はす始覺といふものがある、此始覺といふものによつて漸次に其錆を拭ひ去れば本覺の徳が現はれる、瓦石のやうなものは如何に磨いても光りは出ぬ、これは其本覺たる固有の光がないからで、固有の光がなければ不覺といふものもない、不覺といふものないから始覺といふものもないが、われ／＼の心は本來明皎々たるべき性徳（本覺）があるから、

それの上になる曇（不覺）がある、曇があるからこれを拭ひ去つて本覺の徳を現はす始覺が必要であるが、漸次拭ひ去つて一點の曇ないところに至れば本の姿と少しも變りはない、始覺は本覺と同じやうになつて心の本源を覺したのであるからこれを究竟覺といひ、始覺が未だ本覺と同じやうにならぬ間は猶ほ幾分の曇があるから究竟覺とはいはれぬ、義記には「始覺道圓にして本覺に同じ故に究竟と云ふ（中略）其源を了せず始（覺）また本（覺）に同せざる故に非究竟といふ」とあります、阿黎耶識は此の如くになつて活動を始めるのであります、これから此始覺開發の順序を説いて、われ／＼の心垢を去り眞如の本徳を現はすやうに精細に示されてあります。

## 十一 始覺及び本覺

本論は更らに此究竟覺と非究竟覺に就て、これを生住異滅の四相に區別して詳しく説いてあります、先づ本文を掲げます。

此義云何如凡夫人覺知前念起惡故能止後念令其不起

凡夫覺



雖復名覺、卽是不覺故

此の義云何ん、凡夫の人の如きは前念の起惡を覺知するが故に、能く後念を止めて其れをして起らざらしむ、復た覺と名くと雖も卽ち是れ不覺なるが故に。

これは滅相に當るので、凡夫がこれまでは廣く惡業を造りて覺知せなかつたが、今は佛法を信じてこれまでのことは實に惡かつたといふことを覺知し、之から後は惡業を止めてそれを起らしめぬやうにしようとする、卽ちあゝ惡かつたと感ずるので、之を普通に覺とはいうてをるが、まだ覺といふことは出來ぬ、不覺の境界である、それは何故かといふに、惡念は滅したがまだ惡業の原因たる惑のことを知らぬから覺とは云はれぬのです、凡そ佛教の修行の階級には五十二位といふことがあつて、十信、十住、十行、十回向、十地、等覺、妙覺といふ、これもくわしく講義をするとよいが、それは非常に冗長に且つ煩瑣に亘るからこゝには略しておくが、つまり十信といふのを初めとして次第に其の階級が高くなるのです、今は凡夫が十信の位に入つて初めて惡念を滅したのを指すので、其次ぎは、

如二乘、觀智、初發意菩薩等、覺於念異、念無異相、以捨麤分

別執著相故、名相似覺

相似覺

二乘の觀智、初發意の菩薩等の如き、念異を覺して異相無し、麤分別執著の相を捨つるを以ての故に相似覺と名く。

これは二乘というて聲聞緣覺、卽ち小乗の人々や初發心の菩薩方(是を三賢の菩薩といふ)は、煩惱といふものは心念の異相であるといふことを知つて煩惱其者の自性を覺る、そこで念に異相がなくなりますから我見といふやうなものがなくなる麤といふのはアライといふので細に對したので、細はコマカイで、煩惱の微細なるをいふのです、この微細なる煩惱までも捨てやうとするには非常の智慧を要するが、龜大な煩惱を捨てるには微細な煩惱を捨てるよりも力が少くてよいのである、今は未だ充分なる位でないから麤の分別執著の相を捨つるといふたので、分別とは我他彼此と別ちてそれに執著する、いはゞ我見のことである、これは念異を伏したので、覺は覺だが未だ眞の覺ではないからこれを相似覺といふのです、次ぎは、

隨分覺

如法身菩薩等、覺於念住、念無住相、以離分別麤念、相故、名



### 隨分覺

法身の菩薩等の如き念住を覺して念に住相無し、分別麤念の相を離るゝを以ての故に隨分覺と名く。これは初地より十地に至るまでの菩薩をいふので、初地の菩薩は已に法身徧滿の義を覺つてをるのであるから、これ等の菩薩は最早や心外に實法ありなぞとの執著はなくなつてをるが、猶ほ一切の法たゞ是れ識と知つてをるから、此心の上にいるゝな執著を起す、これを法我といふ、今これも猶ほ迷ひであるといふことを知つたから念に住相といふものがなくなつた、已に人我の見は去つたが法我の見は未だ遺つてをる、この法我の見を除いたから分別麤念の相を離るで、全く妄境の存在を許さぬ、併し未だ煩惱生起の原因を滅することが出來ぬのであるから充分なる覺とは云へぬ、それ故に隨分覺といふのである、これまでは皆な未だ究竟の覺ではないが、其次ぎが究竟覺である。

### 究竟覺

如菩薩地盡滿足方便、一念相應覺心初起心無初相以遠離微細念故得見心性心即常住名究竟覺

菩薩地盡が如き方便を満足して一念相應して心の初起を覺して心に初相無し、微細の念を遠離する

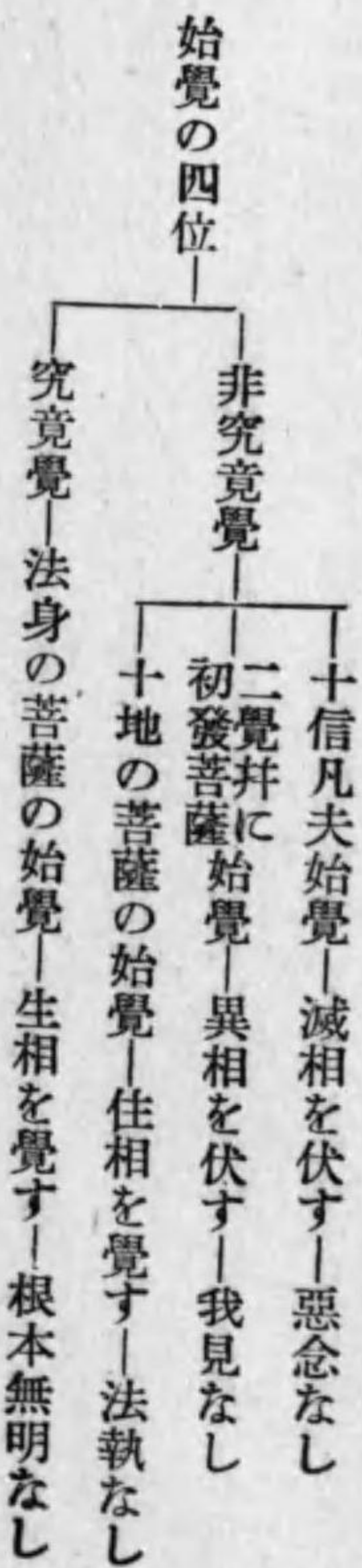
を以ての故に、心性を見ることが得、心即ち常住なるを究竟覺と名く。

でこれは等覺の菩薩の覺で究竟覺であります、心の初起といふのは心念の生起する根本無明で、實に微細なものであります。此の微細なる根本無明を離れて見得るのでありますから、煩惱の起る初めがないのです、そこで初めて全く煩惱の夢さめて心源に透徹したので、又本の平等一如なる心性に還るのでありますからこゝに於て始覺は本覺と同じこととなる、今こゝに始覺の順序をお話し申しますれば、初めに滅、次ぎは異、次ぎは住、次ぎは生です凡そ此世の中的一切の者、何一つとして、生、住、異、滅の四相のないものはありませぬ、こゝに一の櫻がある、それは種子によつて生じ、立派な木となつてこゝに住してをる、それがやがて葉が枯れ枝が折れて異つてくる、異つて終には全く枯滅してしまふ、土瓶でも茶碗でも、生と出來ることがあつて出來た、其出來た所は住、住はトドマルの意で、それが次第に異つて終には破れてしまふ、之も生住異滅ぢや、われゝの心にも此四相がある、この四相を滅してこそ、初て平等一如の本源に至ることが出來るのである、生相といふのは心念初めて動きこゝに煩惱を生ずるので、明皎々たる鏡、一點の曇が出來たので、この

### 心の生住異滅



曇ますく增長して妄境固く住す、これ住相ぢや、それから自他の差別が起つて彼と我と異るといふ念が起る、これ異相。我他彼此の區別が出来ると、貪慾や瞋恚の心が起りさまざまの悪業を爲し、鏡の曇はますく甚しく終に錆が出ます、これが滅相です、滅は終極の意であります、先づ最初はこの悪業に気が付くから、これを伏して其次ぎには、此悪業の根本たる我他彼此の差別の異相を伏し、それから已に錆を拭ひとつたが、まだひどい錆がある、これも拭つたが一面に曇は尙ほ遺つてをる、これを拭つて全く曇をなくするのが住相を滅するのです、併しまだ最初曇の起つた一點がある、これをも滅してもとの如き明皎々たるものにするのが生相を滅するのであります、これを圖に示すと。



次ぎの文は此始覺の四位のことを結んだのであります。

始本不二

是故修多羅說若有衆生能觀無念者則爲向佛智故又心起者無有初相可知而言知初相者即謂無念是故一切衆生不名爲覺以從本來念念相續未曾離念故說無始無明若得無念者則知心相生住異滅以無念等故而實無有始覺之異以四相俱時而有皆無自立本來平等同一覺故

是の故に修多羅に、若し衆生有りて能く無念を觀ずる者は、即ち佛に向ふ智と爲すと説く、故に、又心起とは初相の知る可き有ること無し、而して初相を知ると言は即ち謂く無念なり、是の故に一切衆生を名けて覺と爲さず、本より來た念々相續して、未だ曾て念を離れざるを以ての故に無始の無明と説く、若し無念を得る者は、即ち心相の生住異滅を知る、無念等しきを以ての故に、而して實に始覺の異有ること無し、四相俱時にして有り、皆な自立無く本來平等にして同一覺なるを以ての故に。

是の故に修多羅といふのは前にもいふたお經のことで、これは楞伽經の文句と申すことです、其御經の中に若し衆生あつて上に示すが如く、次第に心念上の四相を去つて無念を觀



するものは、佛地の無念を證得するといふことが説かれてあると、經を引て此論を確めたのです、義記には金光明經に「諸の伏道に依て起事心滅す、法の斷道に依て根本に依る心滅す、勝拔道に依る根本心盡く」とあるのも、此に引用せられて居るので、これを解して「諸伏道といふは三賢の位なり、起事心滅とは即ち此の論の中の麤分別執著の相を捨する、是れ異相滅するなり、法斷道とは法身の位に在り、根本に依る、心滅すとは此論の中の麤の念相を捨するにて即ち是れ住相滅するなり、勝拔道とは金剛喻定なり、根本心盡くとは此論の中の微細の念を離る、これ生相盡くるなり」とあります、次ぎの又心起とは初めて覺心の起るとき、初めの動念これ本來靜かなるものと知るのでありますから、初相の知るべきものあることがないから無念である、無念を覺といふのであるから念々相續して、未だ會て此念を離れたことなく、惜しい慾しいと迷ふてをるわれ／＼衆生は覺と名くることが出来ない、これを無始無明といふので、本來未だ會て此念を離れたことがないのぢや、若し此無念を得たならば心相の生住異滅をも知ることが出来る、此の心の四相を知つてこれを滅してゆけば始覺と本覺とは異なることなく、本來平等の同一覺となることが出来るの

である、何故かといふに此心の四相といふものは、同時に相依て僅かに其覺を保つもので、波に生住異滅の四相があるやうに、僅かに生してをるので獨立すべき自性があるのではなく、同一平等の水の上にあるのであるから、此波の四相止むの時、本覺の水現るゝ如く、心の四相は念々相續して止むときがないが無念を得た時は、波靜りて同一覺となるのであります、以上は始覺の本覺に還る順序を述べたので、之から御話するのは其本覺の性徳であります。

## 十二 本覺の性徳

本論に於ては阿黎耶に覺不覺の義ありといひ、其の覺の中に始覺と本覺との區別があるといひ、其の始覺を更らに四つの階級に別ち、漸次に滅異住生の四相を破して本覺と同等するやうに説いてあります、さて已に始覺の順序を説いたのでありますから、本覺の性徳は如何なるものかといふことを見ねばなりません、併し前にもいひます通り始本不二で、始覺と本覺とは離れたものでありませぬから、本覺の御話するに就ても始覺のことを申さね





隨染本覺

ばなりませぬ。そこで本覺を二つに分ちて隨染本覺と性淨本覺とし、初めに隨染本覺といふのは、本覺の作用の上のことをいふので、これは是非始覺に關係して説かねばなりませぬが、次ぎの性淨本覺といふのは、本覺の體徳を現はしたのでござりまするので、直に本覺自躰に就て御話をするのであります。先づ初めに隨染本覺から説いてあります。

復次本覺隨染、分別生二種相與彼本覺不相捨離云何爲  
二、一者智淨相、二者不思議業相、

復た次に本覺隨染、分別するに二種の相を生ず、彼の本覺と相捨離せず、云何か、二と爲す、一には智淨相。二には不思議業相。

隨染本覺は更らに二つに區分せられます、一を智淨相、他を不思議業相といひます、本覺はかく二つの相を生じますものゝ、此二つもとく本覺の相を離れたのでありませぬから、彼の本覺と相捨離せずというてある、さて其の智淨相といふのは如何なるものかといふに。

智淨相者、謂依法力熏習如實修行、滿足方便故、破和合識、

相滅相續心相顯現法身智淳淨故

智淨相とは謂く法力の熏習に依りて如實修行し方便を満足するが故に、和合識の相を破し、相續心の相を滅して法身を顯現し、智淳淨なるが故に。

元來隨染本覺は其の名の示すが如く、本覺其者は元來清淨にして染汚してをるのではないが、其の清淨なる性徳を示さんが爲め染に隨ひて示すが、鏡の性徳を示さんが爲めに其の曇を取り去りて、漸次に其の本來の明皎々たる所を示すやうなもので、心にはいろ／＼な迷がある。これを去つて其の本徳を示す、即ち無明の雲去つて、本覺の月現はるゝやうなものである。そこで如何にすれば此の無明の雲が去つて、本覺本來の月が現はれるかといふに、法力熏習によつて如實修行して、教法の力で修行して其無明を除いてゆくの、十信より十往、十行、十回向、十地、等覺と、次第に修行して不覺（無明）を去つてゆくのです、この妄染に對して本覺の徳を現はすのを智淨相といひます、和合相を滅すとは阿黎耶識は生滅と不生滅との和合で、根本清淨なる不生不滅の躰が現はれてをらぬから此の和合相を滅し、相續心相を滅すとは、根本無明は無始よりこのかた念々相續してをるので

智淨相



あるから、此の根本無明をも滅して心の本源たる法身本覺を顯すのであります、更らに

此義云何、以一切心識之相、皆是無明、無明之相、不離覺性、非可壞、非不可壞、如大海、水、因風波動、水相風相、不相捨離、而水非動性、若風止滅、動相則滅、濕性不壞故、如是衆生、自性清淨、心、因無明、風動、心與無明、俱無形相、不相捨離、而心非動性、若無明滅、相續則滅、智性不壞故

此の義云何ん、一切の心識の相皆な是れ無明、無明の相、覺性を離れざるを以て壞すべきに非ず、壞す可からざるに非ず、大海の水、風に因つて波動し、水相風相、相ひ捨離せず、而も水は動性に非ず、若し風止滅すれば動相則ち滅し、濕性壞せざるが如きが故に、是の如く衆生の自性清淨の心無明の風に因りて動ず、心と無明と俱に形相無く相ひ捨離せず、而して心は動性に非ず、若し無明滅すれば相續則ち滅し、智性は壞せざるが故に。

一切心識の相皆な是れ無明で、われ／＼の心に思ひまするさま／＼のこと、皆無明の迷ひであります、此無明も本覺の性を離れたのではありませぬ、本覺の性を離れたのではないか

らとて、無明と本覺とは一でありませぬ、一でないというて全く別々なものでありませぬ、別々なものでござりませぬからこれを壞することは出来ませぬ、併し同一なものではござりませぬから、壞せぬわけには参りませぬ、涅槃經には此事を「明と無明と其性不二、不二の性即ち是れ實性」とあります、これを喩へて申しますれば、大海の水が風によつて波が起るやうなもので、われ／＼衆生の心はもと／＼清淨なものであります、これに無明の風が吹いて動き出すのであります、波の起る時、水相と風相とは互に離れませぬ、併し水もと／＼勝手に動くのではござりませぬから、風が止れば波が滅します、風が止んで波が滅したからとて、水の本來の性たる物を濕すといふ性は少しも變りませぬ、心に妄念の起る時、無明と心とは離れませぬが、無明が止れば念々相續してをる妄念は滅します、妄念は滅しても心本來の性徳たる本覺照察の智性は壞することが出来ませぬ、此壞すべきを壞して本覺の現はれたのが智淨相明です、次ぎは不思議業相で。

不思議業相

不思議業相者、以依智淨相能作一切勝妙境界、所謂無量



功德之相、常無斷絶、隨衆生根、自然相應、種々而現、得利益故

不思議業相とは智淨相に依るを以て能く一切の勝妙境界を作す。所謂、無量功德の相、常に斷絶なし、衆生の根に隨つて自然に相應し、種々に現じて利益を得るが故に。

われ／＼は法力の熏習により、如實修行して智淨相を現じ、無明の雲晴れて本覺眞如の月、皎々として照り渡る、これ智淨相に依るが故に、一切勝妙の境界を作すで、勝といひ妙といふ、共に此境界を形容した詞であります、已にかく明皎々と照り渡る上は本來の性徳を現はして、到らぬ隅もなく照り渡りて限りはなく、能く衆生の根機に隨ていろ／＼の相を現す、一輪の月が谷川の水にも其影が映れば、大海の水にも、桶の中の水にも、木の葉に置く露にも、其の影を宿すが如く、自然に相應じて能く衆生を濟度してゆくのがこの不思議業相で智淨相では妄念を去つて佛となり、已に佛となりたる以上は不思議業相を現はして、衆生の根機に應じて法を説き益を與へる、即ち智淨相は自分の染に隨ひてこれを除くところに現はれ、不思議業相は他の染に隨うてこれを除く佛陀の大用、本覺の妙用であり

ます、さてこれで隨染本覺は濟みましたが、これから性淨本覺のお話に移ります、以上は本覺の作用、これからは本覺の體相であります。

復次覺體相者、有四種、大義與虛空等、猶如淨鏡。

復た次に覺の體相とは四種の大義有り、虛空と等しく、猶ほ淨鏡の如し。

性淨本覺

本覺の躰は本來清淨で、丁度淨らかな鏡のやうなものぢや、この鏡によつて喻へて本覺の躰を示したので、これに四つある、一は如實空鏡、二は因熏習鏡、三は法出離鏡、四は緣熏習鏡であります、今一々これを説きませう。

云何爲四、一者如實空鏡、遠離一切心境界相、無法可現、非覺照義故、二者因熏習鏡、謂如實不空、一切世間境界、悉於中現、不出入、不失不壞、常住一心、以一切法、即眞實性故、又一切染法、所不能染、智體不動、具足無漏熏衆生故。

云何か、四と爲す、一には如實空鏡、一切の心境界の相を遠離して、法として現す可き無く、覺照



の義に非ざるが故に、二には因熏習鏡、謂く如實不空、一切世間の境界、悉く中に於て現じて不出、不入、不失、不壞、常住一心なり、一切の法即ち眞實の性なるを以ての故に、又一切の染法、染ること能はざる所、智體動ぜず、無漏を具足して衆生を熏するが故に。

如實空鏡といふのは本覺の躰中、一點の塵もなく全く空々寂々たる相をいふので、一切の心鏡界の相を遠離して、法として現すべきものがないのをいふ、二の因熏習鏡とは又如實不空鏡ともいうて、空々寂々ではあるが、本躰たる本覺の鏡のないのでない、已に鏡躰あるのであるから、一切世間の境界悉く之に現れるので、縁起の因ともなり、内熏の因ともなるので、我本覺の心を離れて別の相がなく、唯だ熏習の力によつて現れるのであるから、出るでもなく入るでもない、而も一切の現象が顯れて失はず、鏡中の影の双を以て壞ることが出来ぬが如く、不失不壞で常住一心、直如と同等で染法を現しても其爲めに汚されず、鏡中の影はいろ／＼に變るが、鏡の躰は未だ曾て動かぬやうなものであるといふので、其衆生を熏するといふのは義記に「衆生の爲めに内熏の因を作し生死を厭ひ涅槃を樂求せしむるが故に」とある、さて其次ぎが。

三者法出離鏡、謂不空法、出煩惱礙智礙、離和合相、淳淨明故、四者緣熏習鏡、謂依法出離故、徧照衆生之心、令修善根、隨念示現故

三には法出離鏡、謂く不空の法、煩惱礙智礙を出して和合の相を離れて淳淨明なるが故に四には緣熏習鏡、謂く法出離に依るが故に徧く衆生の心を照して善根を修せしめ、念に隨ひて示現するが故に。

とある。法出離鏡といふのは、鏡面にさまざまの影が映つても、鏡躰はその爲めに汚れるのではない、本覺の躰中たとひ萬象萬化の影ありとも、本覺はもとこれ清淨で、煩惱のさはりや、菩提の智を妨る智礙を出で、和合の相たる諸種の妄を離れてをるので、和合の相を離るゝが故に淳といひ、惑染なきが故に淨といひ、大智慧なるが故に明といひ、之を形容して法出離鏡といふ、さて此清淨なる鏡は徧く衆生の心を照し、本覺の躰用を現はして能く衆生の機縁に應じて佛身を示現し、善根を修めしむるのでありますから、四を緣熏習鏡といふたのです、上來述べましたる所は本覺の上を差別して其の性徳を現はしたの



で、前の二者如實空と因熏習とを自性淨といひ、後の二者法出離と緣熏習とを離垢淨といひます、同じく清淨ですが、前のは本覺の自性に就いていひ、後のは其の塵垢を離れて居る所からいうたからであります、今圖に示しますと、



となります、かくいろいろ煩瑣に分類してお話いたしますが、一言にして申しますれば、本覺の躰も相も用も清淨で、無量の功德があるといふことに過ぎないのであります。以上で本覺のことを御話し申しましたで、これから不覺のことを御話し申すのであります、此の不覺のことは非常に込み入つて、學者の最も難しとする所でもありますから、成る

可く解し易く説明することゝいたしませう。

### 十三 根本不覺と枝末不覺

阿黎耶識には覺と不覺との二つの義があるといふことを申しまして、其中覺の方は已に辯じましたで、これから不覺のことに移るのであります、不覺の義は本論中尤もむづかしいところで、且つ本論中の要所となつてをります、不覺と申すのは前にも申しました通り、不は無、覺は明、無明のこと、これは眞理を見るの明のないのをいふので、迷とも妄とも申すのであります、さて先づ第一に此不覺の義を釋して、

不覺の義

所言不覺義者、謂不如實知眞如法一故、不覺心起、而有其念、念無自相、不離本覺、猶如迷人、依方故迷、若離於方、則無有迷、衆生亦爾、依覺故迷、若離覺性、則無不覺。

言ふ所不覺の義とは、謂く實の如く眞如の法、一なりと知らざるが故に。不覺の心起りて、而して其の念有り、念に自相無し、本覺を離れず、猶ほ迷人の方に依るが故に迷ふ、若し方を離るれば則



ち迷ふこと有ること無きが如し、衆生亦た爾り、覺に依るが故に迷ふ、若し覺性を離るれば則ち不覺無し。

そこで不覺といふのは實の如く眞如の法一なりと知らざるが故にとありまする通り、元來宇宙萬有の眞理といふものは平等一如で、彼れの此れの我れの他のといふ區別のあるべきものではござりませぬ、それを彼れの此れの我れの他のと區別をするものであるから、彼れが善い、此れが悪い、我は可愛い、他は憎いなどといふ煩惱が起るので、もと／＼平等一如のものと知れば此心は起りませぬ、それであるから、實の如く眞如の法一なりと知らざるが故に起るのが不覺で、ツマリ眞理を見るの明がないから起る無明を申すのです、この無明が根本となつて、いろ／＼の煩惱妄想が出来るのであるから、不覺の心起つて而して其念ありというたのである、其念といふのは次に説く所の枝末不覺をいふのです、本論に於きましては、不覺を根本不覺と枝末不覺とに別つてをります、根本不覺といふのは讀んで字の如く、無明の根本となるもので、それからいろ／＼出たのが枝末不覺であります、今は根本不覺を説いてをるのであります、で不覺の心起つて其念ありといふ

## 根本不覺

である、併し不覺無明の妄念というたからとて、覺を離れて別に自躰があるのではありませぬ、茶碗だの土瓶だの水瓶だのというてをるが、本體たる土を離れてあるべきものでないが如く、不覺無明の妄念とて本覺を離れて自相のあるのではない、丁度譬へて見れば、方角を間違へた者が東を東とせぬやうなもので、これは根本不覺ぢや、東を東とせぬものであるから東を西とするやうになり、こゝで迷ひはますます深くなるので、其本は東を東とせぬといふ根本不覺から出たのであるから、これを枝末不覺といひ、又根本不覺のことを迷眞の無明といひ、枝末不覺のことを執妄の無明といふ、迷眞の無明とは眞如を眞如と知らざる故に、本覺の自在を見るの明のないので、今もいふ通り東を東とせぬ根本不覺、さて東を東とせぬから西だの北だの南だのと間違つた方角を執してゆく、枝末不覺は妄を執して眞理を見るの明のないのである、さうではあるが、西だの南だの北だのと間違ふのも、正しい方角たる東を離れて別にあるのでない、即ち東を正とせなければ西は間違ぢやといはれぬ、正東を離れては邪西もない、そこを「方を離れば則ち迷ふことあることなし」というたのである、今不覺も其通り、本覺を實の如くに知らざるが故に迷ふので、若し此

## 迷眞の無明と執妄の無明



覺性を離れたならば、別に不覺はない、正あるが故に邪あり、眞あるが故に妄があるので、眞を離れて妄なく、正を離れて邪はない、そこで、

以有不覺妄想心故能知名義爲說眞覺若離不覺之心則無眞覺自相可說。

不覺の妄想心有るを以ての故に、能く名義を知つて、爲に眞覺と説く、若し不覺の心を離るれば則ち眞覺の自相の説く可き無し。

というである、これは讀んで字の如くで、不覺の妄想心があるからこれに對して、名を立て、眞覺といふので、不覺の分別を離れては眞覺の自相の説くべきもない、眞は妄を待つて顯れるのであるから、われ／＼は修して以て眞覺の德を顯はすことが出来るのである、こゝで一つの問題が起る、それは眞妄關係論である、即ち眞如と無明とは同一のものか、同一のものでないかとの疑ひである、本論の中には或は同一と説き或は不同一といふてをるやうであるから、此の疑ひが起るのであるが、其實これやそれはそれ／＼説明の場合によるので、本躰の上から見れば一切萬法悉く平等の眞如で、眞如を離れて一法もあるべき

眞妄關係論

はない、さればこそ本論の初めにも、心眞如は一法界大總相法門の躰というてあるから、無明も亦た眞如海中のものに相違ない、此の見地から眞妄同一であるといふことが出来るが、さて現相の上から云へば、眞といひ妄といひ、眞如といひ無明といひ、明かに區別してをるのであるから此點では同一とはいへぬ、通じて見たときには波は水である、水は波であるから此二つ一であるといへるが、別して見るときには波はこれ水の上に起つたもので、水と波とは同じといふことの出来ないやうなものである、本論に於て眞如、生滅と對したときの眞如なれば同一であるといへるが、生滅門中に説く眞如と無明とは同じものであるとはいへぬ、同じものであるとはいへぬが其本躰は別なものではない、さて然らば、此本躰平等の眞如の水の上に何が故に無明の波が起つたかといふに、本文にもある通り、此眞如を正當に知ることの出来ぬから無明といふものが起るので、眞如の水は常住不動起もなければ滅もないが、此の眞如によつて起つたのが無明である、これを根本不覺といふ、さて無明は眞如を正當に知ることが出来ぬのみならず、却て不正當なることを正當であると執するのを枝末不覺といふのである、尙このことは後の枝末不覺を論ずる所を御



参照なさるがよい、

### 十四 三細六塵の辨

已に不覺に根本と枝末との二つあることを辨じて、根本不覺のことをお話いたしました、此根本不覺より出るのが枝末不覺であります、本論に於ては此枝末不覺のことを細塵の二つに分ちて尤もくわしく説いてあります、これを三細六塵というて起信論中の一名所である、即ち、

復次依不覺故、生三種相、與彼不覺相應、不相離、云何爲三。  
一者無明業相、以依不覺故、心動、説名爲業、覺則不動、動則有苦、果不離因故、二者能見相、以依動故、能見不動、則無見、三者境界相、以依能見故、境界妄現、離見則無境界。

復た次に不覺に依りての故に三種の相を生じ、彼の不覺と相應して相離れず、云何か、三と爲す、

一には無明業相、不覺に依るを以ての故に、心動ずるを説て名けて業と爲す、覺すれば則ち動ぜず、動ずれば則ち苦有り、果、因を離れざるが故に、二には能見の相、動に依るを以ての故に能見あり、動ぜざれば則ち見無し、三には境界の相、能見に依るを以ての故に境界妄に現ず、見を離るれば則ち境界なし。

これは枝末不覺のだん／＼に動いてゆくさまを現はしたので、この枝末不覺といふのは根本不覺を離れて別にあるのではない、彼の不覺と相應して相離れずで、もと／＼眞如を實の如く知る能はざる根本不覺が本となり、其の知らざる所を知れりと執してこゝに妄心を起し、妄心によりて無明一層深くなつてゆく順序を三細六塵といふので、こゝには其三細を明したので、細といふのは其働きの微細にして辨別することが出来ぬ位であるからいふので、明に辨明することの出来るやうになつたのを塵といふのである。サテ第一の無明業相といふのは、眞如が無明の方に動いた一番初めで、不覺無明の爲めに眞の心が起動した状態である、業は動作の義なりで動き出したかたちだ、此動作がやめば風止んで波平かに水静かなるが如く、本覺の徳あらはれる、そこで覺すれば動ぜずといふが、今は不覺



轉相

の方に向ふのであるから動き出した、動き出したから此に生あり滅ある波となつた、されば動すれば即ち苦ありで、眞の心の動き出したのが原因となつて生死の苦があるので、凡そ原因あれば必ず結果のあるのは宇宙の大法であるから、眞心起動の原因によつて生死の苦あるにいたるのぢや、それはまあ別のこととして、今は眞如の心が無明の方に動き出した第一を無明業相というたので、其次ぎは能見の相ぢや、これは已に心が動き出したものであるから、こゝに主觀的作用が起つて物を見照するやうになる、見照するやうになると、今度は外界のいろ／＼の境界を心の中に現して來るやうになる、丁度鏡といふものが出來れば、それと同時に物を照す力がある、これは能見の相ぢや、物を照す力があると同時にいろ／＼な外界のものを映す、これが境界の相で、この二つは蝸牛の同時に兩つの角を出すが如く、心動けばこゝに能見の相あり、能見の相あればいろ／＼な境界を現すやうになるので、人が睡り出す、睡り出したから夢を見る、夢を見ていろ／＼の境界がありと思ふやうなもので、眞如が無明の方に動き出すと共に、能見の相となり境界の相となるので、其働作は頗る微細であるからこれを三細と申します、此三細によつて六塵は生ずる

現相

のであります、尙ほ後の文を御玩味下さい、

以有境界緣故復生六種相云何爲六一者智相依於境界、心起分別愛與不愛故二者相續相依於智故生其苦樂覺、心起念相應不斷故三者執取相依於相續緣念境界住持苦樂、心起著故四者計名字相依於妄執分別假名言相故、五者起業相依於名字尋名取着造種種業故、六者業繫苦相、以依業受報不自在故、當知無明能生一切染法、以一切染法皆是、不覺相故。

境界の緣有るを以ての故に、復た六種の相を生ず、云何か、六と爲す、一には智相、境界に依りて心起りて愛と不愛とを分別するが故に、二には相續相、智に依るが故に、其の苦樂の覺を生ず、心、念を起し、相應して斷ぜざるが故に、三には執取相、相續に依りて境界を緣念し、苦樂を住持して心、著を起すが故に、四には計名字相、妄執に依りて假名言の相を分別するが故に、五には起業



相、名字に依りて名を尋ね、取著して種々の業を造るが故に、六には業繋苦相、業に依りて報を受け自在ならざるを以ての故に、當に知るべし、無明能く一切の染法を生ず、一切の染法皆な是れ不覺の相なるを以ての故に。

智相  
相續相

この三細が本となつて起動する相を示したので、これを六塵と申します、細とは前にいふ如く其起動する相が微細で、なか／＼凡夫の力では見ることの出来ぬものであるが、塵といふ方は凡夫の力でも知ることの出来るのであります、さて前の三細は業相を鏡の體に喩へますれば、能見の相（これを轉相とします）は鏡の面の能く照すが如く、境界の相（これを現相と申します）は森羅萬象の映るやうなもので、さて境界の縁あるを以ての故に復た六種の相を生ずで、森羅萬象が映るはこれもと鏡面に映つたる虚影であるのに、それを眞にあるものゝ如く思うて、善い悪いの可愛いの憎いといふ分別を起します、これを智相といふので、其の次ぎの相續相といふのは、善い悪いの可愛いの憎いといふ心は更に深くなつて、自分の可愛いと思ふ境界には樂と思ひ、憎惡する境には苦と感じて、前きの妄分別を相續してゆくやうになる、これを「心、念を起して相應して斷ぜざるが故に」

執取相

というである、さて此妄分別が相續するに従ひ、だんだん其妄想分別が固くなつて苦樂の境界を固執するやうになる、「境界を緣念し苦樂を住持して心、著を起すが故に」とある如く、だん／＼執着が深くなる、これを執取相といふ、さてかく深くなるに従ひ、此妄想分別の上にいろ／＼な名を付けて毀れば怒り、譽むれば喜び、其實なきに名を立て、其虚妄の言説によつて、更に諸種の煩惱を起すにいたるので、これを計名字相といふ、計名字相とは名字を計度して虚妄の言説に迷ふのをいふのであります、さて其の次ぎは起業相で、元來虚妄の名字を實在のものゝの如くに思うて、これに執著していろいろ煩惱を起し、其煩惱の力によつていろ／＼な動作を身や口で行うて、さまざまな業を造るすがたをいうたのであります、さて此業因によりまして終に結果を免るゝことが出来なく、永く煩惱の繫縛を

業起相

業繋苦相

受けて自由自在になることが出来なくなるを、業繋苦相といふのであると示してあります、六塵の中、智相、相續、執取、計名字は惑の起る有様で、此の惑によりて業を起すのが起業相、其の報を受けるのが業繋苦相で、惑業苦と轉輾して居るのであります、これで根本不覺と枝末不覺との關係が明になりましたでせうが、例によつて表に示せば







同相

へば同一、現相差別の上からいへば不同一で、同相といふのは覺といひ、不覺といふ、其本體は何者ぞといふに、同一眞如であるから、譬へばこゝに土瓶あり茶碗あり水瓶ありさま／＼であるが、皆同じく土の相に過ぎぬ、即ち土の性よりいへば悉く同相であるといはねばならぬやうなものである、瓦器といふのは陶器と見て差支はない、いろ／＼な陶器も皆これ同く微塵（即ち土）の相なるやうに、覺といひ不覺といふが、共に眞如の大海を動かして起る所の業幻で、其實眞如に過ぎないのであるといふことを、「是の如き無漏と無明と種々の業幻、皆同く眞如の性相なり」とある、無漏といふのは本覺始覺の二つで、無明に反對するもの、無明といふのは根本と枝末との不覺で、無漏の反對である、かやうに覺、不覺によりて起るさま／＼の差別の相は、眞如の躰の上に現れてをるのであるといひ、更らに經文を引いて、

本來常相

是故修多羅中、依於此義、說一切衆生、本來常住、入於涅槃、  
菩提之法、非可修相、非可作相、畢竟無得

是の故に修多羅の中に、此の義に依りて一切衆生本來常住、涅槃に入ると説く、菩提の法、修す可

き相に非ず、作すべき相に非ず、畢竟無得なり。

というて、迷ひに迷へる不覺の一切衆生、そのまゝに涅槃に入ると説いてある、修多羅は前にいふた如く經文のことで、此の文は覺と不覺との同一であることを示したのである、覺と不覺といふも、本より同一眞如の上のものであるから差別のあるべきではない、土瓶は土瓶のまゝに土である、一切衆生はそのまゝに眞如の理たる涅槃に入ることが出来るのである、かやうに、覺と不覺とを同一として見るは、別段諸佛菩提に入るの法、即ちさとり、の道として智力により修し得るものでもなく、萬行を造作すべき相でもないといふて、本躰の上から見ればすべてこれ同一、畢竟無得なりで、衆生本來涅槃に入るべきである、何にもさま／＼の區別を立つべきではないので、土瓶は土瓶ながらに土、茶碗も水瓶もさうであるのに、茶碗だの土瓶だの水瓶だのといふべきものはないといふのぢや、然らばこゝに一寸疑ひが起る、衆生本來涅槃に入るものであるならば、已に佛と同じではないか、佛と同じであるならば、何故佛の身を現じ佛のやうな光明を放たぬかといふ疑ひであります、そこで本論は



亦無色相可見、而有見色相者、唯是隨染業幻所作、非是智色不空之性以智相無可見故。

亦色相の見る可き無し、而して色相を見ること有るは、唯是れ隨染業幻の所作なり、是れ智色不空の性に非らず、智相の見る可き無きを以ての故に。

とあつて、今は法性眞如の自躰の上の話であるから、一味平等の眞如の自躰の上には長短もなければ方圓もない、黑白もなければ青黄もない、長短だの方圓だの黑白だの青黄だのといふのは、皆これ現相差別の上の話ぢや、さればこゝに色相の見る可き無しというて、さて然らば諸佛が種々なる色相を現するのは如何なるわけかといふに、これは衆生の迷ひに隨うてさまざまの相をあらはされるので、これは隨染業幻の所作なりで、染と迷の業に隨うて現はさるゝので本體ではない、本體法性の智の中には色不空なりで、われゝの看得べきものではないといふのであります、以上は覺と不覺とが、其本體の上には同一であるといふことを説かれたのであります、若し夫れ本體の上から云へば、宇宙萬象悉くこれ同一平等異相のあるべきではありませぬ、これを哲學者は同一の原理と申します、さて然

隨染業幻

らば宇宙萬象悉く同一かといふに、さらに差別をして見ますれば、此宇宙間一つも同じものはござりませぬ、いづれ菖蒲か引きぞわづらふといふやうに、似たものはありますが、同じものはない、犬や猫の顔でも皆それゝ異つてをる、同じものは一つもない、そこで覺と不覺との關係も本體の上から見れば平等一如ぢやが、更らに現相の上から見れば悉くこれ異つてをります、故に本文に

言異相者、如種種瓦器各各不同、如是無漏無明隨染幻差別、性染幻差別故。

異相

異相と言ふは種々の瓦器、各々不同なるが如し、是の如く無漏と無明と隨染幻の差別、性染幻の差別なるが故に。

とありまして、異相といふのは形相の上からいふたので、本體の土といふ點では種々の瓦器（陶器）悉く同一ぢやが、現れて茶碗となり土瓶となり水入となれば、各同じものではない、哲學者の語を假りて云へば異別の原理又は獨立の原理と申して、宇宙萬象悉く別々ぢやといふ、今は覺と不覺との關係の話ですが、無漏といふ覺の方も無明といふ不覺の方



も、土瓶は土瓶、茶碗は茶碗と別々の相をあらはして、又別々の作用をしてをる如く、覺の方にも不覺の方にもそれ／＼別々の作用がある、今も申す通り眞如の理は平等一如ぢやが、これに迷ふのが無明でありますから、無明は性染幻といふて、本性の上に差別を立て、迷うてをるが、無明に反對してをる無漏の方は、此眞理に迷うたる差別の相に隨うて差別を現すので、天に輝く一輪の月が萬機の器水に影を寫すやうに、月の體には差別はないが、其差別の器に隨ふてさまざまの相を現するやうなものであるからこれを隨染幻といふので、兎に角覺と不覺とは其本體を論ずれば同一、其現相を論ずれば不同一で、同じして異、異にして同なるところがあります、この同じして異、異にして同である所を今日の學問で調和の原理というてをります、かく調和してをるが、眞如門の上では同を主とし、生滅門の上では異を主として見るのが、本論の説明方法であります、これでザット覺と不覺との關係を説きました。

## 十六 生滅の因縁

以上は、立義分の中に心生滅因縁故にとある中の生滅心のことを説いたので、これから生滅の因縁といふことを説かねばなりません、先づ本文は、

### 復次生滅因縁者、所謂衆生依心意識轉故

復た次に生滅因縁とは所謂、衆生、心に依りて意と意識と轉ずるが故に。

さて上來は不生滅の眞心より生滅の心を起す、其生滅の心そのものを説明したのであるが、これからは如何なる因縁によつて、不生滅の眞心より生滅の心が起つたかといふ事を説くので、即ち覺と不覺との二義ありと説いて來た、此阿黎耶識は如何にして出來たか、此阿黎耶識より如何にして萬法を發現するかといふ因縁を説くのであります、凡そ物の出來るには必ず因と縁との二つがあるといふのが佛教の通則で、因縁なくして果のあるべきはづはない、米を作るには其因たる種子がある、併し因たる種子だけで、これを助くる水土の縁がなければ米は出來るものでない、そこで萬物は悉く因と縁との二つによりて出來る、されば今此の不生滅の眞如が動いて、生滅となるには如何なる因縁によるかと申しまするに、これはそも／＼眞如そのものに具はつてをるので、水には即ち波あるが如く、不生滅



眞如と無明と阿黎耶

の眞如には縁に隨て動くの性がある、これを隨縁眞如といひます、この隨縁眞如を動かすものは何かといふに根本無明である、そこで眞如は因となり根本無明が縁となつて、こゝに不生滅の眞如、動いて阿黎耶識となる、さて又此根本無明が因となり迷ひに迷うて起す妄境界が縁となつて、阿黎耶より萬法を發現するやうになるといふのであります、こゝに少しく眞如と無明と阿黎耶との關係を御話し申さねばならぬ、眞如と無明とのことは前に御話し申しましたが、さて此阿黎耶といふのは如何なるものかといふに、これも前に御話し申した通り眞如と無明との混淆したもので、眞（眞如）だけでもなければ妄（無明）だけでもない、無明を因として眞如を縁として起つたので、これを起信論義記では依迷起似というてをります、迷といふのは無明、似といふのは阿黎耶です、さて又此阿黎耶を因とし眞如を縁として無明を起すことゝもなる、これを依似起迷ともいふてあります、似といふのは黎耶であります、迷といふのは無明であります、かういふやうに此三ツは相互の關係を持つてをるので、水によつて波あり、眞如によつて無明あり、こゝに黎耶生ず、已に黎耶生ずれば黎耶を因として無明を起すのでありますから、



といふやうな關係を持つやうになつてをるのであります、尙ほこの事は後に御話しすることゝいたします、所謂衆生とあるのは、注には衆生心なりとあつて、衆多の妄想心集り生ずるの義であります、此衆生とて別なものではなく、皆心鉢たる眞如によるもので、この眞如によつて意と意識とが轉するので、其轉するさまをこれから説くのであります。

此義云何、以依阿黎耶識故、説有無明、不覺而起、能見、能現、能取境界、起念相續故、説爲意。

此の義云何ん、阿黎耶識に依るを以ての故に無明有りと説く、不覺にして起り、能く見、能く現じ、能く境界を取り、念を起して相續す、故に説いて意と爲す。

これは先きに意と意識と轉すというたが、如何にして眞如が動いて意と意識となるか、此義如何と問うたのである、これに答へて阿黎耶識に依るを以ての故に無明ありと説くとい



依迷起似  
依似起迷

うた、即ち阿黎耶識に依て無明が起つたので、前にいふ如く真如と無明と黎耶には相互の關係があつて、無明が真如に迷うて眞妄混淆の黎耶となり、此黎耶によつて更らに無明が出来るので、さきの黎耶の出来るのは依迷起似であるが、此度は此無明所生の黎耶（似）を實と執して、だん／＼迷ひが深くなるのであるから依似起迷である、今は此依似起迷の所を指して、黎耶に依て無明ありというたのだ、不覺にして起るといふのは真如が無明の力によつて、其全體が動き出して阿黎耶識となることを云うたので、これは依迷起似である、真如の全體が無明の力によつて動き出したのは業識である、業は動作の義で動き出したからだ、さてかく起動して來ると、こゝに見照するといふ主觀的作用が起る、これが能見、鏡體已にありよく照すで、よく照らせばさまざまの境界を現はす、これが能現、さて此鏡面の影の如き境界を認めて實に有りと思ふ、これが能取境界、さて其境界に執着して分別妄念を起す、これが起念相續だ、更らに次の文句を見るがよい。

此意復有五種名云何爲五、一者名爲業識、謂無明力、不覺

心動故、二者名爲轉識、依於動心、能見相故、三者名爲現識、所謂能現一切境界、猶如明鏡、現於色像、現識亦爾、隨其五塵對至則現、無有前後、以一切時、任運而起、常在目前、故四者名爲智識、謂分別染淨法故、五者名爲相續識、以念相續不斷故、住持過去無量世等善惡業、令不失故、復能成熟現在未來苦樂等報、無差違故、能令現在已經之事、忽然而念、未來之事、不覺妄慮。

此の意、復た五種の名有り、云何か五と爲す、一には名けて業識と爲す、謂く無明の力、不覺にして心動するが故に、二には名けて轉識と爲す、動心に依りて、能見の相なるが故に、三には名けて現識と爲す、所謂、能く一切の境界を現す、猶ほ明鏡の色像を現するが如し、現識亦爾り、其の五塵に隨つて對至すれば即ち現じて前後有ること無し、一切の時、任運にして起りて常に前に在るを以ての故に、四には名けて智識と爲す、謂く染淨の法を分別するが故に、五には名けて相續識と爲す、念相續して斷ぜざるを以ての故に、過去無量等の善惡の業を住持して失はざらしむるが故に、



復た能く現在未來の苦樂等の報を成熟して差違すること無きが故に、能く現在已經の事をして忽然として念じ、未來の事をして不覺に妄慮せしむ、

意

これは前のを詳しく説いたので、三細六塵九相の中の三細と二塵とを意というたので、後の四塵を意識に充てたのであります、第一の業識といふのは九相の中の業相で、根本無明の力によつて不覺の心が動き出したのです、二は轉識で九相の中の見相、心動いてこゝに發見の相あるので、三は現識即ち九相の中の境界相、能く一切の境界を現す、猶ほ明鏡のいろ／＼の像を現はすやうなもので、色、聲、香、味、觸の五塵にさまざまのことが現はれて斷滅するやうなことがない、これを一切の時、任運に起て常に前に在るを以ての故にといふのである、さていろ／＼なものが映るとすれば、さまざまの分別を起す、これを第四の智識といふ、即ち九相の中の智相だ、第五は相續識というて、九相の中の相續相で其分別の念が相續して斷ゆることなく、過去の業因を持ち續けて失はず、又これによつて現在未來の苦樂の報を熟させて、差ふことはなく相續してをるので、そのみならず、現在に已に過ぎたことを忽然として想ひ出し、未來のことをも徒らに慮るのは皆この識である、こ

唯心の所作

れは前の九相の説明と對照してもらへば直に明かであります、

是故三界虚偽唯心所作、離心則無六塵境界、

是の故に三界は虚偽、唯心の作る所、心を離るれば則ち六塵の境界無し。

この故にといふのは、前の眞如が無明に隨て動き阿黎耶となり、こゝにこの五種の識をこしらへてゆくのであるから、三界の中、阿黎耶の外、何もあべきではない、それと執してをるのが間違だ、そこで三界は虚偽というて、義記に「此心、熏に隨つて似を現するを虚といひ、其虚影を隠して詐つて實狀を現するを偽といふ」とあつて、あるべきでないものがあると思ひ（虚）、實でないものを實と思ふ（偽）所謂たゞこれ心の作る所で、心を離れて見れば六塵の境界といふものはあべきではない、たゞこれ主觀の作用によつて出來た客觀境界に外ならぬといふのです、更らに問を起して此義を示して、

此義云何、以一切法、皆從心起、妄念而生、故一切分別即分別自心、心不見心、無相可得、當知世間一切境界、皆依衆生、



### 無明妄心而得住持

此の義云何ん一切の法皆心より起り、妄念より生ずるを以ての故に、一切の分別、即ち自心を分別す、心、心を見ざれば相の得可き無し、當に知るべし、世間一切の境界皆衆生の無明妄心に依りて而して住持を得たり。

今一切諸法は真心の起動によつて出来たといふが、此心が如何にして物を出したであらうかといふの疑ひで、これは唯心論の當然受くべき疑ひであります、三界は虚偽唯心の所作といひ、心を離るれば六塵の境界なしといふならば、今日われは實にさまざまの物を見てをるではないか、これ抑も如何にして出来たかといふのです、これに答へて一切の法皆心より起り、忘念の分別によつて生ずるもので、心以外の物と見てをるのは意の上に現はれたる影に過ぎない、この影を實と思ひて執著するが、其實は體のないもので、一切の分別といふものは自心が自心を分別するので、物と見たのも、心に映る影に外ならぬのである、併し刀自ら刀を斬ることが出来ぬが如く、心は自ら心を見ることが出来ぬのであるから、映したる影も映す心もたゞこれ平等一如で相の得べきはないのである、されば當に知

心生ずれば  
種種法生ず

るべし世間一切の境界皆衆生の無明妄心によりて住持を得たり、世間一切のさまざまの物は皆なこれ衆生心中の根本無明と、之れによつて起りたる業識等の妄心によつて、假りにあると認めたとであるといふことを知らねばならぬ、譬喩を擧ぐれば、

是故一切法、如鏡中像、無體可得、唯心虚妄、以心生則種種法生、心滅則種種法滅故

是の故に一切の法は鏡中の像の體の得可き無きが如し、唯心の虚妄なり、心生ずれば則ち種々の法生じ、心滅すれば則ち種々の法滅するを以ての故に。

そこで一切の法は鏡の中に映つてをる影のやうなもので、鏡を離れて外に實體を求むることの出来ぬやうに、一切の法は眞如の體性の上に現はるゝ虚妄の影で、もとゝこの心が無明に動かされて、こゝにいろゝの法が生ずるので、彼れの我れの可愛の憎いのとの差別を起すが、これは心の波が立つて居るからで、此心の動くことが止まり、無明の妄心滅すれば風死して波なきが如く、心滅すれば種々の法滅するのである、法といふのは現相をさしたので、こゝに心滅すとあるのは、心の本體（眞如）ではないことはいふまでもなく、



生滅の心の止むだことだ、此心生すれば種々の法生じ、心滅すれば種々の法滅すといふ句は、起信論中の名句で、われ／＼お互の可愛いの憎いのと騒ぎ廻るのは、皆この心が生じてそれ／＼境界（客観）の相に執着をするからである、今一切萬法悉くこれ唯識の所現ぞとさとり、この心生すれば種々の法も生ずといふ、これぞ唯心論の根本思想である、

よしあしのうつる心の水鏡、

よく／＼見ればわが姿なり

一切萬法皆これ心の現れちや、されば古人も心生すれば種々の法生じ、心、滅すれば獨體不二なりというて居る、さて以上は、意と意識との中の意のことを五つにわけて説いたので、九相の中の三細と二塵だ、此次ぎに意識、

復次、言意識者、即此相續識、依諸凡夫取著轉深、計我我所、種種妄執、隨事攀緣、分別六塵、名爲意識、亦名分別識、又復説名分別事識、此識依見愛煩惱增長義故

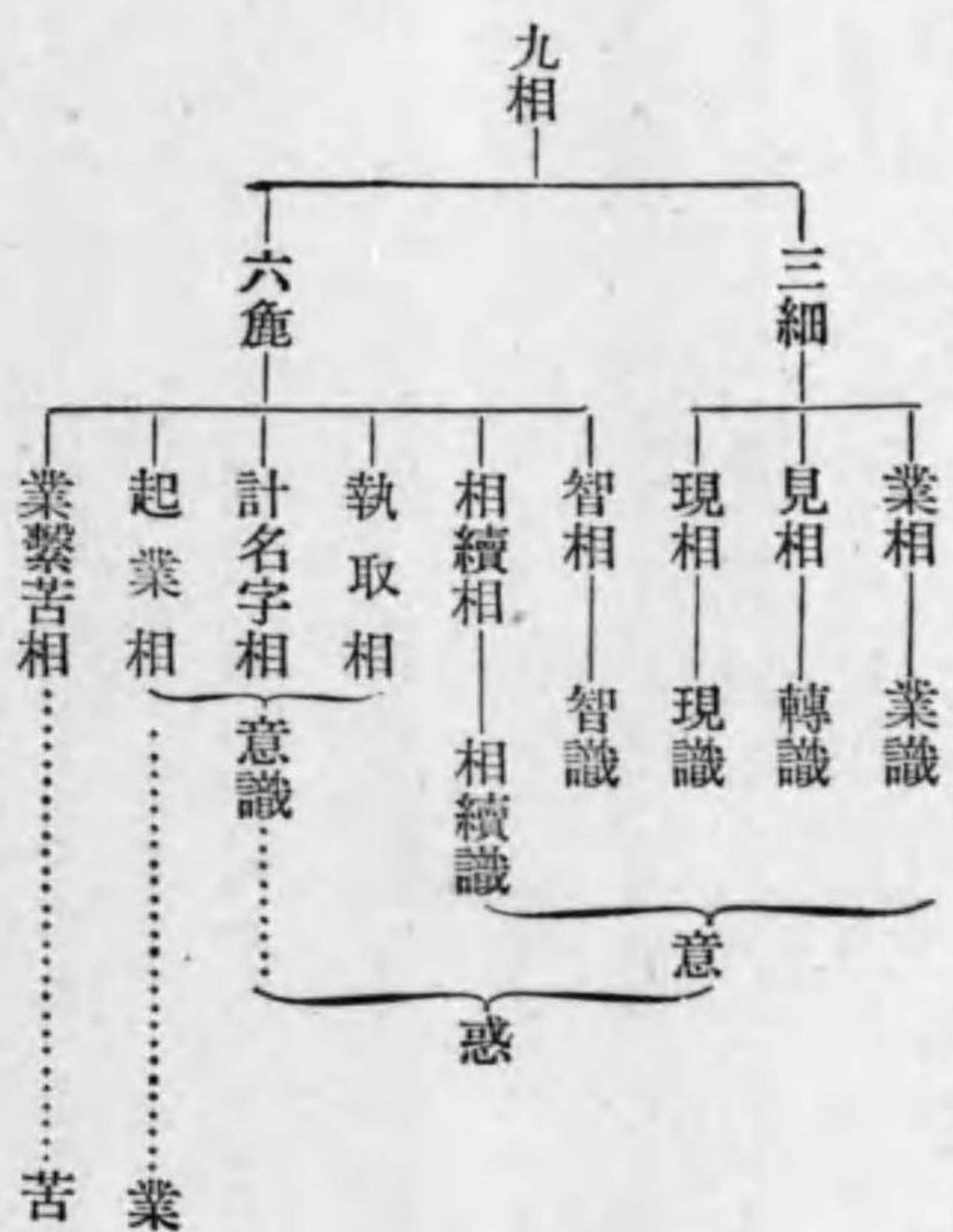
復た次に意識と言ふは即ち此の相續の識なり、諸の凡夫、取著轉た深きに依つて我、我所を計して種々に妄執し、事に隨つて攀緣し、六塵を分別す、名けて意識と爲す、亦た分離識と名く、又た復た説いて分別事識と名く、此の識は、見愛、煩惱に依りて增長するの義の故に。

意識

これは意識を解したので、前の相續識即ち愛憎の念を住めてゆく心が本となつて、更に其の上に深く執着をして來るやうになる（これが第六の執取相）、さて執著の深くなるに従ひ我ありと思ひ、我が所有ありと思ひ、種々に妄執を起して事に隨つて攀緣してとあるのは、事といふのは眼、耳、鼻、舌、身、意、の六根の對手となる、色、聲、香、味、觸、法の六塵を指したので、この六塵に隨つて愛憎の念を起して六塵を分別し、終に其の分別に依つていろ／＼な動作をするやうになるのであります、（これが第七の計名字相、第八の起業相）、これを意識といふので、又分離識ともいひます、それは五意の相續識によつて起る意識は、六根によつて種々の六塵をとつてゆくから、かく名けたので、此識、見愛、煩惱、に依つて增長するの義の故に又分別事識ともいひます、見愛煩惱といふたのは詳しくは見煩惱と愛煩惱で、見煩惱といふのは智識的の迷ひで、道理に迷ふのをいうたので、愛煩惱とい



ふのは感情の上の迷ひとでも申すべきで、事物に對して起る迷ひであります、この二つの煩惱によつて妄分別を増長してゆくから、分別（見）事（愛）識といふのである、以上は意と意識との轉ずることによつて起る阿黎耶、生滅の因縁であります、即ち惑によつて業を起し、業によつて苦樂を受くるので、これを惑、業、苦、と申します、今ま九相並に意と意識とを對比して見ますと、在の如くになります、



### 十七 無明の起原及び染心

これまでは生滅の因縁のことを明しましたが、これから生滅の因縁の體となるべきものを説くので、其の理が精細でなく、解し難いのであります、されば先づ其の解し難きことを説いて、

由難解の理  
 依無明熏習所起識者非凡夫能知亦非二乘智慧所覺謂  
 依菩薩從初正信發心觀察若證法身得少分知乃至菩薩  
 究竟地不能盡知唯佛窮了

無明熏習に依りて起す所の識とは、凡夫能く知るに非ず、亦た二乗の智慧の覺する所に非ず、能く菩薩に依るに初めの正信より發心觀察し、若し法身を證すれば少分知ることを得、乃至菩薩の究竟地に盡く知ること能はず、唯だ佛のみ窮了す。

此無明熏習によつて起すところの識といふのは、抑も眞如は前にいふ通り、無明の熏習によつて働き出して意と意識と轉ずるのであるが、此無明が意と意識と轉ずるの理は、到底



われ凡夫の知ることの出来る所でない、聲聞しやうもん乗じやうや緣覺えんかく乘じやう（二乗）のやうな、小乗の人々の智慧でわかるものでもない、大乘の菩薩ぼさつとても十信の初め、即ち初信より眞如の妙相はこのやうなものであるかと、發心くわんしんし觀察くわんさつし、ゆいて隨分覺の位に入つて法身を證することを得たならば、少しく知ることには出来るが、よし十地の滿位に至りて此の上もない菩薩の究竟地くわんぎやうに至つても、未だ盡ことごとくくは知ることには出来ぬ、たゞ佛のみこれを窮めてござるのであるといふので、一々この文句しやうじやくに執著しやくじやくをして考へるには及ばぬ、たゞ此理の高尙にして知り難いといふことを説かれたのであると解せばよいのである、然らばどういふわけですらうむづかしいのか、

何以故、是心從本已來、自性清淨而有無明、爲無明所染有、其染心、雖有染心、而常恒不變、是故此義唯佛能知。

何を以ての故に、是の心、本より已來こゝかた自性清淨にして而して無明有り、無明の爲に染せられて其の染心有り、染心有りと雖も而も常恒不變なり、是の故に此義は唯だ佛のみ能く知る。それは別の道理だうりではない、さまざまの煩惱妄想ぼんごうまうさうを起すところの此心は、本來ほんらい自性清淨

とて、清らかなもので一點の塵もない、此塵もない自性清淨なものが、無明煩惱の爲めに汚されて此染心と汚れたる心がある、汚れたる心があるが、其本躰ほんたいなる自性清淨じしやうしやうじやうなるものは少しも變りはせぬ、少しも變りはせぬがわれは煩惱の曇深くもりくして、此自性清淨の本心を見ることが出来ぬ、勝鬘經せうまんけいにはこのことを示して「自性清淨心了知すべきこと難し、彼の心煩惱の爲めに染せられ亦了知し難し」といひ、「唯だ佛能く知る」というのである、ツマリわれは已に煩惱の爲めに本心が曇つてをるのであるから此曇を少し位除いたとてなか／＼わからぬ、全くこれを除いて一點の曇りのない佛でなければわからぬといふので、是の故に此義は唯佛のみ能く知るといはれてるのである、

所謂心性常無念、故名爲不變、以不達一法界故、心不相應、忽然念起、名爲無明。

所謂、心性は常に念無し故に名つけて不變と爲す、一法界に達せざるを以ての故に、心、相應せず、忽然として念起るを名けて無明と爲す。

これは起信論中の難所なんじよで、古來多くの疑ひのあるところである、さて、この心の本性と



## 忽然念起

いふものは常に念なしで、もろくの妄想が起るが、波が如何に動くも其本體たる水は動かぬやうに、いろ／＼な妄念が起つても心の本性は少しも動くものでもなく、變じるものでもない、即ち常に有念と相應じて、しかも無念である、然るに、眞如平等の理を知らず、眞如一法界の道理に通達せぬものであるから、こゝに無明が起るので、根本無明の起るのは外のことでない、此眞如一法界に通達せぬから心が相應せずして、こゝに忽然として無明が起るので、心が眞如の法界に應じてゆけば差別の妄念もなく、煩惱妄想の起るべきではない、此相應せずといふことを起信論義記には「根本無明微細にして能所王數の差別あらず、心に即するの惑なるが故に不相應といふ」とあつて、尤も眞如に近い極く細い惑があるので、門前一步の過、終に千里の差を生ずるやうなもので、此微細なる惑が終に大なる惑を起すの根本となるのである、忽然として念起るといふのは、これは決して此時にフト起つたといふ意味ではない、即ち此時が無明煩惱の初りだといふのではない、義記には「忽然といふは時節に約せず、以て忽然と説く、起るに初めなきを以てなり」とある通り、起るに初めなきので忽然と形容したので、此時が初めといふのでない、凡そ佛教の根本義か

らいへば迷悟不二で、迷だの悟だのと差別すべきものがあるべきでもなく、明だの無明だの覺だの不覺だのといふべきでもなく、悉く平等一如であるから、煩惱を断ぜなければ涅槃を得られぬといふわけもない、そこで不斷煩惱得涅槃ともあつて、萬物には常に一體兩義があるのであるから、此眞如一法界を離れて無明もなく、此眞心を離れて煩惱もないのであるから、いつから無明が起つたなどといふべきでない、不増不減經に「一切衆生一時に成佛するも佛界増さず、衆生界減ぜず」とある通り、佛界とて衆生界とて別なものではない、そこで本悟本迷だの、性惡不斷だのといひ出すのであるが、これは實相論の上の話で、永嘉大師の證道歌にも「無明の實性即佛性、幻化の空身即法身、法身覺了すれば無一物、本來自性の天真佛」とある通り、無明の實性そのまゝに佛性であるのではあるが、一望した時は「高い山から谷底見れば瓜や茄子の花盛り」であるが、これを説明する時は右の方は瓜、左の方は茄子と云はねばならぬ、實相の上からは迷悟不二だが今は緣起論の上のことであるから無明の起る相を説いて忽然として念起るといふのである。

染心者、有六種、云何爲六、一者執相應染、依二乘解脫、及信



相應地、遠離故二者不斷相應染、依信相應地修學方便、漸能捨得淨心地究竟離故、三者分別智相應染依具戒地、漸離、乃至無相方便地究竟離故、四者現色不相應染、依色自在地位能離故、五者能見心不相應染、依心自在地位能離故、六者根本業不相應染、依菩薩盡地得入如來地位能離故

染心とは六種有り、云何か六と爲す、一には執相應染、二乗の解脫と及び信相應地とに依りて遠離するが故に、二には不斷相應染、信相應地に修學する方便に依りて漸々に能く捨つ、淨心地を得て究竟して離するが故に、三には分別智相應染、具戒地に依りて漸離し、乃至無相方便地に究竟して離するが故に、四には現色不相應染、色自在地に依りて能く離するが故に、五には能見心不相應染、心自在地に依りて能く離するが故に、六には根本業不相應染、菩薩盡る地、如來地に入ることを得るに依りて能く離するが故に。

これは染心を解釋したので、これに六つある、これを六染といふので、六染は前の中の、初めの七相を取りて其名を改めたのに外ならぬのであります、即ち左の如くなります、



九相の中の起業相は煩惱ではない、煩惱によつて動作をするのであるからこゝにはいはず、業繋苦相は其業によつて苦果を受くるのであるからこゝにいふべきではない、これらは惑、業、苦、の中の業と苦とに屬するので、茲にいふのは惑の方だけでこれが六になる、此六染は意と識との轉ずるによつて起りたる煩惱を除く方法を説いたので、一體佛教の緣起論には流轉門と還滅門との二つがある、流轉門といふのは眞如より迷ひ出るさまを説くので、還滅門とは次第に煩惱を去つて行くのであります、先に述べた三細六塵の順序は迷ひ出る方でありましたから、細より麁に至る順序で説きましたが、今はそれを還滅して本の



眞如に還る方法を説くのでありますから、愈より細に入るの順序であります、されば六染各の句の下に離るゝが故にとあつて、離れてゆく順序を示したのであります、第一の執相しふさう應染おうちせんといふのは、心王心所相應して起るの染心で、染といふのは淨に對していうたので、煩惱ぼんのうの汚れけがであります、可愛かちいの憎にくいのとさまざまの境界けうがいに執著しやくちやくをして起るので、これは聲聞せもんや緣覺えんかくの解脫げだつや、十住、十行、十回向の位でも離るゝことが出来る、さて其次つぎの不ふ斷相應だんそうおう染は初地の菩薩となれば相續相さんじくさうが除ける、三の分別智相應ぶんべつちそうおう染は二地の位で漸く離れ無相方便むさうほうべんとして無相觀むさうくわんに於て尙ほ方便を要する、二地の位をいふので、こゝに至りて全く智相ちさうが、除ける、四に現色不相應げんしきふさうおう染といふのは、最早いちばんや煩惱ぼんのうが細かくて心王心所相應しんおうしんじゆせぬから不相應ふさうおうといふので、現相げんさうを離れるのだ、これは八地の菩薩でなければならぬ、五は能見心げんしん不相應ふさうおう染で、これ九は地の菩薩の離れる見相けんさう即ち轉識てんしきだ、六は根本業こんぽんごう不相應ふさうおう染で、業相ごうを離れたるのでこれは十地以上即ち如來の地に入ることによつて能く離れるといふので、ツマリ愈なる煩惱より細なる煩惱に入るに従ひ、これを除くことがむづかしいのであるから其順序そのじゆんじゆをかく煩瑣ぼんさに分けていうたので、これを一々むづかしく解するには及ばぬ、愈よ

不了一法界

り細に煩惱ぼんのうを除てゆく順序じゆんじゆであると思へばそれでよい、さて、

不ふ了一いち法界ぽうがい義者ぎしや從信相應地じゆんさうおうぢ觀察學斷くわんさつがくだん入淨心地じゆんしんぢ隨分得じゆんぶんとく離り乃至如來地乃至如來地能究竟離故能究竟離故

一法界を了せざる義とは信相應地より觀察し、學斷して淨心地に入り、分に隨つて離を得、乃至如來地に能く究竟して離するが故に。

已に染心といふことを説き明したから、一法界を了せざる義を釋したので、一法界を了せざる義とは即ち眞如平等の理に明かならざる無明の相で、これは信相應地とて信の十位より法界ぽうがいを觀察くわんさつしても無明を察斷し、初地の位じゆちぢ(淨心地)に入り、それより其分に隨て漸次に離れて、佛の境界ほとけのけいがい(如來地)に至りて悉く離るゝことが出来るで、前の六染を他の方面から説明したのであります、これから相應といひ、不相應といふことを釋して、

言相應義者ごんさうおうぎしや謂心念法謂心念法異依染淨差別異依染淨差別而知相緣相而知相緣相同故同故不相應義者ふさうおうぎしや謂即心不覺謂即心不覺當無別異當無別異不同知相緣相不同知相緣相故故

相應の義と言ふは謂く心と念法と異なり、染淨の差別に依りて知相と緣相と同じきが故に、不相應

相應と不



の義とは謂く、心に即する不覺にして當に別異無し、知相縁相を同じうせざるが故に。

とある、これは六染を相應と不相應とに別けて説明してある、其相應といふのは心と念法と異なりとあつて、心といふのは八識心王で、念法とは心所ちやこの心王心所のことは唯識のことを云はねばならぬが、心王といふのは心の主要なる部分心所といふのは此の心王に隸屬したもので、心王は純主觀、心所は同じく心の中であるが、客觀的部分に屬するものと見てよい、併しこゝに主觀といひ客觀といふのは、通常の場合と異つて共に一心の中のことであるといふことを忘れはならぬ、さて此の心王と心所とが相應するので、心王が染なれば心所も染、心王が淨なれば心所も淨と、縁する主躰たる知相(能躰の心王)と、縁せられる所の縁相(所縁の心所)とが同じいからこれが相應で、不相應といふのは眞如の躰を離れぬ無明で、心に即する不覺で、頗る微細なものであるから心王心所なぞといふ別がない、別がないから能縁の知相と所縁の縁相と同すべき筈がない、即ち前きのは阿黎耶の上へ一段の妄をそへたのであるが、不相應は眞心についてをる染汚である、さて此染心といふのは、

煩惱礙と  
智礙

又染心義者、名爲煩惱礙、能障眞如根本智故

又た染心の義とは名けて煩惱礙と爲す、能く眞如根本智を障ふるが故に。

とあつて此六染心は眞理を障へるものであるから煩惱礙といふ、礙はさへるるので、眞如に達する根本智をさへるからである。

無明義者、名爲智礙、能障世間自然業智故

無明の義とは名けて智礙と爲す、能く世間の自然の業智を障ふるが故に。

これは自然に世間に相應して業身を起すところの智を礙へるものであるから、これを智礙といふのである、そこで更らに疑問を起して、

此義云何、以依染心能見能現、妄取境界、違平等性故、以一切法、常靜無有起相、無明不覺、妄與法違故、不能得隨順世間一切境界種種知故

此の義云何ん、染心に依りて能く見、能く現じて妄りに境界を取りて平等の性に違するを以ての故に、一切の法、常に靜にして起相有ること無く、無明覺せず、妄りに法と違するを以ての故に、世



間一切の境界に随順するを得て、種々に知ること能はざるが故に。

とある、この疑は無明こそ真如の根本智を礙するもので、染心といふものはそれより起つたものではないか、それに此染心が能く真如の根本智を礙するといひ、其根本たるべき無明が自然業智を礙するといふのは、前後顛倒してをるではないかといふのである、それを説明して染心といふものは、見相や現相を起して妄りに差別の境界に執着するのであるから、心性の平等を妨げ、眞如根本智を礙へるのである、一切生滅の法も其根本は平等一如で、湛々たる静水、生滅の波は起らぬのである、然るに無明は此法性に違うて起るのであるから、世間一切の境界に随順して知ることが出来ぬ、そこで自然業智をさへへるのであると説いたのであります。

### 十八 生滅の相

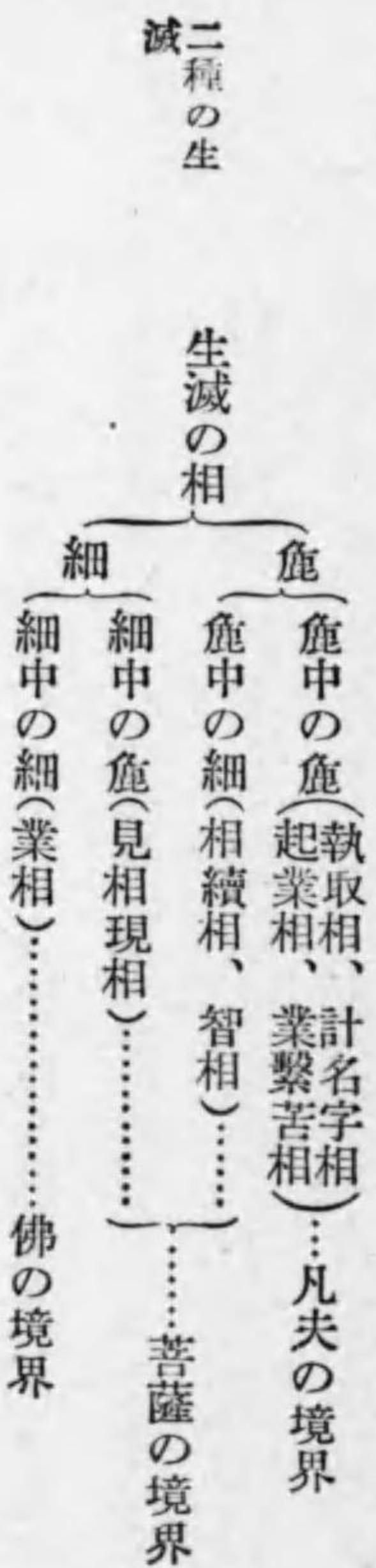
以上で生滅の心と、生滅の因縁とを説き明しました、これから此生滅の相を説くのである、これは前の立義分に心生滅因縁相の故にとある、相のことであります、

麤

復次分別生滅相者有二種云何爲二、一者麤與心相應故、二者細與心不相應故、又麤中之麤凡夫境界、麤中之細及細中之麤菩薩境界、細中之細是佛境界

復た次に生滅の相を分別すれば二種有り、云何か、二と爲す、一には麤、心と相應するが故に、二には細、心と相應せざるが故に、又麤中之麤は凡夫の境界なり、麤中の細と及び細中の麤とは菩薩の境界なり、細中の細は是れ佛の境界なり。

これは讀んで字の通りで、生滅の相を麤と細とに分ち、更に麤中の麤、麤中の細、細中の麤、細中の細といふ四通りにわけたので、前にいふ通りに生滅の相は三細六麤の九相ある、今これを此四つに充てゝ見ると左の如くになります、





これはいふまでもなく、生滅を除いてゆく順序によつて、龜なるものは凡夫尙ほ且つ斷ずることが出来るが、細中の細は佛でなければ斷ずることが出来ぬといふのである、

此二種生滅依於無明熏習而有所謂依因緣依因者不覺義故依緣者妄作境界義故若因滅則緣滅因滅故不相應心滅緣滅故相應心滅

此の二種の生滅は無明熏習に依りて有り、所謂、因に依り、緣に依るとは不覺の義の故に、緣に依るとは妄りに境界を作るの義の故に、若し因滅すれば則ち緣滅す、因滅するが故に不相應の心滅す、緣滅するが故に相應の心滅す。

此二種の生滅といふのは細、龜の二つで、此の細龜の煩惱共に無明によりて起るのでありますから、無明熏習に依りて有りといふたので、これが細龜を通じての原因であります、さて別けてこれをいへば無明は因で、境界は緣であります、そこで因たる無明によつて三相の不相應心を生じ、緣たる境界によつて三相の相應心を出したのであるといふことを、因によるとは不覺(無明)の義の故に、緣によるとは妄りに境界を作るからであるといひ、

さて此根本無明の原因がなくなれば、此無明によつて起るところの三相はなくなる、即ち不相應心が滅するのである、此不相應心が滅すれば、これを緣として起つてをる相應心は滅すべき筈である、然らば此不相應心も相應心が滅するとしたならば、抑も何の法によつて相續するかとの疑である、

相續

問曰、若心滅者云何相續、若相續者、云何說究竟滅、答曰、所言滅者、唯心相滅、非心體滅、如風依水而有動相、若水滅者、則風相斷絕、無所依止、以水不滅、風相相續、唯風滅故、動相隨滅、非是水滅

問て曰く、若し心滅せば云何んぞ相續せん、若し相續せば云何んぞ究竟滅と説かん、答て曰く言ふ所の滅とは唯だ心相の滅なり、心體の滅に非ず、風の水に依りて動相有るが如し、若し水、滅せば則ち風相斷絶して依止する所無し、水滅せざるを以て風相相續す、唯だ風滅するが故に動相隨つて滅す、是れ水の滅するに非ず。

心が滅すればどうして相續してをるか、相續してをるならば究竟滅といへぬではないか



といふのである、それに答へてそれは心相の滅したので、心體の滅したのでない、例へば風が水を動かして波を生ずるやうなもので、水なければ波は滅するが、水の體といふものは不滅なものであるから滅することはない、たと風が止めば波は止むが、水は滅せぬやうなもので、心の相は滅するが、心の體は滅するものでないと答へた、義記に「境界滅するの時心の麁相滅す、心の自體滅するにあらず、無明滅するの時、心の細相滅す、心體の滅するにあらず」といふてある、

次ぎの文に、

無明亦爾依心體而動、若心體滅者、則衆生斷絶、無所依止、以體不滅、心得相續、唯癡滅故、心相隨滅、非心智滅。

無明も亦爾り、心體に依りて動ず、若し心體滅せば則ち衆生斷絶して依止する所無し、體は滅せざるを以て、心相續することを得、唯だ癡滅するが故に心相隨つて滅す、心智の滅するに非ず。

即ち無明も亦其通りで、心體の上につたので、無明が滅したからとて心體が滅したのではない、若し心體が滅するとすれば、衆生は斷絶してしまつて依止する所がない、相は滅

するが體は滅するものでない、即ち心體滅せざるが故に能く相續することが出来る、これは唯だ心體の上につた痴が滅しただけである、心の體たる智の滅したのではないとある、これで生滅の相は大略説いたで、これからは更らに進んで染と淨の關係を説いて淨の眞如、如何にして染の無明を生じ、染の無明如何にして淨の眞智を生ずるかといふことを説かねばならぬ、これが眞如緣起に於て缺くべからざる熏習論であります。

### 十九 熏習を論ず

これから染淨の相互の關係を論ずる熏習論であります、先づ初めに此熏習を四種に分ちて復次有四種、法熏習、義故染法淨法起、不斷絶、云何爲四、一者淨法名爲眞如、二者一切染因、名爲無明、三者妄心、名爲業識、四者妄境界、所謂六塵。

復た次に四種の法熏習の義有るが故に染法、淨法、起つて斷絶せず、云何か、四と爲す、一には淨



法、名けて眞如と爲す、二には一切の染因、名けて無明と爲す、三には妄心、名けて業識と爲す、四には妄境界、所謂、六塵なり。

というてある、この熏習を論ずるのは淨より染を生ずる流轉門を明にし、染を起して淨に入る還滅門を説くので、先づ此四つに分けたのであります、即ち淨法、染法、妄心、妄境界であります、さて熏習といふことを説いて、

熏習の義

熏習義者、如世間衣服實無於香、若人以香而熏習故、則有香氣、此亦如是、眞如淨法、實無於染、但以無明而熏習故、則有染相、無明染法、實無淨業、但以眞如而熏習故、則有淨用。

熏習の義とは世間の衣服實に香無し、若し人香を以て熏習するが故に則ち香氣有るが如し、此れ亦た是の如し、眞如の淨法は實に染無し、但し無明を以て熏習するが故に則ち染相有り、無明の染法は實に淨業無し、但し眞如を以て熏習するが故に則ち淨用あり。

といふ熏習といふのは人の衣服には香はないが、これに香水を以て香を浸ましめて初めて香氣があるやうなもので、眞如は清淨で少しも染汚はないが、無明の爲めに匂はされて染

相あり、無明は染汚てをつて一點の淨いワザはないが、眞如に匂はされて淨き作用があるやうなものであるというて、淨いものが汚れたるものに熏じ、汚れたるものが淨いものに熏ずる、この二つあることを示したので、前者を淨熏といひます、さて然らば、

云何熏習起染法、不斷所謂以依眞如法、故有於無明、以有無明染法、因故即熏習眞如、以熏習故、則有妄心、以有妄心、即熏習無明、不了眞如法、故不覺念起、現妄境界、以有妄境界染法、緣故即熏習妄心、令其念著、造種種業、受於一切身心等苦。

云何んか、熏習し染法を起して斷ぜざる、所謂、眞如の法に依るを以ての故に、無名有り、無名染法の因有るを以ての故に、則ち眞如に熏習す、熏習を以ての故に、則ち妄心有り、妄心有るを以て、則ち無明に熏習す、眞如の法を了せざるが故に不覺の念起つて妄境界を現す、妄境界染法の緣有るを以ての故に則ち妄心に熏習して、其念著して種々の業を造りて一切の身心等の苦を受けしむ。

とこれは、染法の淨法に熏する順序を示したので、善い方へ悪い匂が傳染するさまである、



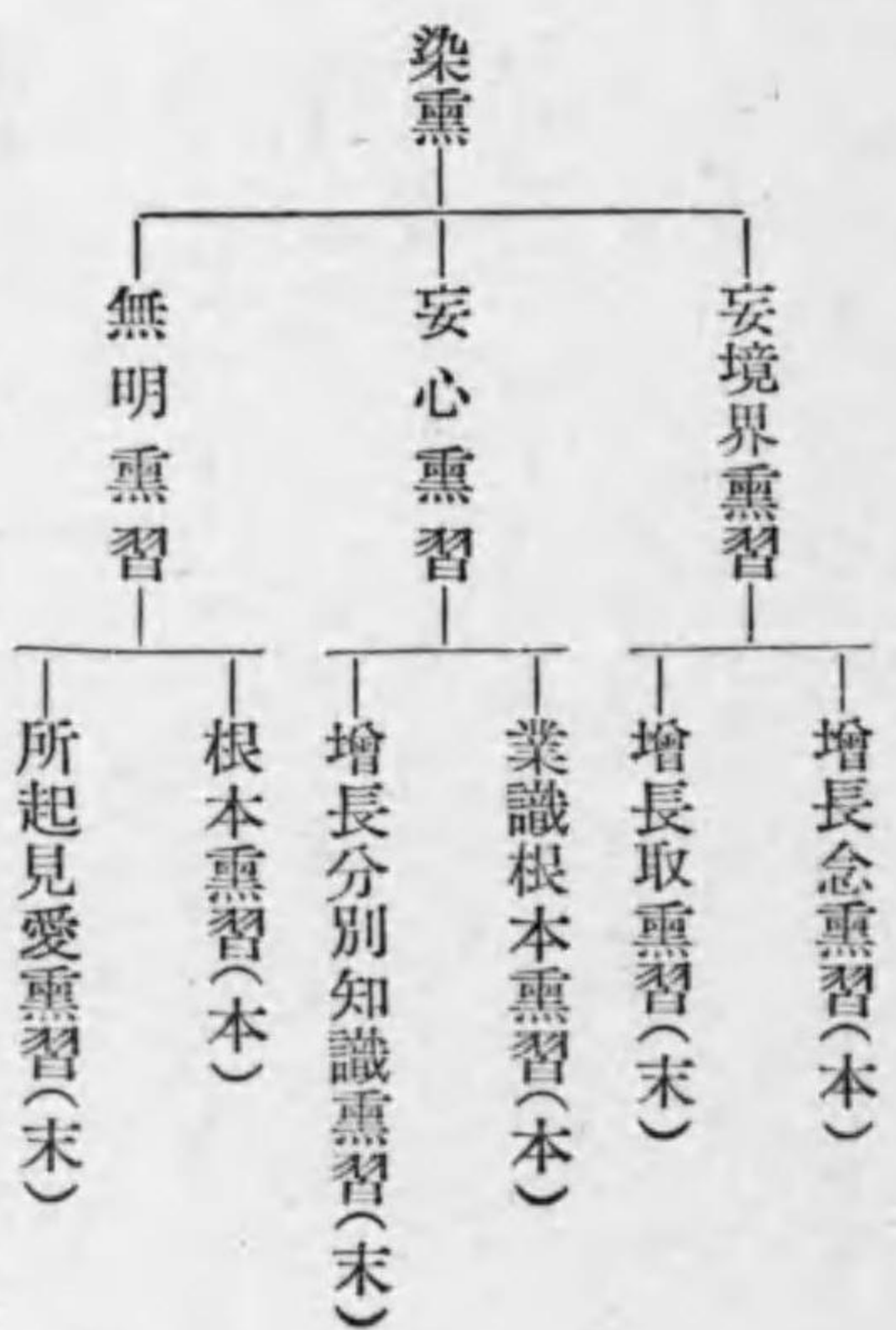




此の妄境界の熏習の義は則ち二種有り、云何んか、二と爲す、一には增長念熏習、二には增長取熏習、妄心熏習の義に二種有り、云何んか、二と爲す、一には業識根本熏習、能く阿羅漢辟支佛一切の菩薩をして生滅の苦を受けしむるが故に、二には增長分別事識熏習、能く凡夫に業繫の苦を受けしむるが故に、無明熏習の義に二種有り、云何んか、二と爲す、一には根本熏習、能く業識を成就する義を以ての故に、二には所起見愛熏習、能く分別事識を成就する義を以ての故に。

といふて二種の重習又各二づゝあります、第一の妄境界熏習は增長念熏習と增長取熏習との二があります、增長念といふのは境界を縁として智相相續相を増長して、いろ／＼な分別の念を起すので、增長取といふのは、執取相計名字相を増長して人我の見を執するやうになるのであります、妄心熏習にも二つある、一は業識根本熏習といふのは、業識が却て無明に熏じて轉識や現相を起して、阿羅漢や辟支佛(二乘)や一切の菩薩をして變易の細苦を受けしむるので、二は增長分別智識熏習で智識や相續識が更らに無明に熏じて執取相計名字相を起し、終に凡夫に業繫苦を受けしむるに至るのであります、無明熏習は又二つあつて、一を根本熏習といひ、根本無明が眞如に熏じてこゝに業識等の三細を生ずるので、二を所起見愛熏習といふので、枝末の無明が境界によつて分別の識を起して迷うたの

であります、されば染熏は本末によつて左の如くになります。



一々これを精細に説明すると頗る緻密に入るので、起信哲學の深奥な所ですが、それは専門の研究に譲り、こゝにはかく精細に區別したといふことを示すに止めておきます、これからは汚れた方が淨くなる淨熏で、

云何熏習起淨法不斷、所謂以有眞如法故能熏習無明、以熏習因緣力故、則令妄心厭生死苦、樂求涅槃、以此妄心有



厭求、因緣故則熏習眞如、自信己性、心妄動無前境界、修遠離法、以如實知無前境界故、種種方便起隨順行、不取不念、乃至久遠熏習力故、無明則滅、以無明滅故、心無有起、以無起故、境界隨滅、以因緣俱滅故、心相皆盡、名得涅槃、成自然業。

云何んか、熏習して淨法を起して斷ぜざる。所謂、眞如の法有るを以ての故に、能く無明を熏習す、熏習の因縁力を以ての故に即ち妄心をして生死の苦を厭ひ涅槃を樂求せしむ、此の妄心に厭求の因縁有るを以ての故に、即ち眞如に熏習す、自から己が性を信じ、心妄りに動じて前境界無しと知りて遠離の法を修す、實の如く前境界無しと知るを以ての故に種々の方便、隨順の行を起して、取せず念せず、乃至、久遠熏習力の故に、無明則ち滅す、無明滅するを以ての故に、心起ることなし、起ること無きを以ての故に境界隨つて滅す。因縁俱に滅するを以ての故に心相皆盡くるを涅槃を得て自然の業を成すと名く。

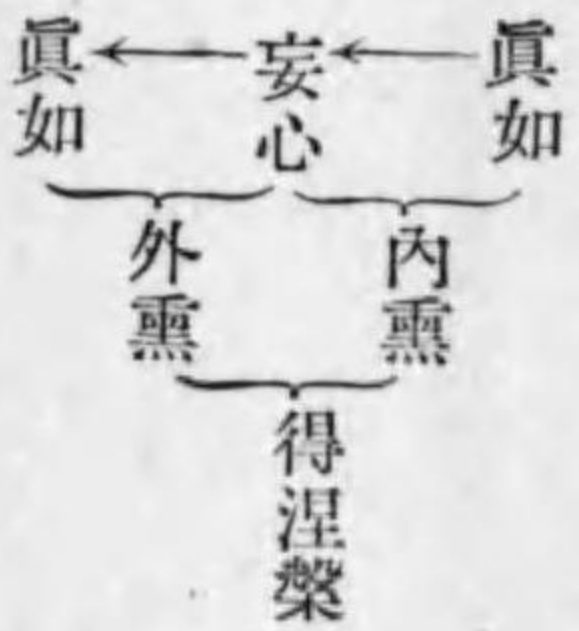
淨熏

これは眞如が能熏となつてゆくので、前のは反對で善くなる方である、即ち染熏は惡を生ずるのであるが、淨熏は善を生ずるのである、抑も此淨熏の起るのは如何なることであ

るかといふに眞如と無明とは相離れぬものであるから、眞如は無明に熏習す、この熏習の因縁力はわれわれの妄心をして生死の苦を厭ひ、涅槃を求めるやうになる、此の生死を厭ひ涅槃を求めるの因縁によつて、更らに眞如に熏習して眞如の勢力を増して、善はいよとく善となり、理はますます明となつて、終に唯心の理を明むるに至るので、さて本文に「自から己が性を信じ、心妄りに動して前境界なしと知て、遠離の法を修し、實の如く前境界なしと知るを以ての故に」とある通り、心の體は少しも動かぬものであるのに、其上にさまざまの妄心を起して種々の境界ありと執するのであるが、今この道理を知つて、種々の方便隨順の行を起して久しく修行してゆけば、終に無明の生滅心はなくなつて不生滅の涅槃を極むるやうになるのである、生死は生滅、涅槃は不生滅のことである、かくの如くにして無明がなくなる、無明がなくなつたから心の起動することはない、心の起動することがなければ境界（即ち客觀界）はすべてなくなる、境界がなければ染熏を起す因縁がなくなる、かく染熏を起すべき因縁が全くなつてしまへば、心相は皆盡きて不生滅の心體が現れ、不思議の業用を成すやうになる、義記に「因は謂く無明、縁は妄境、心相



は謂く染心、此れともに盡くるが故に心體轉依す、涅槃を得ると名く、不思議の業用を起すを自然業と名く」とあります、つまり真如の無明に熏習して、漸次に無明を除いて行くには三段あるので、第一は真如が無明に熏するのでこれを本熏といひ、又内熏といひます、さて此真如が無明に熏じたが爲めに、生死を厭ひ涅槃を求むる心を生じ、これが真如に反熏して唯心無境の理を信するやうになるので、これが第二段です、さて此理を信する結果として、如實修行して涅槃を得るのを第三段とします、併し第三段は第二段の結果で、矢張り妄心の真如に反熏したのに過ぎないのであります、これを合して外熏といひ、



妄心熏習 といふことが出来ます、この二熏こそわれ／＼が迷を轉じて悟を開くの門であります、こゝに於て本論は更らに此淨熏の方、妄心熏習と真如熏習との二に分ちます、先づ、

妄心熏習義有二種、云何爲二、一者分別事識熏習、依諸凡夫二乘人等厭生死苦、隨力所能、以漸趣向無上道故、二者意熏習、謂諸菩薩發心勇猛、速趣涅槃故、

妄心熏習の義に二種有り、云何か、二と爲す、一には分別事識熏習、諸の凡夫、二乗の人等、生死の苦を厭ふに依りて力の所能に従つて漸く無上道に趣向するを以ての故に、二には意熏習、謂く、諸々の菩薩、發心勇猛にして速かに涅槃に趣くが故に。

これは妄心熏習を二つに分けたので、妄心熏習とは前にいふ通り妄心の真如に熏するのであります、これを二に分けて、其一が分別事識熏習、其二が意熏習であります、分別事識熏習といふのは未だ唯心の理を知らずして心外に境界ありと認むるところ、凡夫二乗をして漸次に厭求の心を起さして無上道に向はしむるので意識が真如に熏するのである、意熏習といふのは業識(通じては前の五意)が真如に熏するので、三賢十地の菩薩方は漸次に無上道に向ふのではなく、既に唯心の理を悟つてをるのであるから速に涅槃に赴くのです、

真如熏習 眞如熏習義有二種、云何爲二、一者自體相熏習、二者用熏



習、自體相熏習者、從無始世來、具無漏法、備有不思議業、作境界之性、依此二義、恒常熏習、以有熏習力故、能令衆生厭生死、苦樂求涅槃、自信己身有眞如法、發心修行。

眞如熏習の義に二種有り、云何んか、二と爲す、一には自體相熏習、二には用熏習なり、自體相熏習とは無始の世より來た無漏の法を具す、備さに不思議の業有りて境界の性を作る、此の二義に依りて恒常に熏習す、熏習力有るを以ての故に、能く衆生をして生死の苦を厭ひ、涅槃を樂求し、自から己が身に眞如の法有りと信じ發心修行せしむ。

これは眞如熏習を論じたので、眞如が無明に熏するのです、これに二つある、一は自體相熏習で、これは本體の上からいうたのでありますから、われ／＼凡夫といへども其自體は無始以來、無漏の法とて本覺の法を具へて、不思議なる冥熏の作用があつてさまざまの境界を作るのである、毎度申す通りわれ／＼の心體は眞如である、これが妄心に熏習して生死の苦を厭ひ、涅槃を求むるの心を起さしめ、本覺眞如の相は能熏の心となり、體は所觀の境となつて此心境の、二義に依て斷えず妄心に熏習します、此熏習の方があるものであ

眞如に熏習に對する疑問

るから、衆生をして厭求の心を出さしめて、自ら己が身に眞如の法ありと信じて發心修行せしむるやうになるので、これ實に眞如内熏の力である、さあかういうてくるところに疑ひが出来る、それは若し一切衆生に等しく眞如が熏習するとしたならば、何が故に或る者は信じ、或る者は信ぜぬといふ差別があり、悟つた佛や、迷ふ衆生があるのであるかといふことである、即ち

問曰若如是義者、一切衆生悉有眞如、等皆熏習、云何有信無信無量前後差別、皆應一時自知有眞如法、勸修方便、等入涅槃。答曰眞如本一而有無量無邊無明、從本已來、自性差別、厚薄不同、故過恒河沙等、上煩惱、依無明起差別、我見愛染煩惱、依無明起差別、如是、一切煩惱、依於無明所起、前後差別、唯如來能知故。

問ふて曰く、若し是の如きの義ならば、一切衆生悉く眞如有て等しく皆熏習せん、云何んぞ有信、



無信、無量前後の差別する、皆な應に一時に自から眞如の法有りとなりて勸修方便して等しく涅槃に入るべし、答て曰く眞如は本と一、而して無量無邊の無明有りて、本より已來自性差別、厚薄同じからざるが故に、恒河沙等の上に過る煩惱無明に依りて起て差別有り、我見愛染煩惱、無明に依りて起て差別有り、是の如き一切の煩惱、無明に依りて起る所の前後無量の差別あり、唯だ如來のみ能く知るが故に。

一切衆生に此眞如内熏の力あらば、皆な一時に涅槃に入らるゝではないかとの間に對して、それは眞如は本と一つであるが、此明皎々たる眞如の鏡を掩ひ隠す所の無明には、さまざまあつて厚薄不同があるから、迷ひの程度にさまざまの差別があるので、眞如内熏の力に厚薄のあるのではない、同じ鏡でも其曇りの程度によつて早く磨けるのもあれば、長くかゝるものもあるやうなものだ、「唯如來のみ能く知るが故に」といふは、義記に「此の如き惑性差別して無量前後知り難し故に唯だ佛能く了す」とある、つまり衆生にさまざまの迷ひがあるから、同じ眞如の法を具しながら、かく差別があるといふのです、サテ、

得涅槃の因縁

又諸佛法有因有縁、因縁具足乃得成辨如木中火性是火、

正因若無人、知不假方便、能自燒木、無有是處、衆生亦爾、雖有正因、熏習之力、若不遇諸佛菩薩善知識等、以之爲縁、能自斷煩惱、入涅槃者、則無是處、若雖有外縁之力、而内淨法未熏習力者、亦不能究竟厭生死、苦樂求涅槃。

又諸佛の法、因有り、縁有り、因縁具足して乃ち成辨することを得、木中の火性は是れ火の正因、若し人の知ること無く、方便を假らずして能く自から木を燒く、是の處り有ること無きが如し、衆生も亦爾り、正因熏習の力有りと雖も、若し諸佛、菩薩、善知識等に遇て之を以て縁と爲さずして、能く自から煩惱を斷じ涅槃に入ることとは則ち是の處り無し、若し外縁の力有りと雖も内の淨法未だ熏習の力有らざる者は亦究竟して生死の苦を厭ひ、涅槃を樂求すること能はず。

で、これは凡そ佛教の通則として因縁の和合といふことをいふ、因縁和合せずんば何物も出來るべきではない、例へば木はもとより内に燃える因は持つてをるが、外より火の縁を加へざれば燃ゆることがないやうなもので、われわれ衆生も眞如内熏の正因は持つてをるが、佛菩薩や善知識のこれを誘導し下さるゝ縁がなければ、自ら煩惱を斷じて涅槃に入る



ことは出来ぬ、さて外縁の力があつたからとて、内に正因がなければ涅槃を樂求することは出来ぬ、此の因と縁とが相和合してこそ、無上道に向ふことが出来るので、そのことを  
本文に

若<sup>シ</sup>因縁具足<sup>スレバ</sup>者、所謂自<sup>ラ</sup>有<sup>ニ</sup>熏習<sup>ノ</sup>之力<sup>ニ</sup>、又爲<sup>ニ</sup>諸佛菩薩等<sup>ノ</sup>慈悲願護<sup>セラル</sup>故能起<sup>ニ</sup>厭苦之心<sup>ヲ</sup>、信<sup>シ</sup>有<sup>ニ</sup>涅槃修習<sup>ス</sup>善根<sup>ヲ</sup>、以<sup>テ</sup>修<sup>スル</sup>善根<sup>ヲ</sup>成熟<sup>ス</sup>故、則<sup>チ</sup>值<sup>ヒ</sup>諸佛菩薩<sup>ノ</sup>示教<sup>ヲ</sup>、利喜<sup>シ</sup>乃<sup>チ</sup>能<sup>ク</sup>進趣<sup>シテ</sup>向<sup>テ</sup>涅槃道<sup>ニ</sup>。

若し因縁具足すれば、所謂自から熏習の力有り、又諸佛、菩薩等の爲めに慈悲願護せらるが故に、能く厭苦の心を起し、涅槃有るを信じ、善根を修習す、善根を修習すること成熟するを以ての故に、則ち諸佛菩薩に値ひ、示教利喜して乃ち能く進趣して涅槃の道に向ふ。

とある通り、因と縁とが具足するといふのは、眞如熏習の因と諸佛菩薩の慈悲願護せらるとの縁によつて能く苦を厭ふ心を起し、涅槃あることを信じて善根を修するやうになり、其善根を修したるが故に、諸佛の教に遇ふて涅槃の道に進むことが出来るのである、示教利喜とは其義を示し、其行を教へ、義利を得、行成りて喜ぶといふ意味であります、

サテ以上は、體相熏習のことですが、以下は用のことであります。

用熏習者、卽<sup>チ</sup>是<sup>レ</sup>衆生<sup>ノ</sup>外縁<sup>ノ</sup>力<sup>ニ</sup>、如<sup>シ</sup>是<sup>ノ</sup>外縁<sup>ニ</sup>有<sup>ニ</sup>無量義<sup>ヲ</sup>、略<sup>シテ</sup>說<sup>ク</sup>二種<sup>ニ</sup>、云<sup>ハ</sup>何<sup>カ</sup>爲<sup>ニ</sup>二<sup>ト</sup>、一者差別縁<sup>ニ</sup>、二者平等縁<sup>ニ</sup>、差別縁者、此人依<sup>テ</sup>於<sup>テ</sup>諸佛菩薩等<sup>ノ</sup>從<sup>テ</sup>初發意<sup>ニ</sup>、始<sup>テ</sup>求<sup>ム</sup>道<sup>ヲ</sup>、時<sup>ニ</sup>乃<sup>チ</sup>至<sup>ル</sup>得<sup>ル</sup>佛<sup>ヲ</sup>、於<sup>テ</sup>中<sup>ニ</sup>若<sup>シ</sup>見<sup>ル</sup>若<sup>シ</sup>念<sup>ス</sup>、或爲<sup>ニ</sup>眷屬父母諸親<sup>ト</sup>、或爲<sup>ニ</sup>給使<sup>ト</sup>、或爲<sup>ニ</sup>知友<sup>ト</sup>、或爲<sup>ニ</sup>冤家<sup>ト</sup>、或起<sup>ニ</sup>四攝<sup>ヲ</sup>、乃至一切所作<sup>ヲ</sup>、無量行縁<sup>ヲ</sup>、以<sup>テ</sup>起<sup>ス</sup>大悲<sup>ヲ</sup>、熏習<sup>ノ</sup>之力<sup>ニ</sup>、能<sup>ク</sup>令<sup>テ</sup>衆生<sup>ノ</sup>增長<sup>ス</sup>善根<sup>ヲ</sup>、若<sup>シ</sup>見<sup>ル</sup>若<sup>シ</sup>聞<sup>ク</sup>得<sup>ル</sup>利益<sup>ヲ</sup>、故<sup>ニ</sup>此縁<sup>ニ</sup>有<sup>ニ</sup>二種<sup>ニ</sup>、云<sup>ハ</sup>何<sup>カ</sup>爲<sup>ニ</sup>二<sup>ト</sup>、一者近縁<sup>ニ</sup>、速<sup>ク</sup>得<sup>ル</sup>度<sup>ヲ</sup>、故<sup>ニ</sup>二者遠縁<sup>ニ</sup>、久<sup>ク</sup>遠<sup>ク</sup>得<sup>ル</sup>度<sup>ヲ</sup>、故<sup>ニ</sup>是<sup>レ</sup>近遠<sup>ノ</sup>二縁<sup>ノ</sup>、分<sup>別</sup>復<sup>有</sup>二種<sup>ニ</sup>、云<sup>ハ</sup>何<sup>カ</sup>爲<sup>ニ</sup>二<sup>ト</sup>、一者增長行縁<sup>ニ</sup>、二者受道縁<sup>ニ</sup>。

用熏習とは即ち是れ衆生の外縁の力、是の如きの外縁に無量の義有り、略して説くに二種有り云何んか、二と爲す、一には差別縁、二には平等縁なり、差別縁とは此の人は諸佛菩薩等に依りて初發意に始めて道を求むる時より乃至佛を得るまで、中に於て若くは見、若くは念ず、或は眷屬父母



諸親と爲り、或は給使と爲り、或は知友と爲り、或は冤家と爲り、或は四攝を起す、乃至一切の所作に無量の行縁あり、大悲を起す熏習の力を以て能く衆生をして善根を増長し、若くは見、若くは聞き利益を得せしむるが故に、此縁二種有り、云何んか、二と爲す、一には近縁、速かに度することを得るが故に、二には遠縁、久遠に度することを得るが故に、是の近遠の二縁、分別するに復た二種有り、云何か、二と爲す、一には増長行縁二には受道縁なり、

前の體熏は眞如自體の作用で、我が心の内部より起るのであるが、此用熏習といふのは眞如の相現はれて、佛菩薩となつて外より助くる作用をいふのであるから、さまざまあるが、略して差別縁と平等縁との二とする、其差別縁といふのは初發意にて始めて道を求めまする時から佛果を得まするまで、其人の機感に應じて身形を現じ功徳を念ぜしめ、或る時は其人の父母眷屬となりて慈愛を施し、或る時は給使となつて卑きに居りて之れを助け、或る時は知友となつてこれを獎まし、或る時は冤敵となつて之れを恐れしめ、或る時は布施愛語、利行、同事、(これを四攝法といふ)等の手段を以て善根を増長せしむるので、これに近縁と遠縁との二がある、近縁といふのは根機の熟してをるものは速に度するからかく

名け、遠縁とは根機の未だ熟せざるものは久しき間に亘つてこれを度するからであります、これに就ても亦二つある、一は増長縁とて善根を増長せしむる縁と、受道縁とて妙道を受けしむる縁とであります、これこの區別は衆生の修行にさまざまあるを示して用熏を説いたのです、さて

平等縁

平等縁者一切諸佛菩薩皆願度一切衆生自然熏習恒常不捨以同體智力故隨應見聞而現作業所謂衆生依於三昧乃得平等見諸佛故

平等の縁とは一切の諸佛菩薩皆な一切の衆生を度脱せんと願ひ自然に熏習して恒常に捨てず、同體の智力を以ての故に應に見聞すべきに隨つて作業を現す、所謂、衆生、三昧に依りて乃ち平等に諸佛を見ることが得るが故に。

平等縁といふのは、諸佛菩薩が一切衆生を平等に度脱せしめんと願ひたまふ、大悲は自然に衆生に熏じて攝取して捨てたまはず、月影のいたらぬ里はない、光明遍照十方世界、念佛衆生、攝取不捨で、佛菩薩の大慈悲は衆生の心の中に現じて、不思議の妙益を施した



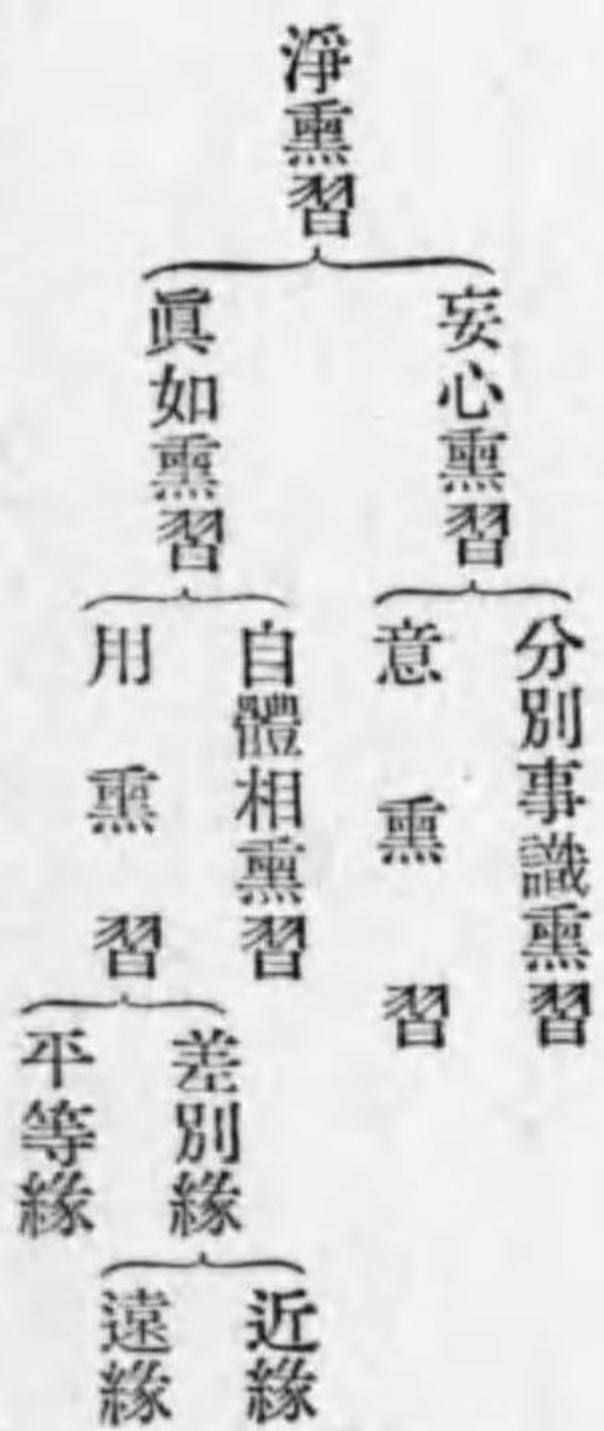
まふので、先きの差別縁は眞如の用大が種々に應化してわれ／＼の外修となるのであつたが、この平等縁は用大が同一様に攝取の業用をなし、常に用て機に應じてゆくので、同體の智力とは常用、隨應とは其用相を示したのである、さういふ次第であるから、十住已上の諸菩薩は三昧力によつて、諸佛の身量平等にして彼此分齊の相なきことを見るのを、「乃ち平等に諸佛を見ることを得るが故に」とあるのである、此の熏習を更に二に分つ、

此、體用熏習、分別復有二種、云何爲二、一者未相應謂凡夫二乘、初發意、菩薩等以意識熏習依信力故、而能修行、未得無分別心與體相應故、未得自在業、修行與用相應故、二者已相應、謂法身菩薩、得無分別心、與諸佛自體相應、得自在業、與諸佛智用相應、唯依法力、自然修行、熏習眞如、滅無明故。

此の外用熏習、分別するに復た二種有り、云何か、二と爲す、一には未相應、謂く凡夫二乘、初發意の菩薩等、意と意識との熏習を以て信力に依るが故に能く修行す、未だ無分別心、体と相應することを得ざるが故に未だ自在業の修行、用と相應することを得ざるが故に、二には已相應、謂く法身の菩薩は無分別心を得て諸佛の自體と相應し、自在の業を得て諸佛の智用と相應す、唯だ法力に依りて自然に修行して眞如に熏習して無明を滅するが故に。

これは、眞如の二熏習を化度せらるゝ人に約して分別するので、一は未相應、二を已相應といひます、未相應といふのは凡夫二乘、初發意の菩薩方は、未だ眞如の理を悟りませぬが、意と意識との熏習によつて之を信じ、説の如くに修行して來りまするので、これは未だ無分別心が妄想の分別を離れたる法身の體と相應しませぬから、自在なる妙用をすることが出來ず、應化身の用と相應せぬ、已相應は初地以上の菩薩は已に妄想分別なき心を得て諸佛の自體と相應し、自在の業用を得て諸佛の智用と相應し、流に従ふて船を下すが如く、法力によつて自然に修行して眞如に熏習して無明を滅するのをいふのであります、上來眞如熏習のことを説き明しましたこれを圖表に示しますれば、左の如くなります。





この近縁、遠縁に各増長行縁と受道縁があります、さて此の淨熏染熏に就て、

復次染法從無始已來熏習不斷乃至得佛後則有斷淨法  
熏習則無有斷盡於未來此義云何以眞如法常熏習故妄  
心則滅法身顯現起用熏習故無有斷

復た次に、染法は無始より已來熏習して斷ぜず、乃至佛を得て後則ち斷ずること有り、淨法熏習は則ち斷ずる有ること無し、未來を盡す、此義云何ん、眞如の法常に熏習するを以ての故に妄心則ち滅す、法身顯現して用熏習を起す、故に斷ずること有ること無し。

これは、染熏は無始却來熏習して斷えないが、佛を得れば滅盡することが出来る、淨熏の方は盡未來際斷滅することはない、何故かといふに、眞如の法が常に熏習するのであるか

ら、妄心が滅すれば滅するほど法身顯れて、それが衆生外縁の用熏習を起して斷ゆることがない、そこで

染熏||無始有終

淨熏||無始無終

といふやうになるのである、以上熏習のことを説き終りました。

### 二十 眞如の三大

立義分に於て大乘を法と義との二に分ちたる事は、讀者の尙ほ記憶せらるゝ處であらう、其中上來は法の解釋に當るので、其法を眞如と生滅との二門となしたる中にては是心生滅因縁相の七字を釋したので、これからは立義分にて大乘の義を體、相、用の三大とした意義を説くのであります。

復次眞如自體相者一切凡夫聲聞緣覺菩薩諸佛無有增  
減非前際生非後際滅畢竟常恒從本已來自性滿足一切

眞如の體  
と相との  
關係



功德所謂自體、有大智慧光明、義故、徧照法界、義故、眞實識知、義故、自性清淨心、義故、常樂我淨、義故、清涼不變自在、義故、具足、如是過於恒沙、不離不斷不異不思議、佛法乃至滿足、無有所少、義故名爲如來藏、亦名如來法身。

復た次に眞如の自體の相は一切の凡夫、聲聞緣覺、菩薩諸佛、増減有ること無し、前際に生ずるに非ず、後際に滅するに非ず、畢竟して常恒なり、本より已來、自性一切の功德を満足す、所謂、自體、大智慧光明の義有るが故に、徧照法界の義の故に、眞實識知の義の故に、自性清淨心の義の故に、清涼不變自在の義の故に、是の如きの恒沙を過ぎ不離不斷不異不思議の佛法を具足し、乃至滿足して少くる所有る事無き義の故に名けて如來藏と爲す、亦如來法身と名く。

眞如の本體は不生不滅不増不減であるから、佛となるも増しもせず、凡夫となるも減りもせず、經對無限で生も滅も増も減もない、そこを前際に生ずるに非ず、後際に滅するにあらずといふたので、際は際限と續く字で時間の制限ぢや、今は無限の時間に亘りてをるかから前際後際の區別もあるべきでなく、畢竟して常恒不變である、これは眞如の本體の無限

の空間に亘り無限の時間を通じて、増減なく生滅なきことを示したのです、かく本體が絶對無限であると共に、此の絶對無限なる眞如には、無始已來無限の功德を圓滿に具足してをるので、其自體には無明の闇を破る大智慧光明の義もあれば、無量の光明を以て徧く法界を照らすの義もありて、無明の妄想がないから、實の如くに識知するの義もある、實の如くに識知するから少しの妄想もない、自性清淨心の義もあり、自性清淨で惑を離れて居るから常樂我淨の義もあるのである、常と申すのは不變、樂といふのは苦を離れたので、我といふのは自由、淨といふのは、清潔で、此四つの徳が圓備するといふ義であります、さてかく清淨であるから、清涼不變自在の義がある、空間的にはこのやうな恒沙（印度の大河恒河の沙といふので澤山あるといふこと）の功德を具足してをつて、しかも眞如の躰を離れず、時間的には三世に亘りて断えざるので、眞如の體はそのまゝに此功德の相、此功德の相はそのまゝに眞如の體で、相異らず、萬頃の波は一如の水、水波不異なる不思議の佛法で、平等一如の中に差別の萬徳を具して、少しも缺くるところはない、ソコで因によつて如來藏といひ、果によつて如來法身といふのであります、以上は眞如の體大と相大



とを説いたので、かく説いてくると一つの疑問が起る。

問曰上説眞如其體平等離一切相云何復説體有如是種種功德答曰雖實有此功德義而無差別之相等同一味唯一眞如此義云何以無分別離分別相是故無二復以何義得説差別以依業識生滅相示此云何示以一切法本來唯心實無於念而有妄心不覺起念見諸境界故説無明心性不起即是大智慧光明義故若心起見則有不見之相心性離見即是徧照法界義故若心有動非眞識知無有自性非常非樂非我非淨熱惱衰變則不自在乃至具有過恒沙等妄染之義對此義故心性無動則有過恒沙等諸淨功德相義示現若心有起更見前法可念者則有所少如是淨法無

法界義

量功德即是一心更無所念是故滿足名爲法身如來之藏

問ふて曰く上に、眞如其の體平等にして一切の相を離ると説く、云何ぞ復た體に是の如きの種々の功德有りと説くや、答て曰く實に此の功德の義有りと雖も、而も差別の相無し、等同一味にして唯だ一眞如なり、此の義云何ん、無分別、分別の相を離るを以て是の故に無二なり、復た何の義を以て差別を説くことを得る、業識生滅の相に依りて示すを以て、此れ云何か示す、一切の法は本來唯心にして實に念無く、而も妄心有りて覺へず念を起して諸の境界を見ることを以ての故に無明と説く、心性起らず、即ち是れ大智慧光明の義の故に、若し心、見を起せば則ち不見の相有り、心性、見を離るれば則ち是れ徧照法界の義の故に、若し心、動有らば眞の識知に非ず、自性有ること無し、常に非ず、樂に非ず、我に非ず、淨に非ず、熱惱衰變して則ち自在ならず、乃至、具に過恒沙等の妄染の義有り、此の義に對するが故に、心性、動なければ則ち過恒沙等の諸の淨功德の相の義、示現すること有り、若し心起ること有りて更に前法の念ず可きを見るは則ち少る所有り、是の如きの淨法の無量の功德即ち是れ一心、更に念ずる所無し、是の故に満足するを名けて法身如來の藏と爲す。

法身如來

これは上の離言眞如の所に、眞如は其體平等にして一切の相を離るといふたのに、今また體に諸種の功德ありといふのは如何なる理由かといふ疑で、これに答へて、眞如の體には



今述る如く諸種の功德はあるが差別の相はない、差別そのまゝに平等で、決してわれ／＼が妄想を以て分別するやうな差別はない、等同一味、唯一眞如であります、そこで妄想分別の相を離れて無二である、然らば此無二にして無差別のものを、何故に差別と説くかとの疑ひが起る、それに答へては、業識生滅の相即ち妄心の前に現れたる差別が、眞如に反映して諸種の功德を現するのであると答へる、それはまた何故かといふに、一切萬法の本體は本來唯心で、眞如平等絶對にして差別はない、然るにこの絶對を知るの明なく、此絶對平等なる眞如に對して差別の妄心を起して、心外に諸種の境界ありと執するやうになるこれを無明といふので、この無明の妄念起らずば即ちこれ大智慧光明であります、若し心に無明の見を起しますれば、こゝに能所の區別生じ主觀客觀を分つやうになる、能所を別ち主客を分つやうでは徧照法界ではないが、此見を離れば眞照圓明で、徧照法界であります、若し心が起れば眞の識知でなく妄識妄智である、心動かされれば自性清淨で眞の識知である、然るに此の心を動かして起すところのものは、皆な無常で、苦で、物我で、不淨であるのに、それをわれ／＼は常なり、樂なり、我なり、淨なりと思ふて執着を起すので、

眞如の本性は決してそんなものではない、苟くも心が動けば煩惱によりて熱惱して清淨でなく、またそれによつて衰變して常住でもなく、又自在でもない、が眞如の本徳はそんなものでなく、清淨で、常住で、自在な、もろ／＼の功德を具へてるのである、若し一念起つて心外に一物でも認むることがあれば、欠くるところがあるが、此の如き淨法無量の功德は皆なこれ一心に具備してるのであるから、法身如來の藏といふのである、以上は眞如の相に萬徳を具してをることを明したので、要は差別を離れた平等はないので、現象即實在論を主觀的に説明したのであります、これからは用大の方で、

眞如の用  
と諸佛

復次眞如用者、所謂諸佛如來、本在因地、發大慈悲、修諸波羅蜜、攝化衆生、立大誓願、盡欲度脫等衆生界、亦不限劫數、盡於未來、以取一切衆生、如己身故、而亦不取衆生相、此以何義、謂如實知一切衆生及與己身、眞如平等無別異故、以有如是、大方便智、除滅無明、見本法身、自然而有不思議業。



種種之用、即有眞如等、徧一切處、又亦無有用相、可得、何以故、謂諸佛如來、唯是法身智相之身、第一義諦、無有世諦境界、離於施作、但隨衆生見聞得益、故說爲用。

復た次に眞如の用とは所謂、諸佛如來、本と因地に在りて大悲を發し諸波羅蜜を修し、衆生を攝化す、大誓願を立て盡く等しく衆生界を度脱せんと欲す、亦、劫數を限らず、未來を盡す、一切衆生を取ることを己が身の如くなるを以ての故に、而も亦た衆生の相を取らず、此れ何の義を以て、謂く如實に一切衆生及び己が身と眞如平等にして別異無きことを知るが故に、是の如き大方便智有るを以て無明を除滅して本法身を見、自然に不思議の業種々の用有り、即ち眞如ありて等しく一切處に徧ず、又た亦用相の得可き有ること無し、何を以ての故に、謂く諸佛如來は唯是れ法身智相の身、第一義諦、世諦の境界有ること無く施作を離る、但た衆生の見聞に益を得るに隨ふが故に説て用と爲す。

これから以下の文は起論信の中でも、さほどむづかしいことはなく、大抵讀んで解釋することが出来るやうであるから、略して大意を話すことゝしやう。

これは眞如の用大を論ずるので、已に體あり、相あれば、其用なかるべからず、土は茶碗の體、茶碗は土の相、此體あり相あつて茶碗の作用があるので、今は無限の空間に亘り、無限の時間を貫いてをる眞如の用を論ずるのであるから、これを人格的にあらはして諸佛如來といひ、諸佛如來の妙用としてこれを説くのである、こゝが佛敎が哲學と其趣を異にして居る宗教的見地で、眞如は宇宙の實在を指すのに相違なく、其體と相との關係を説くのは現象即實在の論據であるが、此現象即實在の上に現はれた宇宙の妙用を、直に人格化して神の顯現として汎神論を立つ、即ち汎神論といふのは宇宙其物を神とするので、佛敎ではこれを佛といふて、其調和の行はるゝを佛の慈悲と見る、即ち諸佛如來が本と因地に於て菩薩たりし時、大慈悲の心を發し、諸波羅蜜（波羅蜜とは到彼岸といふ意で、即ち諸佛如來の彼岸に到るべき方法たる布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智慧等、後にこの解釋をする）を修して一切衆生を攝化せられ、一切衆生を佛の岸に度さんとの大誓願を立て、劫數を限らず未來を盡くす、時間的には何時までといふ限りはなく、空間的には無邊の衆生を等しく度脱せしめんと思ほし召したまひ、一切の衆生を見たまふこと己が身の如くにせらるゝので、これは實に一切衆生と己身とは眞如平等にして別異はないと知らるゝか



らである、若し己れの衆生のとの區別がつけば、その間に輕重が出来る、諸佛如來の慈悲はそんな偏頗なものでない、此の如き大方便智で無明を除滅し、本來本有の法身を證見し、こゝに不思議の業、種々の用があるので、この本有の法身を證見するのは自利、不思議の業用をなすのは利他、自利利他の用、共に眞如の躰と等しく一切處に徧滿してをるもので、別に用相として定りたるものがあるのではない、こゝに於て一つの疑問が起る、義記に「何を以ての故とは責めて云く、佛三身を見ず、何が故ぞ、乃ち用相あることなしといふ」といひ、これを釋して「若し機感を廢すれば如來唯だ是れ妙理の本智にして、更に應化世滯生滅等の相あることなし、但だ縁に隨て用即ち無用なり、波即ち水の如き故に用、恒に寂なり」とある通りで、機に應じ感に應じて其用をなすので、機感なくては唯だ是れ法身智相の身で、用即ち無用である、第一議諦といふべき無相の眞理の上には世諦有相の境界があるべきでない、已に有相の境界がないのであるから、常に湛然寂靜にして施設作爲を離れ、但だ衆生の機に應じて其益を得せしむる、施設窮りないから用とはするので、茶碗の躰は寂靜であるが其必要に應じて作用くやうなものであつて、此用決して躰を離れたの

應身と報身

でない、これから更に用を別ちて

此用有二種、云何爲二、一者依分別事識、凡夫二乗心所見者名爲應身、以不知轉識現故、見從外來、取色分齊不能盡知、故二者依於業識、謂諸菩薩從初發意乃至菩薩究竟地、心所見名爲報身、身有無量色、色有無量相、相有無量好、所住、依果、亦有無量種種莊嚴、隨所示現、即無有邊、不可究盡、離分齊相、隨其所應、常能住持、不毀不失、如是功德、皆因諸波羅蜜等、無漏行熏及不思議熏之所成就、具足無量樂相、故說爲報身。

此の用に二種有り、云何か、二と爲す、一には分別事識に依りて凡夫二乗の心の見る所の者を名づけて應身と爲す、轉識の現ずることを知らざるを以ての故に外より來ると見て色の分齊を取りて盡く知ること能はざるが故に、二には業識に依る、謂く諸の菩薩初發意より乃至菩薩究竟地の心の所



見をば名けて報身と爲す、身に無量の色有り、色に無量の相有り、相に無量の好有り所住の依果亦、無量種々の莊嚴有り、示現する所に隨つて即ち邊有ること無し、窮盡す可からず、分齊の相を離る、其の所應に隨つて常に能く住持して毀せず失せず、是の如きの功德皆な諸の波羅蜜等の無漏の行熏及び不思議熏の成熟する所に因りて無量の樂相を具足するが故に説いて報身と爲す。

先きに用大を説明するには佛陀の方から見て、衆生の方から見なかつたが、今は衆生の方から見て用大を説明するので、其用二種ありと二に分ち、一を應身といひ、他を報身といふので、應身といふのは分別事識に依て凡夫二乗の心を見る所のもので、凡夫二乗は唯心の理を知らず、衆生自心の眞如の用即ち佛陀の教化なり、衆生の眞心即ちこれ佛陀の本躰なることを知らず、妄りに内に六識あり外に六境ありと執してをる、其機に應じて現はれたのがこの應身で、これは第二の轉識の顯れたる第三の現識なることを知らず、外より來りたるものと見て丈六の身、三十二相、八十隨好のものと限て、十方法界に遍滿してをるものであるといふことを知らぬから、これを「色の分齊を取て盡く知ること能はざるが故に」といふてあるのである、サテ其次ぎの報身は、第一の業識によるので、これは諸の菩

薩は前の凡夫二乗と異り、唯心の理を知つて居るから丈六の身、三十二相、八十隨好と限らず、身には無量の色あり、相には無量の好あり、所住の依果亦無量種々の莊嚴ありて、正報たる色身已に無量であるから、其依果（即依報）たる國土も亦此娑婆國土と限らず、いづれの所にも現れて其限りがなく盡くる所もなく、分齊の相を離れ、其所應に隨つて少しも毀失せず、無量無邊であるのである、これらの佛身を觀得するのは、菩薩が始覺の修行と其熏習（外熏）と不思議熏（眞如内熏）とによつて成就するのである、かく應身といひ報身といふのは、其見る所の機に應じての區別で、佛身そのものゝ區別でない、一切の諸佛すべてこれ衆生の機根に應じて現するのである、此理をくわしく觀すれば、佛教を偶像教などと云ふ議論は出したくとも出ないのである、尙ほ之をくわしく説いて

又爲凡夫所見者、是其麤色、隨於六道各見不同種種異類、非受樂相故說爲應身、復次初發意菩薩等所見者、以深信眞如法故、少分而見、知彼色相莊嚴等事、無來無去、離於分



齊、唯依心現不離眞如、然此菩薩猶自分別、以未入法身位、故、若得淨心、所見微妙、其用轉勝、乃至菩薩地盡、見之究竟、若離業識、則無見相、以諸佛法身、無有彼此、色相迭相見、故

又凡夫の所見と爲るとは是れ其の麤色、六道に随つて各々見ること同じからず、種々の異類受樂の相に非ず、故に説いて應身と爲す、復た次に初發意の菩薩等の所見は深く眞如の法を信ずるを以ての故に少分にして見る、彼の色相莊嚴等の事は來無く去無し、分齊を離る、唯だ心に依りて現じて眞如を離れずと知る、然るに此の菩薩猶ほ自から分別して未だ法身の位に入らざるを以ての故に、若し淨心を得れば所見微妙にして其の用、轉た勝なり、乃至菩薩地盡に之れを見ること究竟す、若し業識を離るれば則ち見相無し、諸佛の法身は彼此の色相迭ひに相ひ見ること有ること無きを以ての故に。

これは重ねて應身を分別して説いたので、前にもいふ通り佛身に法身應身の差別があるのではなく、唯だ衆生の機根に應じてこの差別を出すのであるから、凡夫の所見は麤色劣相で天上、人間、修羅、畜生、餓鬼、地獄と六道に隨て、種々の相形を現して各同じから

ずで、(受樂の相にあらずとは、出世の相でないから樂でないとの意味である)二乗の所見には又二乗の所見がある、さて報身の方も菩薩階級の高下に隨て優劣があるので、初發意の菩薩は少分を知てをるのであるから、時間の上に於ては來なく去なき無限、空間の上に於ては分齊と限を離れた無限といふことを知るが、未だ充分でない、若し淨心を得れば初地の菩薩とても所見微妙にして其用轉た勝ぐれてをる、それから菩薩地盡と第十地に至ると盡くこれを見るので、これは即ち法身の位に入つたので、已に業識を離れたのであるから見相がない、見相がないから彼れだの是れだのとの分別することもない、無限絶對で無明そのまゝに眞如なることを知ることが出来るといふので、つまり佛身見得の順序を示して終に現象即實在の妙諦に達し、汎神の奥秘に入ることが出来ること示したのである、サテかうなると反問がある、

問曰、若諸佛法身、離於色相者、云何能現色相、答曰、即此法身、是色體、故能現於色、所謂從本已來、色心不二、以色性即



智<sup>○</sup>故、色<sup>ニ</sup>體無形、說名<sup>テ</sup>智身、以<sup>テ</sup>智性即色<sup>ニ</sup>故、說名<sup>テ</sup>法身<sup>○</sup>徧<sup>ニ</sup>一切<sup>○</sup>處<sup>ニ</sup>。

問うて曰く、若し諸佛の法身、色相を離るれば云何ぞ、能く色相を現ず、管て曰く、即ち此の法身、是れ色の躰なるが故に能く色を現ず、所謂本より已來、色心不二なり、色性即ち智なるを以ての故に色躰無形、説て智身と名く、智性即ち色なるを以ての故に説て法身一切處に徧すと名く。

法身と報  
應二身

といふこの問答にて、佛教を偶像教などといふの妄は明に辨じられてある、それは無明即眞如<sup>○</sup>で、諸佛の法身に色相を離るといふならば、如何にして色身を現するかとの疑ひである、答て曰く、此法身は報、應二身の本體となるのである、此本體が色相を離れてをればこそ、色相ある報應二身と現はれるので、本體たる土に定まつたる形がなければこそ、茶碗とも土瓶とも現するので、土瓶と土との不二なるが如く、本體の上より云へば色心不二である、色の體に一定の形がないところが即ち本覺の心智<sup>○</sup>で、智は即ち色であるから、一つの土のさまざまのものとあらはれるが如く、本體たる法身は一切處に徧<sup>○</sup>く種々の妙用を現するのである、今まこの佛の三身は共に眞如の妙用を説いたのだが、これを更らに體

相用に分ちて左の如くに見ることが出来る。



といふやうに出来る、併しこれは一應の觀察であつて充分ではない、法身已に無礙、衆生の心眼によつて其妙を示す、維摩經に心淨ければ佛土淨しとあるもこれだ、

所現之色、無<sup>○</sup>有<sup>○</sup>分齊、隨<sup>○</sup>心能<sup>○</sup>示<sup>○</sup>十方世界無量菩薩、無量報身、無量莊嚴、各各差別、皆無分齊、而不<sup>○</sup>相妨、此非<sup>○</sup>心識分別、能<sup>○</sup>知<sup>○</sup>、以<sup>○</sup>眞如自在用義<sup>○</sup>故。

所現の色、分齊有ること無く、心に隨つて能く十方世界無量の菩薩、無量の報身、無量の莊嚴を示す、各々差別して皆分齊無し、而して相ひ妨げず、此れ心識分別の能く知るに非ず、眞如自在の用の義なるを以ての故に。

これは前のつゞきで、一切處に法身は徧滿<sup>○</sup>してをるのであるから、其色身も一定の分齊



(制限) あるのではなく、衆生の機感に隨て能く十方世界に無量の菩薩、無量の報身、無量の莊嚴を示すで、いろ／＼の差別の相を現はし種々の作用を爲して、少しも相妨げぬのである、これは到底心識妄相の分別を以て知ることの出来るものではない、實にこれ眞如自在の妙用であります、

以上で、眞如と生滅との二門を別々に説き明しました、次に眞如と生滅との異らざることを示して、この顯示正義を終ります。

## 二十一 眞如と生滅との不異

解釋分の第一を顯示正義といたしまして、上來は其の顯示正義の中で眞如門と生滅門とを別々に説いて、眞如と生滅との一でないといふことを明し、眞如門から生滅門を起す次第を説いたのでありますが、今はこれを結んで眞如門と生滅門との不二であるといふことを示すのでありますから、生滅門から眞如門に歸入する義を顯すのであります。

復次顯示從生滅門、即入眞如門所謂推求五陰、色之與心、

六塵境界畢竟無念、以心無形相、十方求之終不可得、如人迷故、謂東爲西方、實不轉、衆生亦爾、無明迷故、謂心爲念、心實不動、若能觀察、知心無念、即得隨順入眞如門故、

復た次に、生滅門より即ち眞如門に入ること顯示す、所謂、五陰を推求するに色と心となり、六塵の境は畢竟して無念なり、心、形相無く十方に之を求むるに終に得べからざるを以て、人の迷ぶが故に東を謂て西と爲せども方は實に轉ぜざるが如し、衆生亦爾り、無明の迷の故に心を謂つて念と爲す、心は實に動せず、若し能く觀察して心は無念と知れば即ち隨順して眞如門に入ることを得るが故に。

これで顯示正義を結ぶので、一切法は一心より緣起して、更らに一心に歸するので、五陰といふのは新譯では五蘊といひ、色、受、想、行、識の五で、此中、色は形體の上のこと、受と想と行と識とは共に精神上のことで、此五つで一切有爲の法を攝してをるのが佛教の通則で、五蘊皆空といへば一切法は皆な空なりといふのと同じこととなるのだ、五陰を推究するに色と心となりて、一切萬法さまざまに分れに分れてをるが、之を二つにわけ



れば我と我でないものとの二つとなる、其我といふのは主観、我でないといふのは客観、  
佛教では此客観を總稱して色といひ、主観を心といふ。この二つの外には何にもないとい  
ふことは、いづれの哲學者も認めるところであります、即ち

一切法  
主観——我——精神  
客観——非我——物質——色  
受想行識

といふやうに區別するのは、何人も異論のないことであります。さて此二つは別々のも  
のなるかといふに、六塵の境界畢竟して無念なりで、六塵といふたのはわれ／＼の五官  
(眼、耳、鼻、舌、身)と意とによつて見るところの色(眼)聲(耳)香(鼻)味(舌)觸  
(身)法(意)を指すので、凡て客観の境界をいふのだ、この客観の境界はもとこれ心の  
外に實存するものでない、然らば其心は如何なるものかといふに、心に形相なく十方に之  
を求むるに終に得べからずで、長短もなければ方圓もない、青でもなければ黄でもない、  
之が心ぞと認め得べき者はない、主観に形相がなく、客観にも形相はない、人の方角に迷  
うて東を西とするやうなもので、東を西とするも東は矢張東である、それに衆生は無明の

眞如一元

迷の爲めに、元來間違のない方角に迷ふやうに、動かざる心を動くものとしてこゝに諸種の  
妄境界を執するのであるが、心を靜めて心は動かざるもの、無念湛然たるものと知れば、こ  
れが即ち絶對無限の眞如であるといふのであります、即ち眞如(心)色となつて一元、色心の  
二を生じて、これに迷ふのがわれ／＼であるが、其本を質せばたゞこれ眞如であるといふ  
のが大乘起信論の世界観であります、色心不二、主観と客観とは別なものではない、共に  
これ眞如鏡上に映つた影です、これで生滅海上の色心二法ともにこれ眞如と不異なること  
が解ります、

### 二十二 對治邪執

以上で、本論の根本骨子たるべき一心二門三大の義を顯したのでありますから、これ  
からは此正義に反對する邪執を破するので、先きのは顯正これは破邪であります。

對治邪執者、一切邪執皆依我見若離於我、則無邪執、是我  
見有二種、云何爲二、一者人我見、二者法我見。



對治邪執とは一切の邪執皆な我見に依る若し我を離るれば則ち邪執無し、是の我見に二種有り、云  
何か二と爲す、一には人我見、二には法我見なり。

で、邪執とは正しからざる道理を正しと執着するのであります、この邪執の根本は我見  
によるので、我見を離るれば邪執といふ者があるべきではない、我見といふのは我の見る  
ところを正しとしてこれに執着するので、これに二つある、一人は人我見、これを我執と  
いひます、二を法我見、これを法執といひます、先づ此人我見を説いて、

五種の我執

人我見者、依諸凡夫、說有五種、云何爲五、一者聞修多羅說、  
如來法身、畢竟寂寞、猶如虛空、以不知爲破着故、即謂虛空  
是如來性。

人我見とは諸の凡夫に依りて説に五種有り、云何か五と爲す、一には修多羅に如來の法身、畢竟寂  
寞なり、猶ほ虚空の如しと説くを聞き着を破らんが爲なるを知らざるを以ての故に、即ち虚空は是  
れ如來の性なりと謂へり。

初めに人我見を説くに、凡夫達が執してをる我見に五つある、其第一はお經の中に（修

多羅は經の義で詳しくは前に説いてある）如來の法身は畢竟じて寂寞なり、猶ほ虚空の如  
しとあるのを見て、色も形もない空無のものを法身ぞと思ふて居るので、其實空といはれ  
たのは、これは色に執着し、形に執着してをるのを拂はんが爲めに、殊更にかくいはれた  
のであることを知らずに、虚空はこれ如來の性なりと執するもので、これを破るには、

云何對治、明虛空相、是其妄法、體無不實、以對色故、有是可  
見相、令心生滅、以一切色法、本來是心實無外色、若無色者、  
則無虛空之相、所謂一切境界、唯心妄起、故有若心雜於妄  
動、則一切境界滅、唯一真心、無所不徧、此謂如來廣大性智  
究竟之義、非如虛空相故。

云何か對治す、虚空の相は是れ其の妄法なり、體無にして不實なるを明かす、色に對するを以ての  
故に有り、是れ可見の相、心をして生滅せしむ、一切の色法、本來是れ心なるを以て實に外色無し、  
若し色無くんば則ち虚空の相無し、所謂、一切の境界、唯心にして妄りに起るが故に有り、若し心、  
妄動を離るれば則ち一切の境界滅す、唯だ一の真心にして徧せざる所無し、此を如來廣大性智究竟



の義と謂ふ、虚空の相の如くに非ざるが故に。

この人見我を對治するには先づ虚空といふことを明さねばならぬ、元來虚空といふのは萬象に差別を生ずるから、一物と一物との間に虚空（即ち空間）といふてをるので、一物もなければ何を虚空として何を虚空ならずとするか、虚空といふのも妄法で、實にあるのではない、たゞ色に對してかくいふので、一切の色法は本來これ心で、別に色（物）がない、色がなければ虚空の相もない、毎度いふ通り、一切客視の境界といふものは真心の動き出して起るもので、心が妄動を離れてしまへば一切の境界は滅してしまふて、唯一の眞徳のみ遍からざる所がないのである、虚空といふのは周遍の義をあらはす爲めの喩であるのに、これに着して如來これ虚空なりと見たは誤りで、一法界は唯一真心周遍せざるところはない、これを如來廣大性智究竟の義といふので、虚空の相のやうに色に對してある妄法ではない。

二。二者聞修多羅說世間諸法畢竟體空乃至涅槃眞如之法亦畢竟空本來自空離一切相以不知爲破着故即謂眞如

涅槃之性唯是其空云何對治明眞如法身自體不空具足無量性功德故

二には修多羅に世間の諸法は畢竟體空なり、乃至涅槃眞如の法も亦畢竟空、本來自空にして一切の相を離れたり、着を破らん爲と知らざるを以ての故に、即ち眞如涅槃之性、唯だ是れ其れ空と謂へり、云何か、對治する。眞如法身、自體不空にして無量の性功德を具足すと明す故に。

これはお經の中に、世間の諸法は一切空である、乃至眞如涅槃の法も亦空で、本來自ら空にして一切の相を離るゝと説いてあるのを聞いて、眞如涅槃の法もこれなりと執するので、佛の眞意は、世間に於ては此因緣所生の法を實有なりと執着するものがあるから、この迷を覺さんが爲めに御經の中に、しば／＼空と説かれたので、眞如法身の自躰まで空と仰せられたのではない、眞如法身の自躰は不空にして無量の性功德を具してをると説いて、この空の一面に偏して不空の一面を忘るゝものを對治して、不空の旨を顯はすのであります。

三。三者聞修多羅說如來之藏無有增減體備一切功德之法以不解故即謂如來之藏有色心法自相差別云何對治以



唯依眞如義說故。因生滅染義示現說差別故。

三には修多羅に如來の藏、増減有ること無し、體、一切の功德の法を備ふと説くを聞いて解せざるを以ての故に、即ち如來の藏、色心の法の自相差別有りと謂ふ、云何か對治せん、唯だ眞如の義に依りて説くを以ての故に、生滅の染の義に依りて示現して差別と説くが故に。

これは經中に、如來藏即ち眞如は増減なく、一切功德の法を備ふるといふことを誤解して、如來藏にわれ／＼の見る如き色心の法の差別ありと執するので、これを破るに眞如門の方からは増減なしといふが、生滅門の方からは種々の現象を呈すべき差別ありといふのであるのを、此二門を混同して居るのであるから、能く生滅因縁の理を示して此の誤を正さねばならぬ。

四者聞修多羅說一切世間生死染法皆依如來藏而有一切諸法不離眞如以不解故謂如來藏自體具有一切世間生死等法云何對治以如來藏從本已來唯有過恒沙等諸淨功德不離不即不異眞如義故以過恒沙等煩惱染法唯

是妄有性自本無從無始世來未曾與如來藏相應故若如來藏體有妄法而使證會永息妄者則無有是處

四には修多羅に、一切の世間生死の染法は皆如來藏に依りて有り、一切の諸法眞如を離れずと説くを聞いて解せざるを以ての故に、如來藏の自體に具に一切世間の生死等の法有りと謂ふ、云何か對治せん、如來藏は本より已來、唯だ過恒沙等の諸の淨功德有りて不離不即不異の眞如の義を以ての故に、過恒沙等の煩惱の染法唯だ是れ妄有、性自から本無なり、無始世より來た未だ曾て如來藏と相應せざるを以ての故に、若し如來藏の體に妄法有りて而て證會せしめて永く妄を息むれば則ち是の處り有ること無し。

これはお經の中に、一切世間生死の染法は皆な如來藏に依て有りとあり、又一切の染法は眞如を離れずとあるのを誤解して、如來藏即ち眞如の自體に一切世間の染法を具有すると執着するので、これを破るには如來藏の本性は非染、非淨であるから、これに隨緣起動して染となり淨と現はれるので、過恒沙の煩惱の染法といふものは、皆なこれこの非染非淨の如來藏の本體の上に現はれたものに過ぎないのであるから、「妄有にして性自ら本無なり」であるが、如來藏と相應せざるが故にこゝに妄法を生ずるので、妄さへ息めば如來藏中妄ある



の處あることなきのである、よく此理を明して此執着を破らねばならぬ。

五者聞修多羅說依如來藏故有生死依如來藏故得涅槃、以不解故謂衆生有始以見始故復謂如來所得涅槃有其終盡還作衆生云何對治以如來藏無前際故無明之相亦無有始若說三界外更有衆生始起者即是外道經說又如來藏無有後際諸佛所得涅槃與之相應則無後際故

五には修多羅に、如來藏に依るが故に生死有り、如來藏に依るが故に涅槃を得と説くを聞て、解せざるを以ての故に衆生始有りと謂ふ、始を見るを以ての故に復た如來所得の涅槃、其の終盡有りて還つて衆生と作ると謂ふ、云何か對治せん、如來藏は前際無きを以ての故に無明の相も亦始有りと無し、若し三界の外更に衆生有りて始めて起ると説くは即ち是れ外道經の説なり、又如來藏は後際有ること無く、諸佛所得の涅槃も之れと相應して則ち後際無きが故に。

第五の邪執はお經の中に、如來藏に依るが故に生死あり、如來藏によるが故に涅槃を得と説いてあるから、迷の始、迷の原因も如來藏にありて、その爲に衆生、生死に流離すと考へ、

さて又如來所得の涅槃も亦終つて還た衆生となるといふやうに執するのである、それを對治するには如來藏が前際なしで、いつ始るといふことのない無始であると共に、無明も亦無始である、無明も亦無始であるから生死の迷も無始である、それは若し三界の外に衆生ありて始めて生死を起すとすれば、これは外道の見で佛敎ではない、又如來藏に後際なしとて終りがないのであるから、諸佛の得られた涅槃も亦終る時があるのでない、これを誤つて涅槃終るなどといふのは大きな誤である、以上は人我見の五種であるが、次は、法我見

法我見者、依二乘鈍根故、如來但爲說人無我、以說不究竟、見有五陰生滅之法、怖畏生死、妄取涅槃、云何對治、以五陰法自性不生、則無有滅、本來涅槃故

法我見とは二乘の鈍根に依るが故に、如來但だ人無我と説くが爲めに、説究竟せざるを以て五陰生滅の法有りと見、生死を怖畏して妄りに涅槃を取る、云何か對治せん、五陰の法自性不生なるを以て則ち滅有ること無し、本來涅槃の故に。



これは佛が二乗等の根機の鈍劣なものにして對して、我空の理を説て人無我といひ、未だ法空の理を示されぬものであるから、五陰生滅の法あるを見て生滅を怖れて別に涅槃を取らうとし、生死即涅槃の道理を知らぬものがある、これを對治するには此生滅の當體、もとこれ不生滅の涅槃なるを説き示すのである、生死元來國海の波、涅槃はこれ不増不減の水、生もなければ滅もない、此の現象を離れて抑も何處に涅槃を求めん。

復次究竟離妄執者、當知染法淨法、皆悉相待、無有自相可說、是故一切法從本已來、非色非心、非智非識、非有非無、畢竟不可說相、而有言說者、當知如來善巧方便、假以言說、引導衆生、其旨趣皆爲離念、歸於眞如、以念一切法、令心生滅不入實智故。

復た次に究竟して妄執を離るれば當に知るべし、染法淨法皆悉く相待して自相の説く可き有る事無し、是の故に一切の法、本より已來、色に非ず、心に非ず、智に非ず、識に非ず、有に非ず、無

に非ず、畢竟、不可説の相なり、而して言説有るは當に知る可し、如來の善巧方便、假に言説を以て衆生を引導す、其旨趣は皆な念を離れ眞如に歸せん爲なり、一切の法を念すれば心をして生滅して實智に入らざらしむるを以ての故に。

先きの對治して邪執を離れたのちやから、例へて見れば病に應じて藥を與へたやうなものである、そこで其藥の功があつて病氣が全快すれば、最早や病もなければ藥もいらぬこれを究竟して妄執を離るといふのである、染だの淨だのといふのも相待のことで、色といひ心といひ智といひ識といひ有といひ無といふ、皆なこれ言説を假りてをるので、其根本は言説を離れたものである、それに言説のあるのは月を標すに指を以てするやうなもので、月已に知れば指はいらぬ、如來の善巧方便を以て衆生を引導するが爲めに言説があるので、此指を離れて月を認め、念を離れて眞如に歸せしめるのが、まことの實智に入らしむるものであるといふことである、これで對治邪執は終わりました、こゝに人法の二の我見を立て、論ぜられたのは、馬鳴菩薩が本論を造られた當時に行はれたる邪見に對しての辨解であります。